

# 穴田東窯跡 ほか

## 発掘調査報告書

穴田東窯跡第1次、富沢遺跡第151・152次、  
富沢館跡第20・21次、京ノ中遺跡第3次

2022年4月

仙台市教育委員会



あ　な　　だ　　ひ　が　し　　か　ま　　あ　と  
穴　田　東　窯　跡　　ほか  
発　掘　調　査　報　告　書

穴田東窯跡第1次、富沢遺跡第151・152次、  
富沢館跡第20・21次、京ノ中遺跡第3次

2022年4月

仙台市教育委員会



# 序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残っております。これらの一つ一つは、先人たちが残した貴重な文化遺産です。

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災より 11 年が経ち、復興・創生期間 6 年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届や発掘調査の件数は、平成 23 年度以降、震災前を上回る状況が続いております。仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々努めているところです。

本報告書には、各種事業に伴って令和 2 年度から令和 3 年度にかけて発掘調査を実施した、穴田東窯跡第 1 次、富沢遺跡第 151・152 次、富沢館跡第 20・21 次、京ノ中遺跡第 3 次調査の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を伝えるために将来へ守るべき大切な財産です。先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ、次の世代へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い关心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より深く感謝申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。

令和 4 年 4 月

仙台市教育委員会  
教育長 福田 洋之

## 例　　言

1. 本書は、令和2年度から令和3年度にかけて実施された各種開発事業に伴う発掘調査報告書であり、穴田東窓跡第1次、富沢遺跡第151・152次、富沢館跡第20・21次、京ノ中遺跡第3次の各発掘調査報告を合本したものである。
2. 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は及川謙作が行った。  
第1・2・6章—及川謙作　　第3章—早川太陽　　第4章—木村　恒　　第5章—澤目雄大  
遺物の基礎整理～実測図作成—斎野裕彦、澤目雄大、木村　恒、柳澤　楓、向田文化財整理収蔵室作業員  
遺物図・遺構図デジタルトレースー向田文化財整理収蔵室作業員  
遺物観察表作成—斎野裕彦、澤目雄大、木村　恒、柳澤　楓　　遺構註記表作成—各担当職員  
遺物写真撮影・図版作成—向田文化財整理収蔵室作業員　　遺構写真図版作成—各担当職員
3. 本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。
4. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々および事業者から多くのご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。(敬称略)  
株式会社徳田工務店　　副都心開発株式会社　高橋佐代子　大和ハウス工業株式会社　　本多　茂  
株式会社 同事
5. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 本文中の「遺跡と周辺の遺跡図」は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図を、また、「調査区位置図」などは仙台市発行の2千5百分の1都市基本図等を、それぞれ修正して使用した。

2. 図中の座標値は世界測地系を使用している。

3. 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。

SB : 挖立柱建物跡 SD : 堀跡・溝跡 SE : 井戸跡 SK : 土坑 SO : 窑跡 SR : 自然流路跡

SX : 性格不明遺構 P : ピット

4. 遺物の略称は以下の通りである。

A : 繩文土器 B : 弥生土器 C : 土師器 (非クロロ調整) D : 土師器 (クロロ調整)・赤焼土器

E : 須恵器 F : 丸瓦 G : 平瓦 H : その他の瓦 Ia : 土師質土器 Ib : 瓦質土器 Ic : 陶器

J : 磁器 K : 石器・石製品 L : 木製品 N : 金属製品 O : 自然遺物 P : 土製品

5. 土色については、「新版標準土色帳」(小山・竹原 1999)を使用した。

6. 遺構図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。また、各図に必要に応じて凡例を付した。



7. 遺物実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。



8. 遺物観察表の( )がついた数値は図上復元した推定値である。

9. 遺物写真の縮尺は、遺物図版に掲載した同一個体のそれに準ずる。また、異なる場合は各写真図版の右下に表記している。写真掲載のみの遺物は、特別な記載がない限り3分の1で掲載している。

10. 本文中の「灰白色火山灰」(庄子・山田 1980)はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田a火山灰(To-a)」と考えられている。その降下年代は西暦915年と推定されている。

庄子貞夫・山田一郎 1980 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡・昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所

仙台市教育委員会 2000 『沼向遺跡 第1~3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集

小口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田aと白頭山(長白山)を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

11. 穴田東窯跡における自然科学分析(炭化材の樹種同定と花粉分析)に関しては古代の森研究室に業務を委託した。

# 目 次

第1章 調査計画と実績	1
第1節 調査体制	1
第2節 調査計画	1
第3節 調査実績	1
第2章 穴田東窯跡の調査	3
第1節 遺跡の概要	3
第2節 第1次調査	4
1. 調査要項 2. 調査に至る経過と調査方法 3. 基本層序 4. 発見遺構と出土遺物 5. まとめ 6. 穴田東窯跡から出土した炭化材の樹種同定と花粉分析	
第3章 富沢遺跡の調査	35
第1節 遺跡の概要	35
第2節 第151次調査	37
1. 調査要項           2. 調査に至る経過と調査方法 3. 基本層序           4. 発見遺構と出土遺物           5. まとめ	
第3節 第152次調査	56
1. 調査要項           2. 調査に至る経過と調査方法 3. 基本層序           4. 発見遺構と出土遺物           5. まとめ	
第4章 富沢館跡の調査	61
第1節 遺跡の概要	61
第2節 第20次調査	62
1. 調査要項           2. 調査に至る経過と調査方法 3. 基本層序           4. 発見遺構と出土遺物           5. まとめ	
第3節 第21次調査	70
1. 調査要項           2. 調査に至る経過と調査方法 3. 基本層序           4. 発見遺構と出土遺物           5. まとめ	
第5章 京ノ中遺跡の調査	75
第1節 遺跡の概要	75
第2節 第3次調査	75
1. 調査要項           2. 調査に至る経過と調査方法 3. 基本層序           4. 発見遺構と出土遺物           5. まとめ	
第6章 総括	89

# 挿図目次

第1図	令和2～3年度調査地点位置図 (国土地理院地図を一部改変).....	2
第2図	台原・小田原窯跡群周辺遺跡地図 (国土地理院地図・色別標高図使用).....	3
第3図	第1次調査区位置図.....	4
第4図	第1次調査区配置図.....	5
第5図	第1次調査区現況測量図.....	6
第6図	第1次調査区遺構配置図.....	7
第7図	調査区北・東壁、S01・2窯跡、SD1・2溝跡、 1・2号灰原土層断面図 .....	8
第8図	S01窯跡出土遺物 (1) .....	9
第9図	S01窯跡出土遺物 (2) .....	10
第10図	S01窯跡出土遺物 (3) .....	11
第11図	S01窯跡出土遺物 (4) .....	12
第12図	S01窯跡出土遺物 (5) .....	13
第13図	S01窯跡出土遺物 (6) ・1号灰原出土遺物 (1) .....	14
第14図	1号灰原出土遺物 (2) .....	15
第15図	S02窯跡・2号灰原土層断面図 .....	16
第16図	S02窯跡出土遺物 (1) .....	17
第17図	S02窯跡出土遺物 (2) .....	18
第18図	S02窯跡出土遺物 (3) ・2号灰原出土遺物 .....	19
第19図	遺構外出土遺物 (1) .....	20
第20図	遺構外出土遺物 (2) .....	21
第21図	灰原から検出されたシダ植物胞子 .....	25
第22図	富沢遺跡と周辺の遺跡 .....	35
第23図	富沢遺跡 151・152次調査区位置図 .....	36
第24図	第151次調査区配置図 .....	37
第25図	第151次調査区全体平面図 .....	40
第26図	調査区北壁断面図 .....	41
第27図	調査区西壁断面図 .....	42
第28図	調査区南壁断面図 .....	43
第29図	III層およびIV層平面図 .....	44
第30図	VII層平面図 .....	45
第31図	第152次調査区配置図 .....	56
第32図	調査区平・断面図 .....	58
第33図	富沢遺跡における 条里制土地割推定図 .....	59
第34図	富沢館跡と周辺の遺跡 .....	61
第35図	第20・21次調査区位置図 .....	62
第36図	第20次調査区配置図 .....	62
第37図	1トレンチ平・断面図 .....	64
第38図	2トレンチ平・断面図 .....	65
第39図	3トレンチ平・断面図 .....	66
第40図	4トレンチ平・断面図 .....	67
第41図	第21次調査区配置図 .....	70
第42図	第21次調査区平・断面図 .....	71
第43図	富沢館跡 検出溝跡位置図 .....	73
第44図	京ノ中遺跡と周辺の遺跡 .....	75
第45図	第3次調査区位置図 .....	76
第46図	第3次調査区配置図 .....	76
第47図	調査区平・断面図 (1) .....	77・78
第48図	調査区断面図 (2) .....	79・80
第49図	第3次調査区出土遺物 (1) .....	82
第50図	第3次調査区出土遺物 (2) .....	83

## 挿表目次

表1	令和2年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧	2
表2	令和3年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧	2
表3	穴田東窯跡第1次調査区から出土した遺物の破片数および重量一覧表	23
表4	穴田東窯跡出土炭化材の樹種	24
表5	2号灰原1・2層No.3資料から検出された花粉胞子石の一覧表	25
表6	土層対応表	38
表7	遺物観察表	46

## 写真図版目次

写真図版1	穴田東窯跡第1次調査（1）	26	写真図版10	富沢遺跡第151次調査（1）	48
写真図版2	穴田東窯跡第1次調査（2）	27	写真図版11	富沢遺跡第151次調査（2）	49
写真図版3	穴田東窯跡第1次調査 出土遺物（1）	28	写真図版12	富沢遺跡第151次調査（3）	50
写真図版4	穴田東窯跡第1次調査 出土遺物（2）	29	写真図版13	富沢遺跡第151次調査（4）	51
写真図版5	穴田東窯跡第1次調査 出土遺物（3）	30	写真図版14	富沢遺跡第151次調査（5）	52
写真図版6	穴田東窯跡第1次調査 出土遺物（4）	31	写真図版15	富沢遺跡第151次調査（6）	53
写真図版7	穴田東窯跡第1次調査 出土遺物（5）	32	写真図版16	富沢遺跡第151次調査（7）	54
写真図版8	穴田東窯跡第1次調査 出土遺物（6）	33	写真図版17	富沢遺跡第151次調査出土遺物	55
写真図版9	穴田東窯跡第1次調査 出土遺物（7）	34	写真図版18	富沢遺跡第152次調査	60
			写真図版19	富沢館跡第20次調査（1）	68
			写真図版20	富沢館跡第20次調査（2）	69
			写真図版21	富沢館跡第21次調査	74
			写真図版22	京ノ中遺跡第3次調査（1）	85
			写真図版23	京ノ中遺跡第3次調査（2）	86
			写真図版24	京ノ中遺跡第3次調査（3）	87
			写真図版25	京ノ中遺跡第3次調査出土遺物	88

## 第1章 調査計画と実績

### 第1節 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

令和2年度

【文化財課】課長 長島栄一

【調査調整係】係長 平間亮輔 主査 栗和田祥郎 近藤勇亮

主任 及川謙作 小浦真彦 尾形隆寛

主事 澤目雄大 妹尾一樹 相川ひとみ 柳澤 楓 木村 恒

専門員 斎野裕彦 会計年度任用職員 篠原信彦

【整備活用係】係長 工藤慶次郎 主査 元山祐一 総括主任 高橋勝枝

主任 堀越 研 佐藤文征 主事 庄子裕美 五十嵐 愛

令和3年度

【文化財課】課長 都丸晃彦 主査(調整担当) 長島栄一

【調査調整係】係長 平間亮輔

主査 及川謙作 近藤勇亮 菅原翔太 主任 堀江洋介

主事 庄子裕美 澤目雄大 相川ひとみ 柳澤 楓 木村 恒 早川太陽

専門員 斎野裕彦 会計年度任用職員 篠原信彦

【整備活用係】係長 工藤慶次郎 主査 元山祐一 小浦真彦

主任 堀越 研 勝又 康 主事 五十嵐 愛 妹尾一樹

専門員 荒井 格

### 第2節 調査計画

国、宮城県、仙台市が実施する各種の整備事業（公共事業）および民間の開発に伴う発掘調査を想定し、計画した。

### 第3節 調査実績

令和2年度～令和3年度（令和3年2月～令和3年12月）にかけて実施された調査は表1、2の通りで、公共事業が4件、民間開発が25件、合計29件である。本書に収録したのはこのうちの4件と、それ以前に実施した2件の合計6件である。

### 第3節 調査実績

表1 令和2年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

調査番号	公共・民間	道路名	所在地	調査図面	対象面積 (m <sup>2</sup> )	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	遺構・遺物	届出等号	報告書
2-1	82-47 民間	道町瓦雷跡	青葉区道町3丁目	共同住宅	286	42.0	2月 8日～10日	遺構なし・遺物多(埴土内.)	R2 102-90	—
2-2	82-48 民間	宮ノ中通跡(隣接地)	太白区宮ノ北	共同住宅	646	75.0	2月 8日～10日	痕跡2、土坑	R2 102-90	—
2-3	82-52 公共	渋ノ内通跡(注)	宮城野区岩切	道路整理	300	25.0	3月 1日～4日	痕跡2・遺物なし	—	—
2-4	82-53 民間	宮ノ中通跡	太白区宮ノ北	共同住宅	646	267.0	3月 1日～25日	痕跡中	R2 102-90	第3次
2-5	82-57 民間	新小泉通跡	若林区占城3丁目	事務所兼工場	640	54.0	3月 17日～18日	痕跡・遺物なし	R2 102-70	—
2-6	82-58 民間	中田通中通跡	太白区御原6丁目	建売住宅	63	3.0	3月 22日～26日	痕跡・遺物なし	R2 101-436	—

(令和3年2月1日～3月31日)

表2 令和3年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

調査番号	公共・民間	道路名	所在地	調査図面	対象面積 (m <sup>2</sup> )	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	遺構・遺物	届出等号	報告書
3-1	83-1 民間	上村六丁目通跡	青葉区上村6丁目	建売住宅4棟	212	48.0	4月 5～8日	痕跡1、遺物なし	R2 102-113	—
3-2	83-4 民間	下ノ内通跡	太白区長町南4丁目	共同住宅	333	18.0	5月 10～12日	痕跡1、土坑1、遺物少量	R2 102-129	—
3-3	83-5 民間	西行川通跡(注)	宮城野区岩切今市東外	区画整理	480,000	770.0	5月 10日～8月 11日	劣化土器	R3 102-60	—
3-4	83-6 公共	日向通跡	青葉区作字今市東外	国道整理	440	121.0	5月 10日～7月 1日	木柱根、遺物甚少	R2 103-113	■ 406 総
3-5	83-6 公共	死神上中寺跡	前沢区死神上寺町	地区整理	15.0	6月 25日	遺物・遺物なし	—	R2 103-126	—
3-6	83-13 民間	六番通跡	青葉区死神上寺町	共同住宅	158	20.0	7月 8日～30日	遺跡2・灰坑、瓦多量	R3 109-36	第1次
3-7	83-14 民間	渋ノ内通跡	宮城野区計竹子瀬ノ島	建売住宅	61	10.0	7月 19日	土坑1、遺物なし	R3 108-134	—
3-8	83-17 民間	芦ノ内通跡	太白区西郷井神明	建売住宅	172	24.0	8月 2日～4日	痕跡1、ビット3、遺物甚少	R3 109-42	—
3-9	83-18 公共	鶴山通跡	太白区鶴山6丁目	小学校校舎	730	60.0	8月 2日～6日	遺構・遺物なし	R3 102-22	—
3-10	83-19 公共	鶴山C通跡	太白区浅籠立石	浄化槽	8	8.0	8月 10日	埴土内	R3 103-17	—
3-11	83-20 民間	新井通跡	太白区長町南3丁目	共同住宅	354	80.0	8月 23日～10月 20日	木造跡	R3 109-21	■ 151 総
3-12	83-24 民間	八条沢通跡	宮城野区八条入生沢	建売住宅	65	15.0	9月 14日～15日	ビット1、遺物なし	R3 109-70	—
3-13	83-25 民間	御法塙敷A通跡	太白区富沢西2丁目	保育所	1361	36.0	9月 21日～22日	土坑2・ビット5、遺物甚少	R3 109-76	—
3-14	83-26 民間	六・七桂通跡	太白区富沢西3丁目	老人ホーム	1175	60.0	9月 27日～28日	遺構・遺物なし	R3 109-59	—
3-15	83-29 民間	羽黒堂通跡	太白区山田町	建売2棟	184	27.0	10月 18日～21日	埴土内1、遺構・遺物なし2	R3 109-82	—
3-16	83-30 民間	羽黒堂通跡	太白区山田町	建売2棟	130	18.0	10月 22日～25日	埴土内1、遺構・遺物なし1	R3 109-71	—
3-17	83-31 民間	大野通跡	太白区大野5丁目	事務所	347	120.0	10月 25日～12月 24日	痕跡・遺物含括層	R3 108-35	次年度以降
3-18	83-36 民間	御法塙敷B通跡	太白区富沢西4丁目	共同住宅	1523	74.0	12月 13日～14日	遺構なし、遺物甚少	R3 109-87	—
3-19	83-40 民間	宮ノ内通跡	宮城野区宮ノ内3丁目	共同住宅	117	21.0	12月 6日～10日	遺構なし、遺物甚少	R3 109-85	■ 152 総
3-20	83-42 民間	西船越通跡	青葉区上愛子	区画整理	76000	調査中	12月 6日～	調査中	R2 102-130	—
3-21	83-43 民間	新通通跡	泉ヶ丘七北田白木沢	共同住宅	236	27.0	12月 6日	遺構・遺物なし	R3 109-321	—
3-22	83-43 民間	今泉通跡	若林区今泉2丁目	宅地造成	876	90.0	12月 20日～23日	駆除など、面路	R3 109-91	次年度以降

(令和3年4月1日～令和4年12月31日)



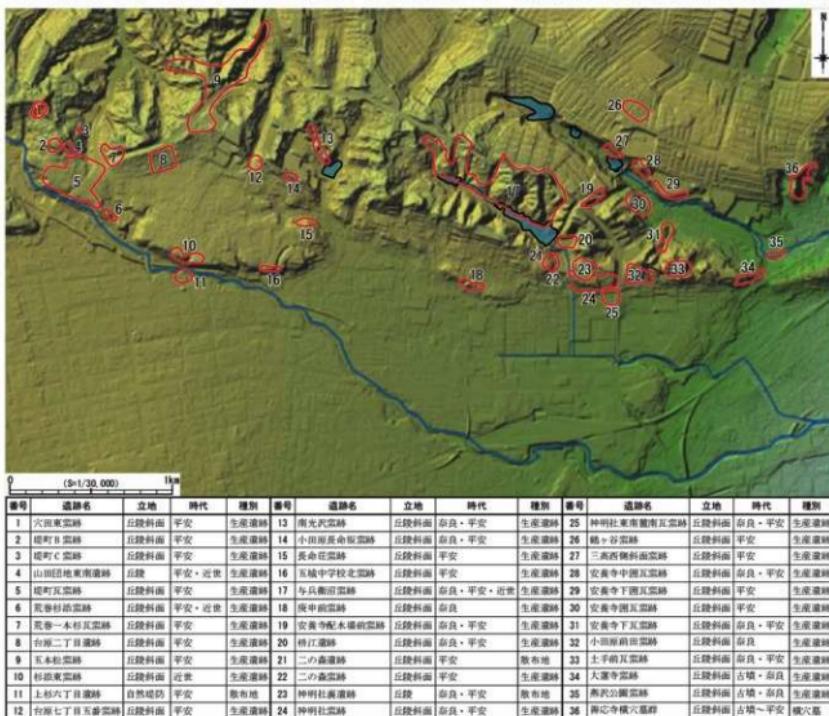
第1図 令和2～3年度調査地点位置図(国土地理院地図を一部改変)

## 第2章 穴田東窯跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

穴田東窯跡は、仙台市青葉区堤町2丁目に所在する。JR北仙台駅の北北東約0.8kmに位置し、台原・小田原丘陵の標高約65～80mの比較的傾斜の急な丘陵の南側斜面に立地する。これまで発掘調査は行われてはいないが、大正時代から遺物が採集され、1974年に遺跡を踏査した際に宝相華文軒丸瓦と、頸部に山形文が施された連珠文軒平瓦が採集されていたことから、9世紀後半以降の窯跡が所在することが想定されていた。

穴田東窯跡の東側、梅田川と七北田川にはさまれた丘陵の標高約27～80mの南側斜面には、古墳時代から平安時代にかけての窯跡群が多数見つかっており、これらは「台原・小田原窯跡群」と総称されている。窯跡群はこれまでに数多くの発掘調査が行われており、5世紀代と7世紀末から8世紀初頭の操業が確認され、8世紀中頃から10世紀中頃まで断続的に須恵器や瓦などを焼成し、陸奥国分寺や国分尼寺、多賀城に瓦を供給していたことが判明している。窯跡は操業時期により立地場所が変化し、下流側にあたる丘陵東側から生産が開始され、時期が経るにつれて上流側に移動することが知られている。窯跡群の存在は戦前から知られていたが、市の中心部に近いことから早い段階から都市化が進み、一時は湮滅したとも考えられていた。実際に湮滅した窯跡も数多く存在するものと推測されるが、昭和40年代に東北学院大学考古学研究部によって分布調査と発掘調査が行われて後に、断続



第2図 台原・小田原窯跡群周辺遺跡地図（国土地理院地図・色別標高図使用）

## 第2節 第1次調査

的に発掘調査が行われその実態が知られるようになってきた。これまで行われた発掘調査例のうち代表的なものとしては、5世紀代に須恵器と、7世紀末に須恵器と瓦を生産していた窯跡が見つかった大蓮寺窯跡<34>や、8世紀中頃の多賀城II期に陸奥国分寺の創建瓦を生産し、また多賀城III～IV期に該当する9世紀半ばにロストル式平窯も用いて瓦を生産していた与兵衛沼窯跡<17>、多賀城II期の瓦窯と土器焼成遺構が検出された蛭江遺跡<20>、多賀城II期のロストル式平窯が複数基検出された神明社（蟹沢中）窯跡<24>、1961年に初めて調査が行われ、半地下式の登窯が5基見つかった安養寺中園瓦窯跡<28>、窯に付随して覆い屋と推定される掘立柱建物跡が検出され、また須恵器専用の窯跡も見つかった五本松窯跡<9>、また今回調査を行った穴田東窯跡の近隣に所在し、灰原の可能性がある土坑から宝相華文軒丸瓦が出土した堤町B窯跡<2>などを挙げることができる。

これまでの発掘調査で総計96基に及ぶ窯跡と、関連する遺構が多数見つかっているが、より多くの窯跡が存在するものと推定されており、須恵器や瓦を焼成した東北地方の最大級の規模を誇る窯跡群であるとされている。

近世においては元禄七（1694）年に仙台藩4代藩主伊達綱村により招請された江戸の陶工、上村万右衛門が陶器を作り、杉村焼と称したと伝えられており、堤町に住む足輕衆の内職として日常雑器が盛んに生産された。近代に入ってからは陶器に加え瓦や人形、土管等の生産を行い、またその名称も「堤焼」という名で一般化し、現在もその伝統が伝えられている。

## 第2節 第1次調査

### 1. 調査要項

遺 跡 名	穴田東窯跡（宮城県遺跡登録番号 01444）
調 査 地 点	仙台市青葉区堤町2丁目1-25
調 査 期 間	令和3年7月8日～30日
調査対象面積	約158m <sup>2</sup>
調査面積	70.88m <sup>2</sup>
調査原因	共同住宅建築およびL型擁壁設置工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主査 及川謙作 主事 早川太陽

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、共同住宅建築およびL型擁壁設置工事に伴い申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和3年6月24日、R3教生文第109-36号で回答）に基づき実施した。当初は申請者に対し掘削が遺構検出面に達すると推定されるL型擁壁設置範囲を対象に確認調査が必要であるとに回答したが、これに先立ち事業者から当該地において令和3年5月12日付で申請者から仮設駐車場設営に伴い提出された「埋蔵文化財発掘の届出」（令和3年5月19日付R3教生文第108-58号で回答）に基づき実施した工事立会いの際、古代の瓦が採集された。またその後6月28日にも現地確認を行ったところ、事業予定範囲から大量の瓦が採集され、また南側の法面を一部精査したところ、基本層とその上面に遺物包含層（本発掘調査の際の1号灰原）が検出され、瓦などの遺物が出土したことから、L型擁壁設置範囲を対象に本発掘調査を実施することになった。

調査は令和3年7月8日に着手した。調査区の掘削に先立ち近隣の3級基準点「QE303801」から基準点の移設を行った。また調査区と周囲の事業予定範囲の微地形計測を行った。調査区は重機によりI・II層を除去し、III層上面で遺構検出作業を行った。その結果、南側の道路に接した範囲は、玉石積み擁壁設置の際の削平を受けているものの、



第3図 第1次調査区位置図

窯跡2基と灰原2基、さらにS01窯跡に付随する形で2条の溝跡(SD1・2)が検出され、各遺構および基本層中から瓦を中心にして多数の遺物が出土した。その後7月21日にS01窯跡の最終焼成面を完掘した状態でドローンにより調査区全景の空撮を行った。7月30日まで調査区内の遺構の完掘および計測等を行い、野外調査を終了した。

遺構の記録は、トータルステーションを用いて遺構平面図( $S=1/20$ )を、また必要に応じて各土層断面図( $S=1/20$ )を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。また遺物が多数出土し、図化が難しい一部の遺構については、デジタルカメラを用いた三次元写真計測を行った。

### 3 基本層序

基本層を大別3層、細別8層確認した。

I a層：10YR4/6褐色粘土質シルトで、層厚は約0～20cmである。既存の共同住宅建築以前の畑の耕作土である。ほぼ均質の層である。

I b層：10YR3/3暗褐色粘土質シルトで、層厚は約0～34cmである。既存の共同住宅建築以前の畑の耕作土である。調査区の北西側で検出された。粘性はやや弱く、しまりが強い。酸化鉄ブロックと瓦を中心とした遺物が多量に混入する。

II a層：10YR4/4褐色粘土質シルトで、層厚は約0～14cmである。ほぼ均質な層である。

II b層：10YR4/6褐色粘土質シルトで、層厚は約0～18cmで、酸化鉄粒を斑状に含む。

II c層：10YR3/3暗褐色粘土質シルトで、層厚は約0～14cmで、酸化鉄粒を斑状に含む。

II d層：10YR4/4褐色の粘土質シルトである。層厚は約0～8cmで、炭化粒を少量含む。

II e層：10YR5/4黄褐色粘土質シルトである。層厚は約0～22cmで酸化鉄粒を斑状に含む。

II層はいずれも2号灰原の上層で検出され、堆積状況から斜面が崩落して二次的に堆積した層と考えられる。

III層：S01窯跡を境に調査区西側は10YR4/6褐色の砂質シルトで粘性は弱く、しまりが強い。東側は10YR6/6明黄褐色粘土に漸次的に変化し、粘性もやや強くなる。今回の調査の遺構検出面である。

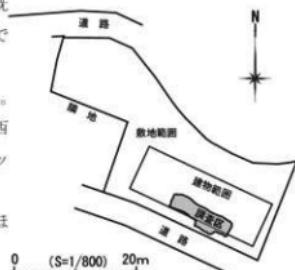
### 4 本発掘調査の発見遺構と出土遺物

本発掘調査に先立ち当該地の現地踏査を行った際に、既存共同住宅の解体後であったがわずかながらも敷地の中央部が高く、周間に向かって落ち込む様子が観察されたことから、調査区およびその周囲の地形の現況計測を行った。本発掘調査後に遺構平面図と合成したところ、S01窯跡の延長部分が最も標高が高くなることが判明した。

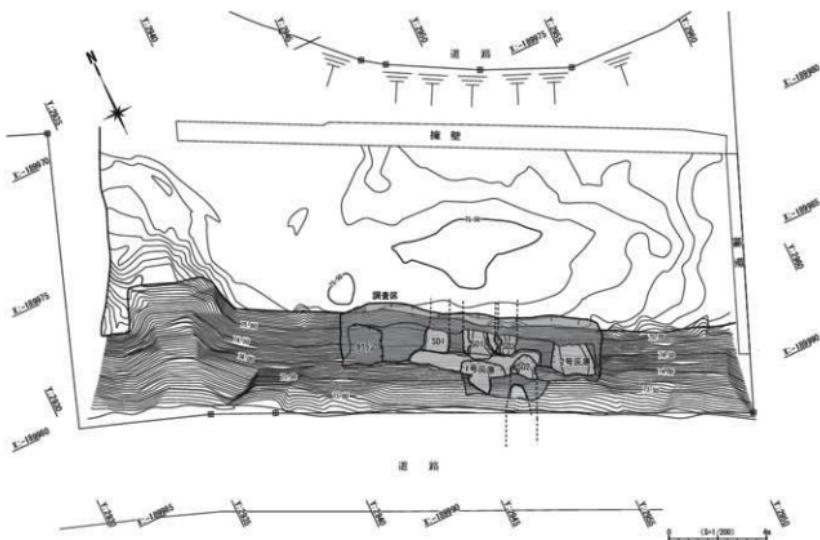
遺構は窯跡2基と溝跡2条、灰原が2基検出された。また各遺構および調査区の盛土およびIII層より上層の各遺構からは平瓦を中心とした遺物が大量に出土した。

#### S01窯跡・SD1・2溝跡・1号灰原

調査区の中央部で検出された。S01窯跡の東西にSD1・2溝跡が、南側に1号灰原が位置しており一連の遺構群を形成している。特にS01窯跡と1号灰原は一連の堆積状況を示している。1号灰原の南側は既存の玉石積み擁壁設置に伴う掘削により削平を受けている。重複関係からS02窯跡よりも新しい。また1号灰原東側の上層には2



第4図 第1次調査区配置図



第5図 第1次調査区現況測量図

号灰原の堆積土が堆積している。

S01 窯跡は燃焼部が検出された。検出長約 1.2 m、横幅約 1.4 ~ 1.5 m、深さは約 60 cmで断面形状は半円形を呈している。1号灰原の範囲で検出された前庭部も含めた傾斜角は約 14° である。壁面および底面は比熱により赤褐色に硬化している。

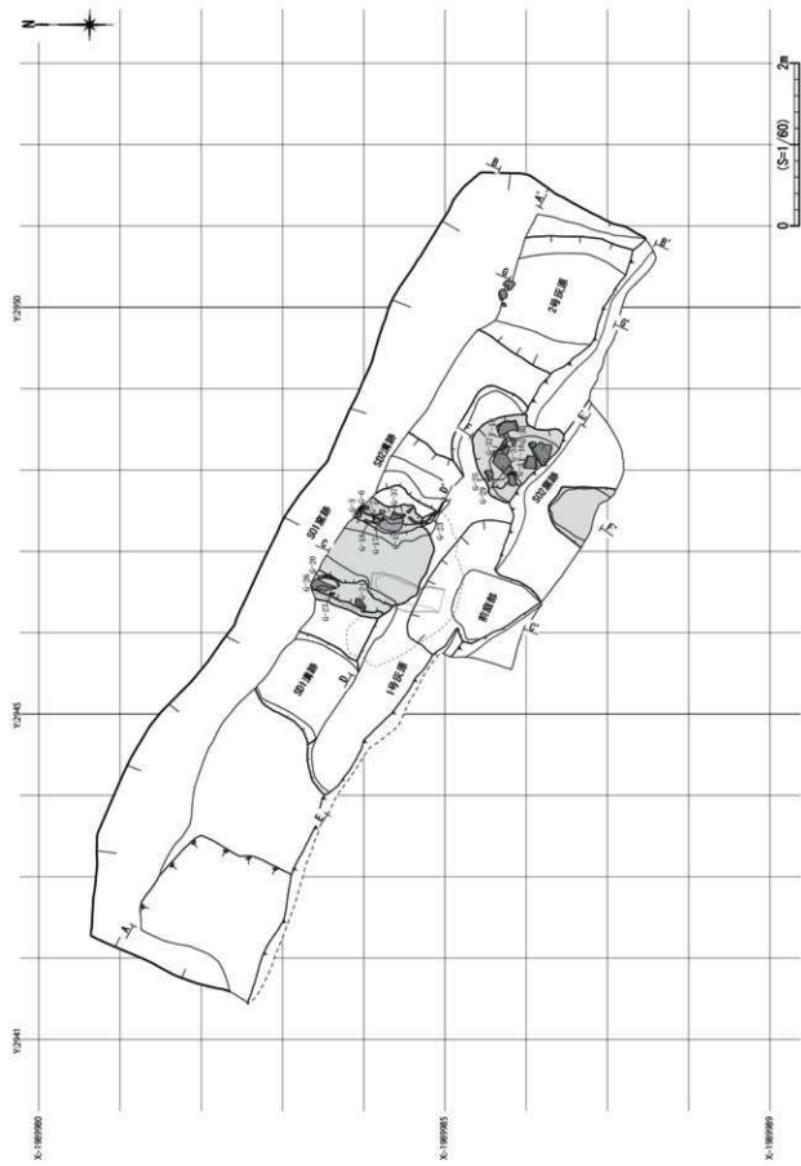
S01 窯跡の南側からは 1号灰原が検出された。検出長約 1.7 m、横幅 5.4 mで、深さは約 10 ~ 40 cmである。S01 窯跡の前面に落ち込みが存在し、窯の作業用のスペースの前庭部であると考えられる。

S01 窯跡の東西には SD1・2 構跡が窯に並行する形で検出された。SD1 は検出長約 95 cm、幅は約 1.2 m、深さは約 10 ~ 12 cmで、断面形状は浅い皿型を呈している。SD2 構跡は窯と平行しつつもやや西側に張り出す箇所がある。検出長約 88 cm、幅約は 62 ~ 84 cm、深さは約 18 ~ 23 cmである。断面形状はやや開いた U 字型を呈し、底面は丸い。堆積土はいずれも単層で炭化粒や焼土粒が混入する。

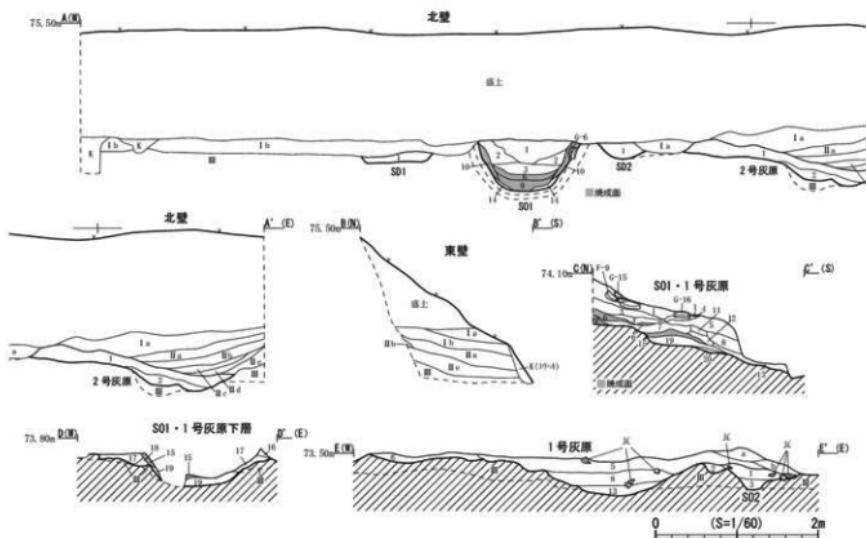
S01 窯跡は底面も含めて 3 回の焼成面が確認された。1 層は基本層III層由来のブロックが主体で、炭化粒や焼土粒が多量に混ざり、また完形に近い平瓦が窯の中軸線上を中心に一定量出土したことから、平瓦を裏込めとして利用した半地下水式窯の天井部分の崩落土の可能性がある。堆積土のうち 6・9・10・15・18 層が焼成に伴う層であり、いずれの層も綺まりが強く、非常に強く硬化している。堆積土中には焼土や炭化物などを含み、また窯の壁面付近に貼り付けられていた 10 層は基本層III層由来のブロックが主体で、熱を受けて硬化した壁面補修の裏込め層であると考えられる。10 層には平瓦が重層的に立てかけられるような形で据えられていた。

窯の堆積土のうち 6・10 層が最終焼成面で、9・10 層が第 2 次焼成面、15・18 層が第 1 次焼成面である。16・17・19・20 層は窯での焼成以前の掘り込みで、焼きしまった層は存在しないものの炭化物や焼土粒を比較的多く含み、前庭部と共に S01 窯跡構築以前の何らかの施設の一部であった可能性がある。

遺物は各層から平瓦を主体として多量に出土した。出土遺物の総重量は約 98.9 kgで、その内 79% の約 77.8 kg



第6図 第1次調査区遺構配置図



遺構名	部位	色調	土質	備考・混入物	遺構名	部位	色調	土質	備考・混入物
SO1 + 1号灰原	1	10YR1/4 黄褐色	粘土質シルト	基本層面層ブロック土体。焼土ブロックを少量含む。藍天色削落土。	SD1	15	7.5IR3/3 暗褐色	シルト	焼成面。
	2	10YR1/4 黄褐色	粘土質シルト	焼化物を斑状に含む。		16	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	基本層面層土体。焼化物を少量含む。
	3	7.5YR4/4 創褐色	粘土質シルト	焼土ブロックを斑状に多量。焼化物を少量含む。藍天色削落土。		17	10YR4/6 黄褐色	粘土質シルト	基本層面層土体。
	4	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	焼土ブロックを斑状に含む。		18	2.5YR4/6 黄褐色	粘土質シルト	基本層面層土体。焼土ブロックを斑状に含む。
	5	10YR2/2 黑褐色	シルト	焼土ブロック、焼化物を斑状に多量含む。		19	10YR4/6 黄褐色	粘土質シルト	基本層面層ブロック土体。焼化物を少量含む。
	6	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	焼土、焼化物を少量。焼化物を斑状に含む。		20	7.5IR3/4 暗褐色	粘土質シルト	基本層面層ブロック下端土の端に焼成土塊。焼化物を斑状に含む。焼土ブロックを少量含む。
	7	10YR3/4 暗褐色	粘土	基本層面層ブロック土体。焼土を少量含む。焼成面。		8	10YR4/2 黑褐色	粘土質シルト	基本層面層ブロック下端土の端に焼成土塊。焼土ブロックを少量含む。
	8	10YR2/2 黑褐色	シルト	焼土を斑状に多量。焼化物を斑状に含む。		9	10YR2/2 黑褐色	シルト	焼化物を少量。焼土ブロックを斑状に含む。
	9	10YR2/2 黑褐色	シルト	焼土ブロック、焼化物を多量に含む。		10	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	下部に焼土を多量。焼化物を斑状に含む。
	10	7.5YR4/4 暗褐色	シルト	焼土ブロック土体。焼成面。		11	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	基本層面層ブロック、焼化物、焼土ブロックを斑状に含む。
	11	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	焼土を少量。基本層面層ブロックを斑状に含む。作業面。		12	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	焼土を少量含む。1層同一。
	12	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	基本層面層ブロックを少量。焼土。焼化物を斑状に多量に含む。		13	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	焼土ブロックを斑状に含む。
	13	10YR2/2 黑褐色	シルト	基本層面層ブロックを少量。焼土。焼化物を斑状に多量に含む。		14	10YR5.3/12.3/4A 黑褐色	粘土質シルト	焼化物をやや多量。焼化物ブロックを斑状に含む。
	14	10YR1.7/1 黒色		黒鉛鉱。		15	10YR5.3/12.3/4A 黑褐色	粘土質シルト	下部との間に焼成跡堆積。

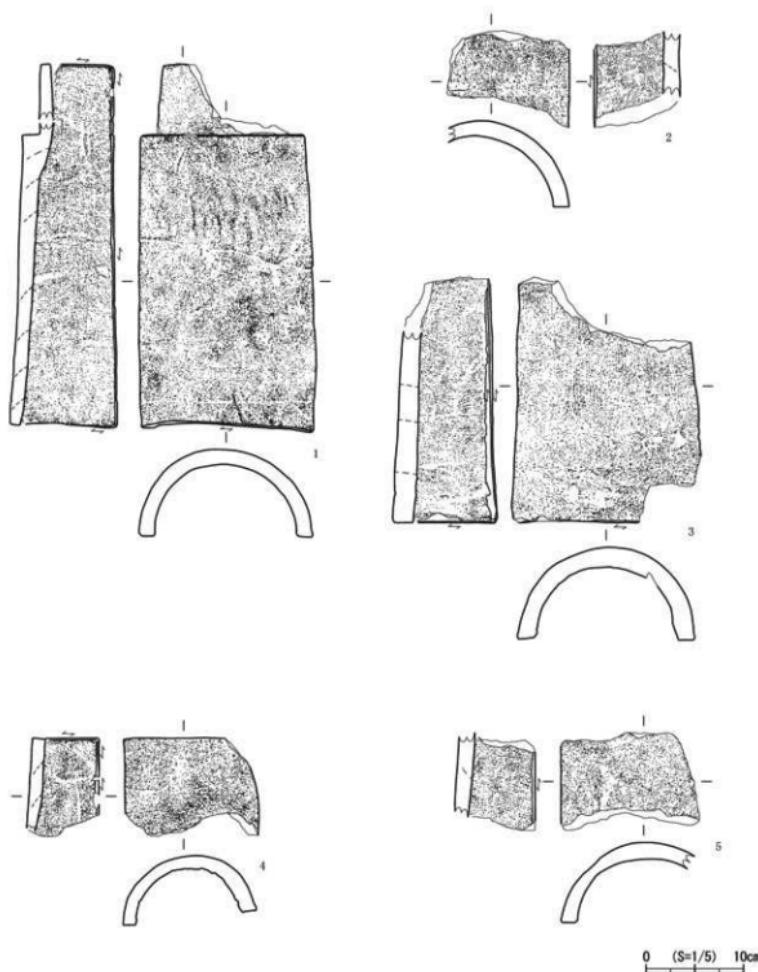
第7図 調査区北・東壁、SO1・2窯跡、SD1・2溝跡、1・2号灰原土層断面図

が平瓦であった。丸瓦は 18.3 kg で約 18% を占める。またそれ以外にも軒丸瓦、軒平瓦などが少量出土している。その内の平瓦 14 点、丸瓦 5 点、軒平瓦 2 点を図化した。

### S02 窯跡

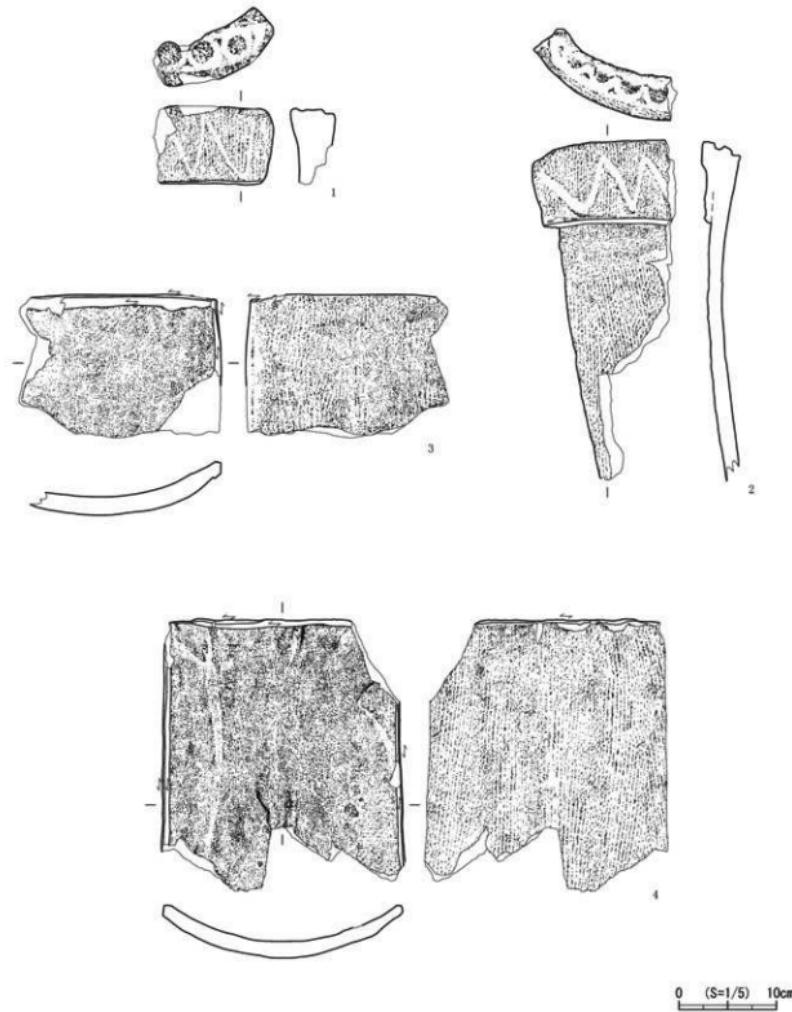
調査区中央のやや東側、1号灰原の下層で検出された。検出されたのは窓の先端部分で、検出長は約 1.9 m、幅は約 1.1 m、深さは約 25 cm、底面の傾斜角は約 20° で、断面形状はやや開いた U 字型を呈するが、底面は部分的に凹凸が存在する。堆積土は 4 層確認された。

遺物は 1 層を中心平瓦を主体として多量に出土した。出土状況に遺物を規則的に配置した様相は見受けられず、



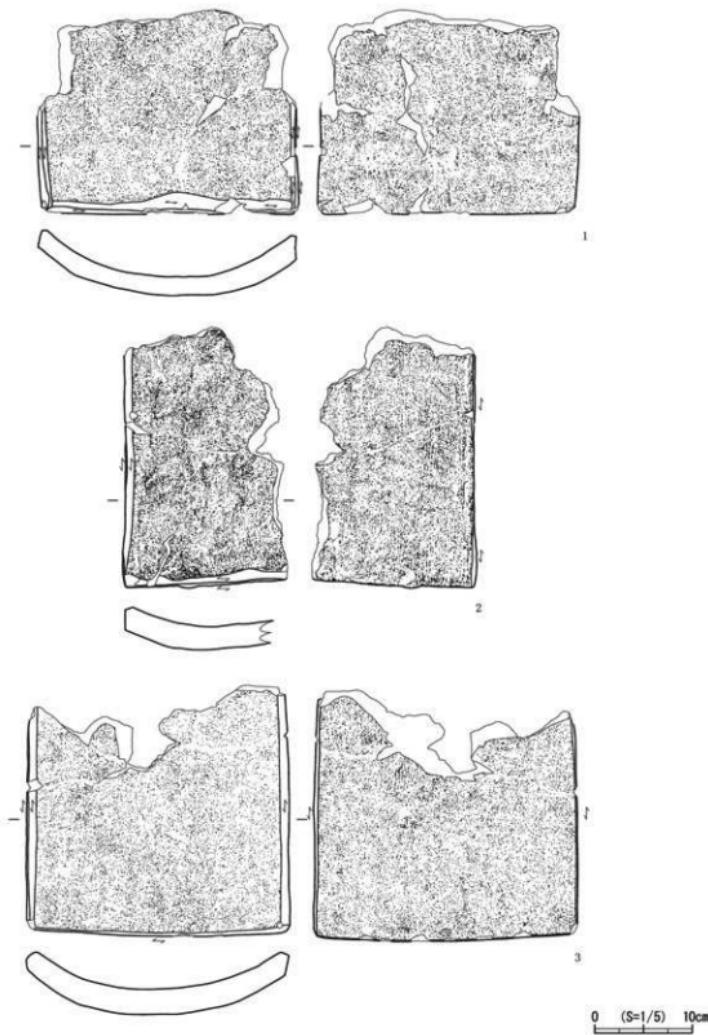
図版 番号	骨格 番号	出土 状態	層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	横幅 (cm)	厚さ (cm)	分類	備考	写真 番号
1	F-9	501	1	丸瓦	37.2 37.2	17.8	17.6 13.7	16.6	1.5		凸面：溝印き→ナゲ 凹面：粘土粗粒→布目板→ナゲ	3-1
2	F-10	501	—	丸瓦					1.7		凸面：溝印き→ナゲ 凹面：粘土粗粒→布目板	3-2
3	F-11	501	—	丸瓦	18.2	(19.7)			2.1		凸面：溝印き 凹面：粘土粗粒	3-3
4	F-12	501	—	丸瓦？	13.6				1.5		凸面：溝印き→ナゲ 凹面：粘土粗粒→布目板	3-4
5	F-13	501	—	丸瓦					1.7		凸面：溝印き→ナゲ 凹面：粘土粗粒→布目板	3-5

第8図 S01窯跡出土遺物(1)



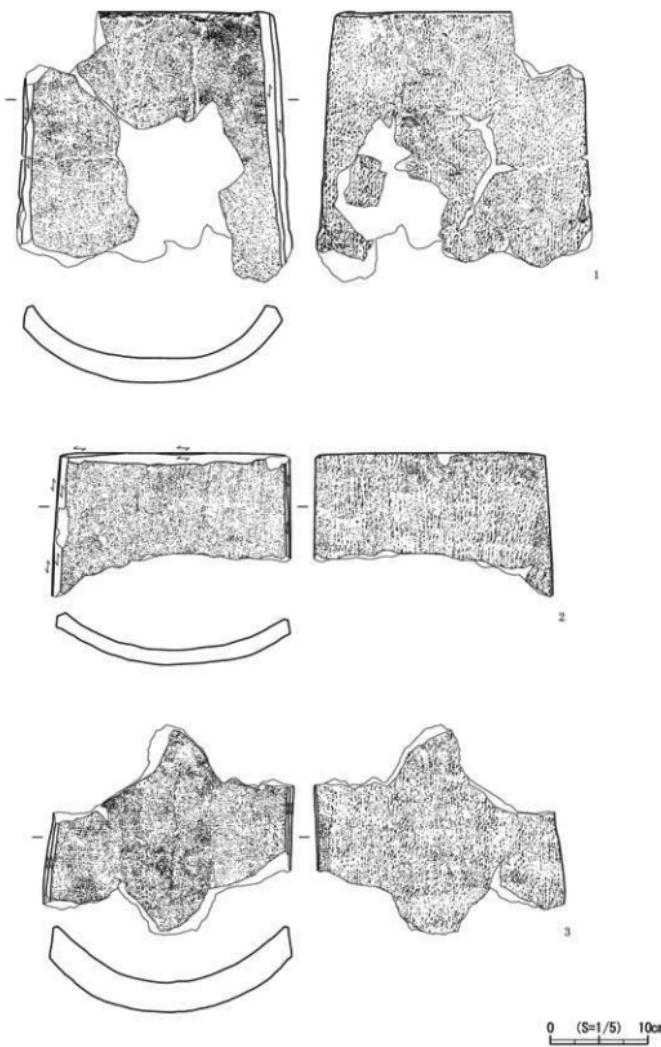
器種 番号	器種 番号	出土 遺構	層位	種別	高さ (cm)	幅 (cm)	広幅幅 (cm)	狭幅幅 (cm)	厚さ (cm)	瓦当面 長さ (cm)	瓦当面 幅さ (cm)	分類	備考	写真 番号
1	G-3	S01	10 築 直上	斜平瓦						4.6			瓦当面：溝窓文范押し→圓印き→山形模範文。凸面：不明。凹面：不明。多質階分類831a。鎌魚頭分類分類第二類に相当。	3-7
2	G-6	S01	1	斜平瓦					1.7	3.6 ~ 4.4			瓦当面：溝窓文范押し→圓印き→上端部ケズリ。凹面：圓印き→山形模範文。凸面：不明。多質階分類831a。法奥国分寺分類第二類に相当。	3-8
3	G-16	S01	1	平瓦					2.0	-	-	A	凸面：圓印き。凹面：布目瓶。	3-9
4	G-17	S01	-	平瓦	24.6	(23.7)	1.7	-	-	A	凸面：圓印き。凹面：布目瓶。	3-10		

第9図 S01 窯跡出土遺物 (2)



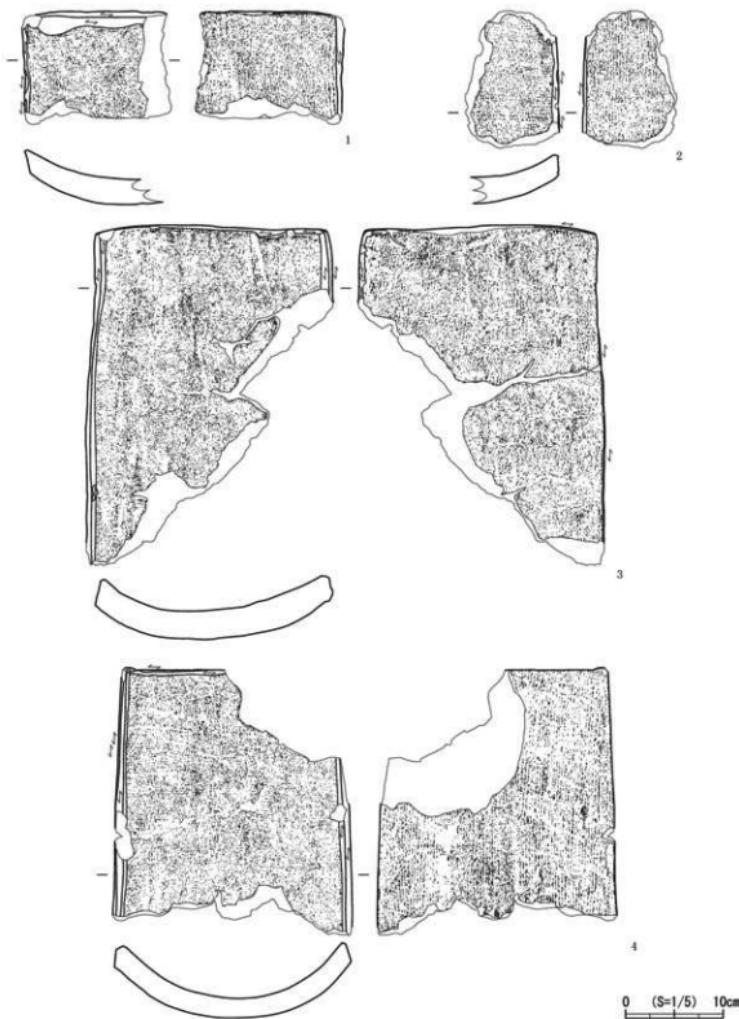
第10図 S01 塵跡出土遺物 (3)

器形 番号	骨格 番号	出土地 名	部位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	広幅 (cm)	狭幅 (cm)	厚さ (cm)	分類	備考	写真 番号
1	6-15	503	1	平瓦	26.4	26.2			2.4	A?	凸面：縦溝叩き ケズリ ナグ 凹面：布目模、余切り版	4-1
2	6-16	503	10 瓦置上	平瓦					2.6	B	凸面：縦溝叩き→叩きのつぶれ 凹面：布目模→ナグ	4-2
3	6-19	503	10 瓦置上	平瓦	27.0	26.9			2.5	B	凸面：縦溝叩き→叩きのつぶれ 凹面：布目模→ナグ	4-3



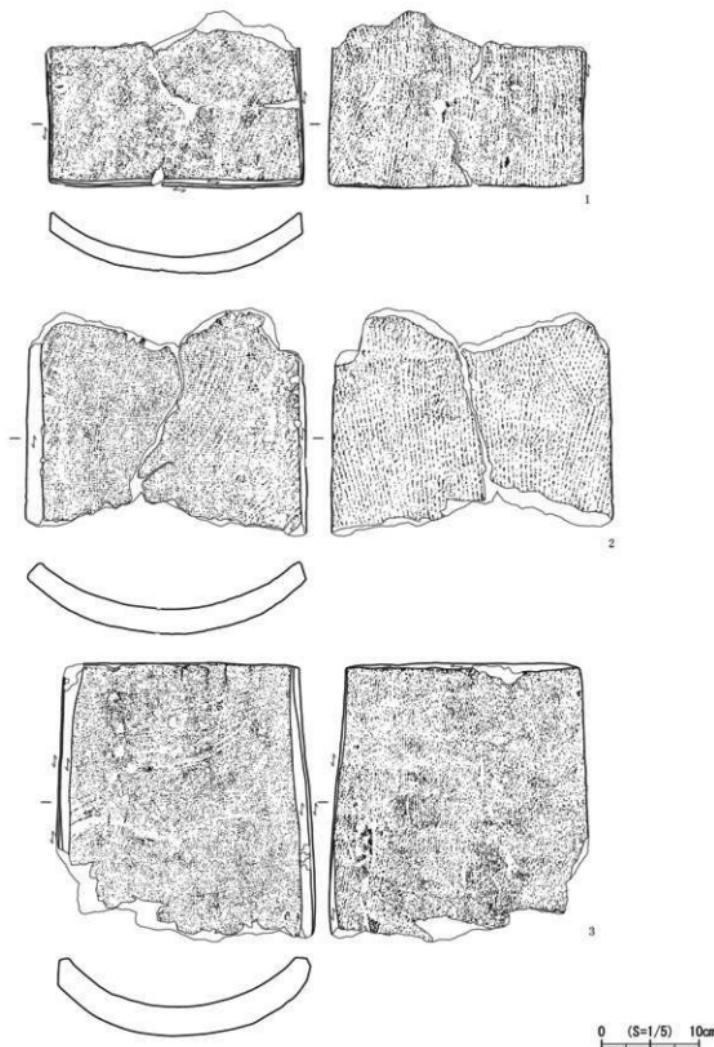
第11図 S01 窯跡出土遺物 (4)

器形 番号	骨格 番号	出土 遺物	部位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	断面幅 (cm)	厚さ (cm)	分類	備考	器形 番号
1	G-20	S04	10層直上	平瓦	26.7		(25.3)	2.5	A	凸面: 緩溝叩き 固面: 布目瓶	4-4	
2	G-22	S09	壁面上	平瓦	23.9		23.5	1.7	A	凸面: 緩溝叩き 固面: 布目瓶	5-1	
3	G-23	S01	壁面上	平瓦	25.1			3.4	A	凸面: 緩溝叩き 固面: 細切り瓶→布目瓶	5-2	



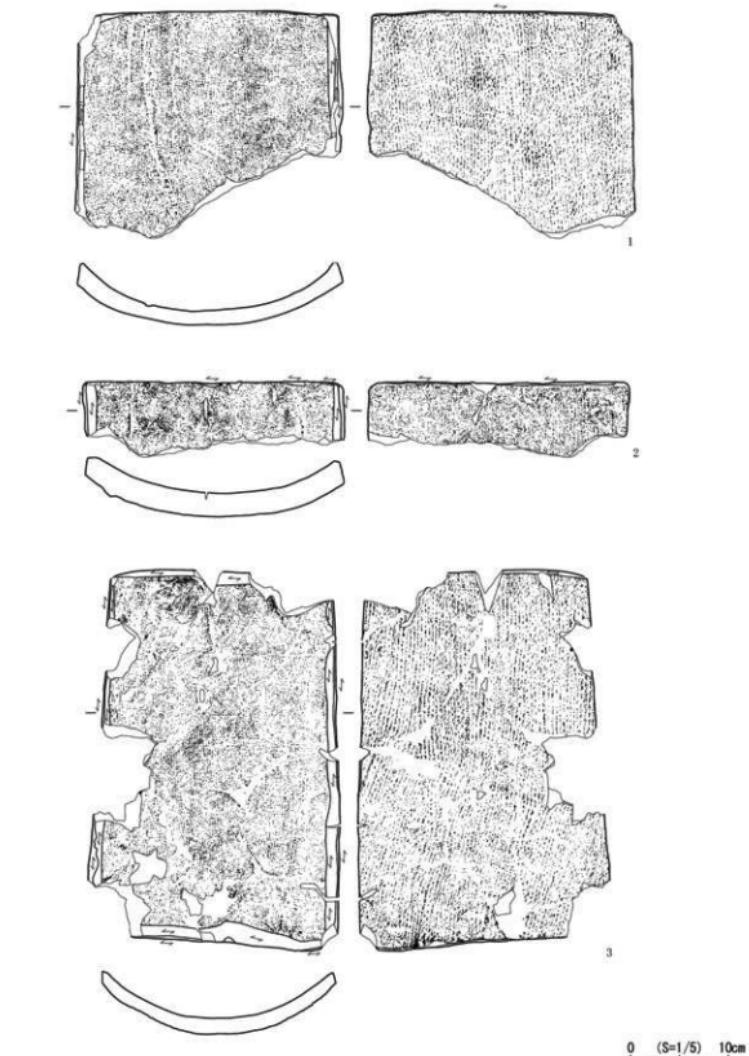
図版 番号	登録 番号	出土 遺構	部位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	広場場 (cm)	狭場場 (cm)	厚さ (cm)	分類	備考	写真 図版
1	G-24	S01	壁面直上	平瓦					2.6	A	△面：縦溝叩き　凹面：布目板	5-3
2	G-27	S01	壁面直上	平瓦		(9.5)			2.6	A	△面：縦溝叩き　凹面：布目板	5-4
3	G-26	S01	壁面直上	平瓦	31.2	24.5		23.7	3.1	B	△面：縦溝叩き→叩きのつぶれ　凹面：布目板→ナゲ	5-5
4	G-37	S01	壁面直上	平瓦		24.4		23.0	2.2	A	△面：縦溝叩き　凹面：布目板	5-6

第12図 S01 塵跡出土遺物（5）



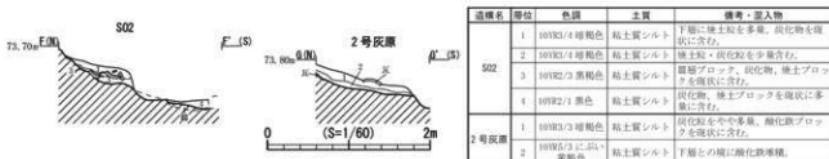
第13図 S01 窯跡出土遺物 (6)・1号灰原出土遺物 (1)

器形 番号	骨格 番号	芯合 造作	層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	鉢底幅 (cm)	厚さ (cm)	分類	備考	参考 文献
1	G-35	S01	-	平瓦	26.0	26.1		2.6	A	凸面：紙縄叩き 凹面：素切り板→布目板		6-1
2	G-36	S01	3	平瓦	28.8			2.6	A	凸面：紙縄叩き 凹面：素切り板→布目板 3層下層		6-2
3	G-13	1号灰原	1	平瓦	26.0		24.1	3.1	A	凸面：紙縄叩き 凹面：素切り板→布目板		6-3



第14図 1号灰原出土遺物（2）

回収 番号	番号	出土 遺物	層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	鉢底幅 (cm)	厚さ (cm)	分類	備考	写真 番号
1	G-14	1号灰原	1	平瓦	27.2		(24.9)	1.5	A	凸面：縦溝引き　凹面：布目模（部分的なつぶれあり）		6-4
2	G-34	1号灰原	-	平瓦	26.6		26.7	2.4	B	凸面：縦溝引き→一きのつぶれ　凹面：布目模→ナデ		6-5
3	G-33	1号灰原	-	平瓦	38.0	23.8	(26.4)	(22.0)	1.7	A　凸面：縦溝引き　凹面：余切り縁→布目模		7-1



第15図 S02 窯跡・2号灰原土層断面図

窯の廃絶後に周囲で発生した不良品を投棄したものと推測される。出土遺物の総重量は約 46.3 kg で、その内 67% にあたる約 30.8 kg が平瓦であった。丸瓦は 9.9 kg で約 21% を占める。またそれ以外にも軒丸瓦、軒平瓦、須恵器の壊などが出土している。その内の平瓦 7 点、丸瓦 5 点、軒丸瓦 2 点、軒平瓦 1 点、須恵器壊 1 点を図化した。

## 2号灰原

調査区東側で検出された。平面図上は他の遺構との重複はないが、堆積土の一部は 1 号灰原の上面にまで広がっていた。堀込の検出長は約 1.2 m、横幅は 1.8 m、検出面からの深さは約 21 cm で、底面の傾斜角度は 13° である。南側は擁壁設置の際の削平を受けている。堆積土は粘土質シルトと粘土で 2 層確認され、南側と東側に向かって落ち込んでおり、その上層には基本層 II 層が堆積している。I 層は粘土質シルトで炭化鉄をやや多量に、炭化鉄粒を斑状に含んでいる。2 層は粘土で底面に炭化鉄粒が堆積していることから、水が流れるような環境であった可能性がある。この 2 層に関しては堆積土中の花粉分析を行っている。詳細については「6 穴田東窯跡から出土した炭化材の樹種同定と花粉分析」を参照して頂きたい。

遺物は 1 層を中心に平瓦と丸瓦などが約 5.8 kg 出土したが、その内の 5.5 kg が平瓦で、その内の 1 点を図化した。

## 遺構外の出土遺物

今回の調査地点の敷地内および基本層中からは大量の瓦が出土した。その総重量は 135.3 kg におよぶ。その内 82% にあたる約 111.0 kg が平瓦であった。丸瓦は 17.4 kg で約 13% を占める。またそれ以外にも軒丸瓦、軒平瓦、土師器などが出土地で出土している。その内の平瓦 5 点、丸瓦 1 点、軒丸瓦 5 点、軒平瓦 3 点、須恵器の壊と甕を 1 点ずつ図化した。

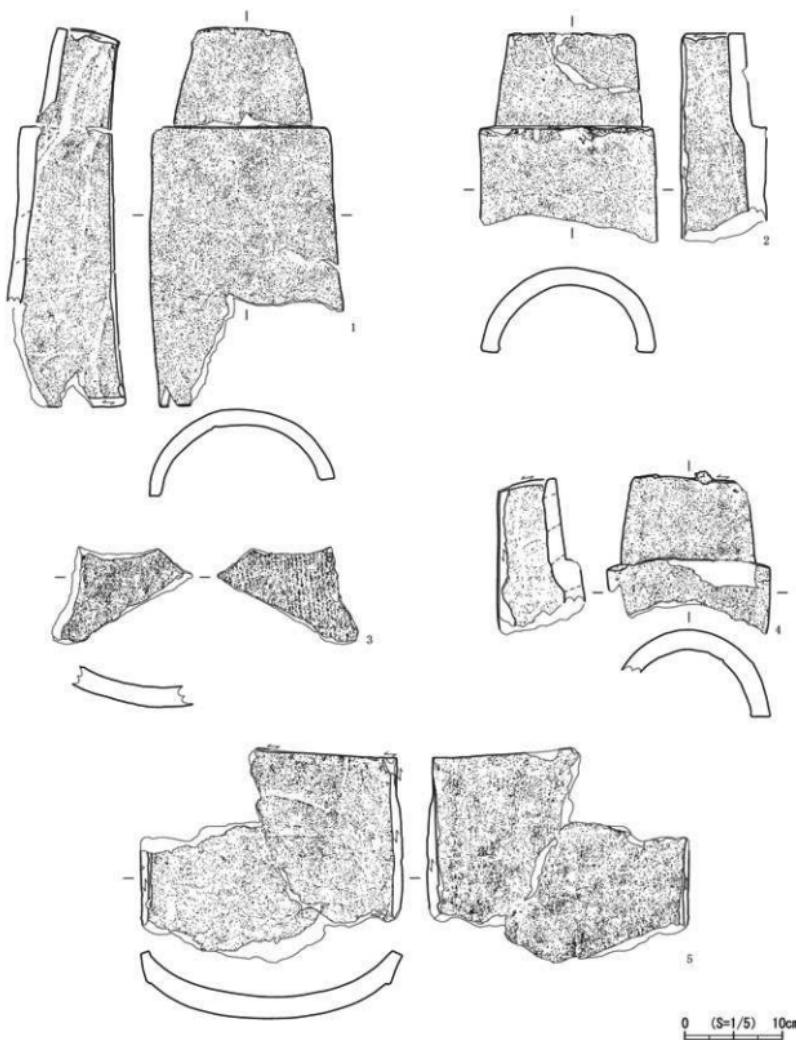
## 出土遺物の様相

上記の遺構をはじめ、調査区全体からは遺物が大量に出土し、その総重量は 286.5 kg におよぶ。その大半は古代の瓦である。出土した軒瓦が宝相華文軒丸瓦（多賀城分類 422 型式、陸奥国分寺分類宝相花第一類）と、連珠文軒平瓦（多賀城分類 831a 型式、陸奥国分寺分類連珠文第二類）のみであったことから、遺構外から出土した瓦も含めほぼ同時期に焼成されたものであると推測される。ちなみに各遺物の出土重量は、平瓦が 225.1 kg と全体の約 78% を占め、丸瓦は 45.8 kg で約 16%、その他の軒丸瓦、軒平瓦、不明瓦は 15 kg で約 5% である。このことからこの窯跡は平瓦を主体的に生産していた瓦窯であったといえる。ちなみにこの重量を個数に換算するために、過去の調査で出土している完形の瓦を抽出し、その重量を計量して平均値を求めた。使用したのは、平瓦が五本松窯跡（仙台市文化財調査報告書第 99 集）の第 40 図 1、第 43 図 1、第 46 図 1、第 64 図 1、与兵衛沼窯跡（同 366 集）G-052、G-125、薬師堂東遺跡（同 443 集）G-016 で、平均重量は 4.8 kg であった。丸瓦は五本松窯跡（同 99 集）第 28 図 1、2、与兵衛沼窯跡（同 99 集）F-043 で、平均重量は 2.9 kg であった。この数値を利用すると今回の調査で平瓦は約 46.9 枚分、丸瓦は 15.64 枚分出土したことになり、その比率は丸瓦 1 に対して平瓦 2.99 となり、



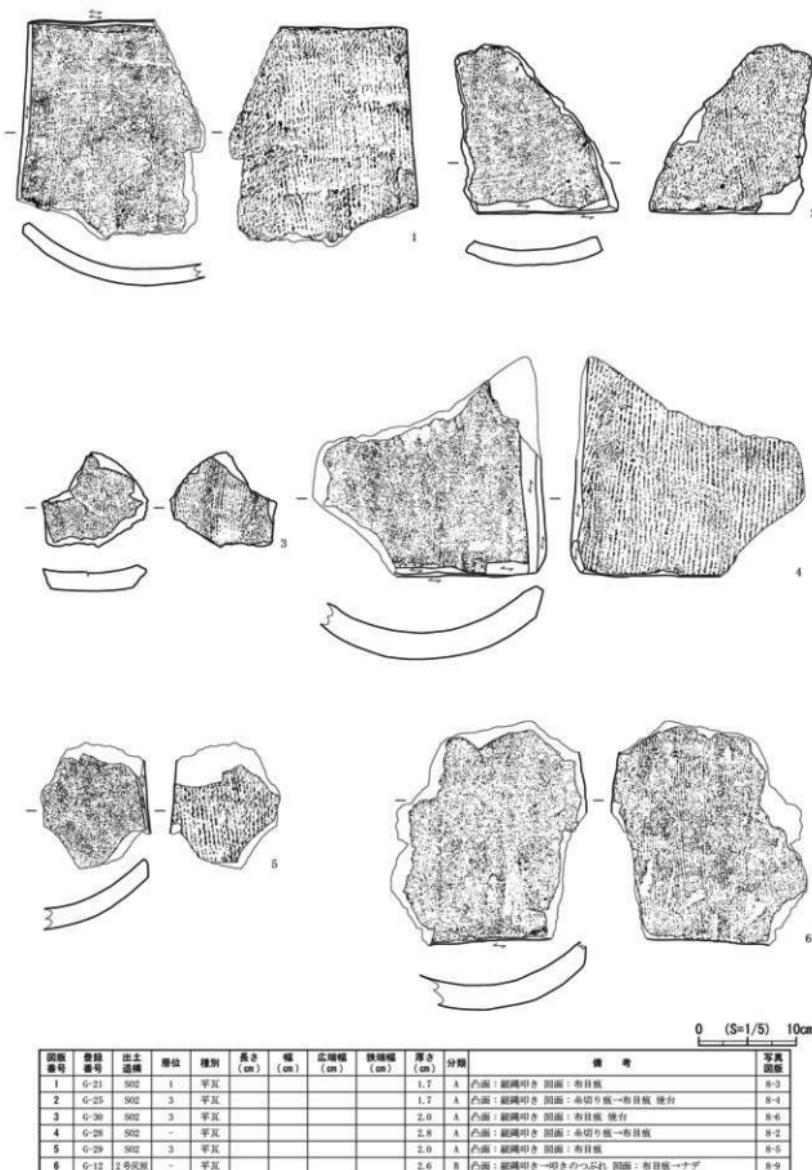
図版 番号	登録 番号	出土 遺構	部位	種別	基準	測量 (cm)			外観	内面	備考	写真 図版
						口径 (cm)	底径 (cm)	厚さ (cm)				
1	E-3	S02	-	須佐跡	井	(14.0)	(6.0)	3.9	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	7-2
2	F-6	S02	1	軒丸瓦				2.0	(19.9)	2.7	瓦当面：笠形文范押し、瓦当裏面：彫印ヨーケズリ、ナデ凸面、彫印ヨーカズリハケメ、側面：布目板、多賀城分類422、鈴鹿園分類第一類に相当、芯棒3ヶ所あたり	7-5
3	F-7	S02	-	軒丸瓦						2.0	瓦当面：笠形文范押し、瓦当裏面：彫印ヨーケズリ、ナデ凸面；不明、側面：布目板	7-6
4	G-4	S02	1	軒平瓦				1.8		5.5	瓦当面：透雕文范押し→彫印き、裏面：彫印き→山形波文、凸面：不明、側面：布目板→部分的なナゲ、多賀城分類431a、鈴鹿園分類第二類に相当する	7-3
5	F-17	S02	-	丸瓦	16.4	16.8		1.8			凸面：彫印き→ナゲ、側面：埴土鉢底→布目板	7-8
6	F-18	S02	3	丸瓦				1.6			凸面：彫印き→ナゲ、側面：埴土鉢底→布目板	8-1

第16図 S02 窑跡出土遺物 (1)

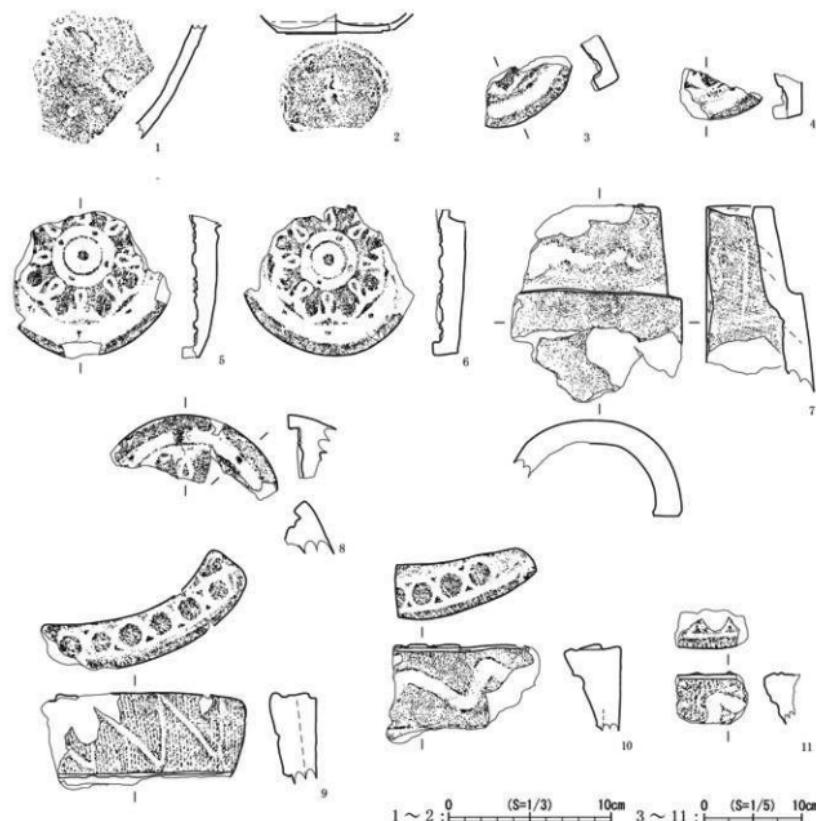


図版 番号	骨格 番号	出土 遺構	層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	広幅幅 (cm)	狭幅幅 (cm)	厚さ (cm)	分類	備考	写真 図版
1	F-15	S02	-	丸瓦	36.7 至 10.3	19.0 至 14.1	19.6 至 14.1	18.9 至 9.3	1.7	A	凸面：溝印き→ナゲ 凹面：粘土練板→布目板	7-4
2	F-14	S02	-	丸瓦	9.3	18.0	至 15.0	17.7 至 12.5	2.4	B	凸面：溝印き→ナゲ 凹面：粘土練板→布目板	7-7
3	G-31	S02	3	平瓦	玉 9.4		至 13.9	16.7 至 10.2	2.1 2.2	B	凸面：底溝印き→印きのつぶれ 凹面：粘土練板→布目板→ナゲ	8-7
4	F-16	S02	3	丸瓦	玉 9.4		至 13.9	16.7 至 10.2	2.2	B	凸面：溝印き→ナゲ 凹面：粘土練板→布目板→ナゲ	7-6
5	G-32	S02	3	平瓦		26.9		26.6	2.4	B	凸面：底溝印き→印きのつぶれ 凹面：布目板→ナゲ	8-8

第17図 S02 窯跡出土遺物(2)

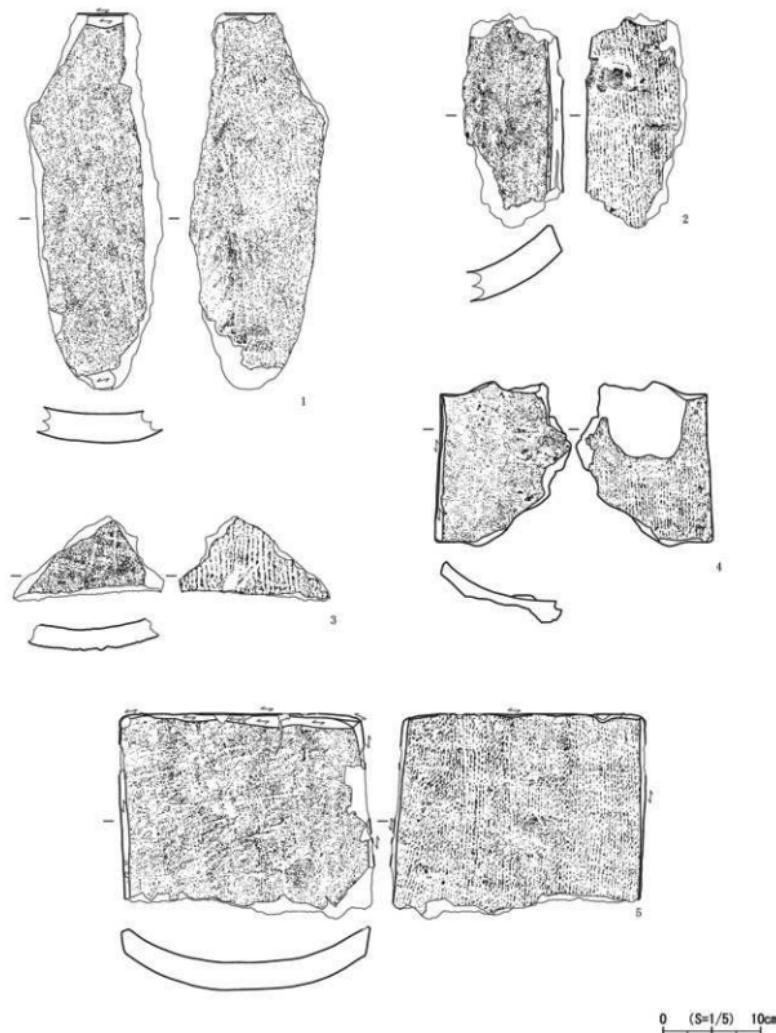


第18図 S02窯跡出土遺物(3)・2号灰原出土遺物



器種 番号	登録 番号	出土 遺構	部位	種別	器種	法量 (cm)			外側	内側	備考	写真 図版
						口径	底径	高さ				
E-1	-	-	-	埴跡器	灰	-	-	-	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	-	9-1
E-2	E-2	-	-	埴跡器	灰	(7.2)	-	-	ロクロナデ 灰:鉢形ヘラケズリ×周	ロクロナデ	-	9-2
F-3	F-3	軒丸瓦	-	-	-	-	-	-	2.8	瓦当面: 宝相花文捺印・瓦当裏面: ケズリ ナデ 凸面: 調印き→ナデ 凹面: 不明 多賀城 分類422、陸奥国分寺分類第一類に相当	-	9-5
F-4	F-4	軒丸瓦	-	-	-	-	-	-	2.7	瓦当面: 宝相花文捺印・瓦当裏面: ナデ 凸面: 不明 凹面: 不明 多賀城 分類422、陸奥国分寺分類第一類に相当	-	9-6
F-5	F-2	軒丸瓦	-	-	-	-	-	-	1.7	瓦当面: 宝相花文捺印・其当裏面: 滾滑き→ケズリ ナデ 凸面: 不明 凹面: 不明 多賀城 分類422、陸奥国分寺分類第一類に相当	-	9-8
F-6	F-1	軒丸瓦	-	-	-	-	-	-	2.6	瓦当面: 宝相花文捺印・瓦当裏面: ケズリ ナデ 凸面: 不明 凹面: 不明 多賀城 分類422、陸奥国分寺分類第一類に相当	-	9-3
F-7	F-8	丸瓦	玉9.3	-	-	2.7	-	-	内面: 調印き→ナデ 凸面: 鉢上部底→セキ底	-	-	9-6
F-8	F-5	軒丸瓦	-	-	-	-	-	-	1.7	瓦当面: 宝相花文捺印・瓦当裏面: 不明 凸面: 調印き→ケズリ 凹面: 不明 多賀城 分類422、陸奥国分寺分類第一類に相当	-	9-7
G-1	G-1	軒平瓦	-	-	-	-	-	-	4.7	瓦当面: 宝相花文捺印・瓦当裏面: 滾滑き→山形波瀬文 凸面: 不明 凹面: 布目板一部のみなべ	-	9-10
G-2	G-2	軒平瓦	-	-	-	3.8	-	-	瓦当面: 宝相花文捺印・瓦当裏面: 滾滑き→山形波瀬文 凸面: 不明 凹面: 多賀城一部のみなべ	-	-	9-11
G-5	G-5	軒平瓦	-	-	-	-	-	-	瓦当面: 波瀬文捺印・瓦当裏面: 滾滑き→山形波瀬文 凸面: 不明 凹面: 陸奥国分寺分類第二類に相当	-	-	9-9

第19図 遺構外出土遺物 (1)



第20図 遺構外出土遺物(2)

図版 番号	登録 番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	広縁幅 (cm)	狭縁幅 (cm)	厚さ (cm)	分類	備考	写真 回数
1	G-7	平瓦					3.9	B	凸面：範溝切き一刃きのつぶれ 凹面：布目板 → ナデ	9-12
2	G-11	平瓦					3.1	A	凸面：範溝切き 刃面：布目板	9-15
3	G-9	平瓦					2.1	A	凸面：範溝切き 凹面：布目板	9-13
4	G-10	平瓦					2.2	A	凸面：範溝切き 刃面：布目板 縫合	9-14
5	G-8	平瓦	24.7	2.8	4.0	2.0		B	凸面：範溝切き一刃きのつぶれ 凹面：素切り板 → 布目板 → ナデ	9-16

丸瓦と平瓦は数的に1:3の割合で瓦の生産を行っていた可能性が高い。

軒丸瓦は調査区全体で7点出土している。いずれも8葉の宝相華文瓦で、瓦当の直径は約19.5cm、厚さは約1.7~2.8cmでややばらつきがある。側面にも縄叩きが施されており、部分的に叩き目が残る資料も存在する。裏面にはナデが施されているが、一部はナデの前に下端部を斜めに削る。瓦当文様は外圈幅が約0.8~1.2cm、外区には直径約0.8~1.2cm、高さ約3mmの珠文が8個配されていると推測されるが、最上部の珠文範囲は瓦范が削り取られていた可能性がある(F-5、第19図8)。花弁は葵葉形を呈し、その間にはやや長い垂形の間弁が規則的に配されている。また中房は圓線によって内外に分けられ、内側には直径約1.6cm、高さ約4mmの珠文が1個、外側には直径約0.8~1.0cm、高さ約3mmの珠文が4個配されている。また瓦范の板目が見えるものも存在する。いずれも特定の間弁が中軸線上に配置されるように瓦当面と丸瓦が規則性をもって接合されている。接合方法は印籠式で瓦当に接した丸瓦の上部には厚さ約2cmの粘土が維ぎ足されている。范傷は瓦当面を正面から見て外区の真下の珠文と左上の珠文、中軸線の左隣の下側花弁の先端から外区にかけ、中房の外側の珠文の内、左上と左下の珠文に認められる。また一部の珠文は上面が扁平化しており、范傷の頸在具合と珠文上面の扁平化具合から軒丸瓦の新旧関係は以下のようになる。

F-6(第16図2)→F-7(第16図3、間弁の范傷の頸在化)、→F-1・2(第19図5・6、内区珠文の扁平化)

軒平瓦は調査区全体で6点出土している。全体像を窺える資料は出土していないが陸奥国分寺跡の出土例から直径約2.0~2.5cmの珠文が10個配されていたものと推測される。瓦当部の厚さは3.5~5.5cm、頸部の幅は7.8~8.6cmで、平瓦の凸面に粘土板を維ぎ足して形成している。瓦当面の外区枠は最大で1.2cmである。瓦范と平瓦の湾曲が異なるため、平瓦部の端部が瓦当紋様よりも反り上がるが、瓦当部の厚さが足りず瓦范の上部が平瓦部の凹面にまでいたってしまい、瓦当紋様の上側が途切れている資料も存在する。実際にG-6(第9図2)は瓦当面の上部が途切れ、珠文の上側まで欠損している。珠文間に三角形の陽出部が圓線から独立した形で配されている。瓦当面や頸部には縄叩きが施され、頸部はその後ヘラ状工具もしくは指で山形文が描かれている。断面はやや長い三角形を呈する。

平瓦はいずれも縄叩きの一枚造りである。全体像を窺える資料は出土していないが、全長約34.2~38.0cm、狭端幅約23.5~26.7cm、広端幅約26.1~26.9cmである。凸型台で成型したもの(A類)と、成型後のA類を凹型台に設置し、その際の圧痕が凸面の端部に残り、縄叩き目が潰れたもの(B類)が存在する。B類は凹面の布目の一部がナデ消しされている。またB類成型の際の凹型台に座みを設け、凸面を押し付けた際にその圧痕である方形突出も2点確認されている。一部の平瓦の凹面、もしくは凸面にはヘラ状の道具を用いて線刻が施されているものが存在している。形状から文字の一部であると推測されるものも存在するが、判読できる資料はない。

丸瓦はいずれも粘土紐巻上げの有段式で、縄叩きが施された後に回転を用いた横方向のナデが施され、叩き目がナデ消しされている。有段部の狭端幅は9.5cm、広端幅は14.1~17.6cm、丸瓦部の狭端幅は16.6~18.0cm、広端幅は16.8~19.8cm、全長は37.2~38.7cmである。

須恵器は調査区一括とS02窯跡から壺と甕などが出土している。壺は2点とも底部切り離しが回転ヘラ切調整である。S02窯跡から出土した資料は口径13.8cm、底径6.6cm、器高4.0cmで口径と底径の比率は1:0.47で、口縁部は緩やかに外反する。器形および調整は仙台市が調査を行った五本松窯跡の第1・2次調査で出土したBII類と類似する。

## 5 まとめ

今回の調査では窯跡2基、溝跡2条、灰原2基を検出した。検出した遺構のうち、斜面の下側にあるS02窯跡が最も古く、S01窯跡とSD1・2溝跡は同時期に機能していたものと推定される。また2号灰原は最も新しい遺構

表3 穴田東窯跡第1次調査区から出土した遺物の破片数および重量一覧表

遺構名	出土遺物									
	平瓦	丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	不明瓦	土師器	須恵器	その他		
S01、1号灰原	409個	77,783g	137個	18,360g	1個	86g	9個	1,206g	88個	1,347g
S02	126個	30,800g	51個	9,850g	4個	1,550g	4個	3,040g	41個	765g
2号灰原	20個	5,490g	4個	185g	0個	0g	0個	0g	3個	20g
遺構外	523個	111,055g	149個	17,480g	8個	2,740g	13個	3,630g	36個	445g
合計	1,078個	225,128g	341個	45,875g	13個	4,375g	26個	7,875g	176個	2,647g
瓦総数	1,634個		瓦総重量		285,900g					

である可能性が高いことから、斜面の下側から順に遺構を構築したものと考えられる。また2基の窯跡はいずれも調査区外にも広がっており、今回発見された窯以外にも近隣には他の窯が存在している可能性が高い。

S01窯跡の南側には1号灰原が、両脇にはSD1・2溝跡が配されておりSD1・2溝跡はS01窯跡の周囲をめぐる排水溝、もしくは作業用の通路であったと推測される。同様の事例は利府町の硯沢窯跡A-8号窯跡や古窯跡研究会が調査を行った安養寺下瓦窯跡群などを挙げることができる。

出土した軒瓦の文様の種類から、遺構の時期はいずれも多賀城IV期の9世紀後半以降に比定されるが、この時期は貞觀11(869)年に起きた大地震により多賀城や陸奥国分寺などにも大きな被害が出たことが知られており、実際に陸奥国分寺跡では今回出土した宝相花文軒丸瓦と連珠文軒平瓦は創建期の瓦に次ぐ量が出土している。今回調査を行った穴田東窯跡の近隣の堤町B窯跡や堤町瓦窯跡、五本松窯跡などでも同様の軒先瓦や須恵器が出土していることから、これらの窯跡は一連の窯跡群を形成していたものと考えられ、貞觀地震からの復興のために瓦を生産していたと考えられる。また平瓦は回型台を利用して凹面を調整したB類が一定数出土した。この形式は多賀城跡の調査では平瓦II B類に、陸奥国分寺跡の1989年の調査ではV類に分類され、生産時期は多賀城III期(9世紀後半以前)までと想定されていたが、前述した五本松窯跡の第1・2次調査や硯沢・大沢窯跡の調査でも多賀城IV期以降の軒瓦が須恵器と共に出土していることから、多賀城IV期以降も製作されていたことが指摘されている。今回の資料もそれを裏付けるものであると言え、両者の違いは必ずしも年代としての差ではなく、系統としての差も考慮する必要があるものと思われる。

#### 引用・参考文献

- 工藤雅樹 1965 「陸奥国分寺出土の宝相花文鏡瓦の製作年代について 一東北地方における新羅系古瓦の出現一」『歴史考古第13号』
- 古窯跡研究会 2009 「陸奥国分寺窯跡群VII 仙台市安養寺下瓦窯跡報告書」『仙台育英学園高等学校研究紀要24』
- 佐川正敏 2014 「貞觀地震復旧瓦生産における新羅人の関与について」『宮城考古学 第16号』
- 仙台市教育委員会 1982 『仙台平野の遺跡群I (堤町B窯跡第1次)』仙台市文化財調査報告書第37集
- 仙台市教育委員会 1987 『五本松窯跡 一都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第99集
- 仙台市教育委員会 1990 『仙台平野の遺跡群IX (陸奥国分寺第23次)』仙台市文化財調査報告書第134集
- 仙台市教育委員会 2010 『与兵衛沼窯跡 一都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第366集
- 仙台市教育委員会 2016 『薬師堂東遺跡II 一仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書XI』仙台市文化財調査報告書第443集
- 宮城県教育委員会 多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡 本文編』
- 宮城県教育委員会 1987 『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集
- 陸奥国分寺跡発掘調査委員会編 1961 『陸奥国分寺跡』

## 6 穴田東窯跡から出土した炭化材の樹種同定と花粉分析

吉川昌伸・吉川純子（古代の森研究会）

穴田東窯跡は仙台市青葉区堤町に所在する平安時代の瓦窯跡である。今回の調査では窯跡2基、灰原2基、溝跡2条が確認された。これらの遺構からは炭化材の破片が検出されていることから当時の瓦窯燃料材としての木材利用状況を調査する目的で4遺構から出土した炭化材10点の樹種同定を実施した。また、周辺の植生等推定する目的で堆積物の花粉分析をおこなった。

## I 炭化材

炭化材試料からはステンレス削刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の断面を割りプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察・同定した。樹種同定結果を表4に示す。4遺構からは4分類群が確認され、最も多かったのはナナカマド属5点で、ついでクマシデ属とコナラ属コナラ節が各2点、ウワミズザクラ属が1点であった。窯跡本体から出土しているのはクマシデ属、ナナカマド属、コナラ属コナラ節であるが、これら3種は灰原や溝跡からも出土しており、瓦を取り出す際に窯から出た破片が周間に堆積した可能性がある。ウワミズザクラ属とナナカマド属は、着火は緩慢だが火持ちがよく長時間燃焼する。また、クマシデ属は福島県沿岸部の原町市割田II遺跡製鉄炉跡や相馬市向田D遺跡炭窯など燃料材を製造する窯から出土する例が多く（伊東ほか2012）、コナラ属材同様、燃料材として当時頻繁に使われていたと推測される。宮城県の平安時代における窯跡炭化材出土例は大変少なく、仙台市では五本松窯跡で燃料材としてサクラ属、ブナ属、モチノキ属の3点が確認されているだけであるが、同遺跡の窯の天井構架材として出土した炭化材にはクマシデ属とコナラ属コナラ節が多く確認されている。

以下に同定された炭化材の細胞構造学的記載を行う。

**クマシデ属 (Carpinus) :**中程度の道管が放射方向に数個複合してまばらに分布する散孔材で道管は単穿孔、道管内壁にらせん肥厚が見られる。放射組織は異性で1-3細胞幅で顕著な集合放射組織がある。

**コナラ属コナラ節 (Quercus sect. Prinns) :**年輪初めに大きな道管が数列配列し急に径を減じて小道管が波状に配列する環孔材で道管は単穿孔、放射組織は同性で單列と幅の広い広放射組織がある。

**ナナカマド属 (Sorbus) :**やや小さい道管が単独ないし数個不規則に複合して比較的密に分布する散孔材で晚材部でやや径が小さくなる。道管は単穿孔で内壁に水平に近いらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性で1-2細胞幅。

**ウワミズザクラ属 (Padus) :**中程度の道管が単独ないし数個塊状に複合して晚材部に向かって径を減じながらややまばらに分布する散孔材で、道管は単穿孔で内壁にらせん肥厚がある。放射組織は異性で1-5細胞幅である。

## II 花粉分析

## 1. 花粉分析試料と方法

穴田東遺跡から出土した2号灰原では、堆積物がいくぶん有機質であるため、水つきの堆積物である可能性があることから花粉化石について調査した。2号灰原1・2層から採取されたNo.3試料（層厚約10cm幅で採取）の下部と上部層準で行った。堆積物は、灰黄色ないしにぶい黄色細粒砂質シルトからなり極粗粒砂を混入する。

花粉化石の抽出は、試料約2gを秤量し体積を測定後に10%KOH、傾斜法により粗粒砂を除去、48%HF、比重分離

表4 穴田東窯跡出土炭化材の樹種

遺構	遺物番号	枝番号	樹種
1号灰原	13	a	コナラ属コナラ節
	13	b	ウワミズザクラ属
	16	a	クマシデ属
SD1溝跡	16	b	ナナカマド属
	24		ナナカマド属
S01窯跡	40		クマシデ属
S02窯跡	55		コナラ属コナラ節
	71	a	ナナカマド属
	71	b	ナナカマド属
	71	c	ナナカマド属

(比重 2.15 の臭化亜鉛)、アセトトリシス処理の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッヂミキサーで十分攪拌後、マイクロビペットで取り重量を測定(感量 0.1mg)レグリセリンで封入した。同定と計数はプレパラートの全面を行った。

分析試料の堆積物の特徴にかかる有機物量、砂分量、シルト以下の細粒成分量、および生業の指標となる細粒微粒炭量を求めた。有機物量については強熱減量を測定し、電気マッフル炉により 750°C で 3 時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。細粒微粒炭量は、プレパラートの顕微鏡画像をデジタルカメラで取り込み、画像解析ソフトの ImageJ で  $75 \mu\text{m}^2$  より大きいサイズの微粒炭の積算面積を計測した。

## 2. 結果と考察

分析試料の堆積物は、下部は砂 22.0%、シルトから粘土 71.0%、有機物 7.0%、上部は砂 26.7%、シルトから粘土 66.2%、有機物 7.1% であった。

検出された分類群は、樹木花粉が 2、草本花粉が 1、シダ植物胞子が 2 と少なかった(表 5)。産出した花粉・胞子数は、全体で 27 ~ 55 粒と少なく、このうち大半をシダ植物胞子が占めた。

表 5 2 号灰原 1・2 層の No.3 試料から検出された花粉胞子石の一覧表		学名	上部	下部
和名				
樹木				
マツ属複維管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	1	1	
コナラ属コナラ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	-	2	
草本				
キク科(キクニガナ属除く)	<i>Asteraceae</i> (excluding <i>Cichorioideae</i> )	1	-	
シダ植物				
ゼンマイ科	<i>Osmundaceae</i>	9	23	
單体型胞子	<i>Monolete spore</i>	16	29	
樹木花粉	Arboreal pollen	1	3	
草本花粉	Nonarboreal pollen	1	0	
シダ植物胞子	Fern spores	25	52	
花粉・胞子数	Pollen and Spores	27	55	
不明花粉	Unknown pollen	2	3	
細粒微粒炭量 ( $\mu\text{m}^2/\text{cm}^3$ )		12	24	

解に対し相対的に強靭であり、キク科花粉の外層が分解されていたことから、花粉の多くは化学的に酸化分解された可能性が推定される。したがって、森林植生に関する資料は得られなかつたが、周辺にはゼンマイや他のシダ植物が生育していたと考えられる。また、マツ属複維管束亞属やコナラ亞属は比較的の保存状態が良いことから現生花粉などが混入した可能性がある。

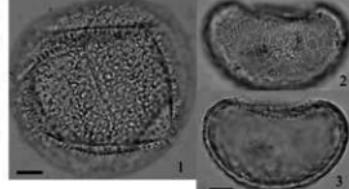
## III 当時の植物利用と周囲の環境

本遺跡の炭化材と花粉分析の結果および近隣の五本松窓跡の樹種同定結果から、遺跡の周辺はコナラ属コナラ節やクマシデ属が生育する二次林で、これらは萌芽更新することから薪炭林として一定期間利用していたことが考えられる。ナナカマド属やウワミズザクラ属などは薪炭林に混在していたと考えられる。また林の林床や林縁などにはゼンマイ属を含むシダ植物が生育していたとみられる。

## 引用・参考文献

伊東隆夫・山田昌久. 2012. 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社.

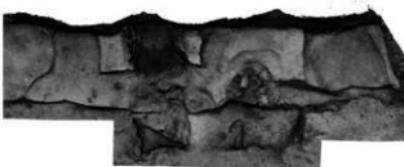
高橋利彦. 1987. 五本松窓跡 D 地点出土炭化材同定. 仙台市文化財調査報告書第 99 集 五本松窓跡 都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書. 仙台市教育委員会. 155-166.



第 21 図 灰原から検出されたシダ植物胞子  
1:ゼンマイ科 2.3:単体型胞子 スケール =  $10 \mu\text{m}$



1. 調査区遠景空撮（南西から）



2. 遺構一部完掘状況（オルソフォト）



3. S01、1・2号灰原検出状況（西から）



4. 1号灰原土層断面（北西から）



5. S01 土層断面（南西から）



6. S01、SD1・2検出状況（南西から）



7. S01 作業面検出状況（オルソフォト）



8. S01 壁面瓦設置状況（南西から）

写真図版1 穴田東窯跡第1次調査（1）



1. S01 壁面瓦設置状況（北西から）



2. S01 完掘状況（南西から）



3. S01 土層断面（南西から）



4. S01 付近調査区北壁土層断面（南西から）



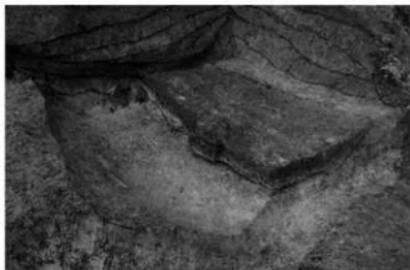
5. S02検出状況（南西から）



6. S02 完掘、底面遺物出土状況（南西から）

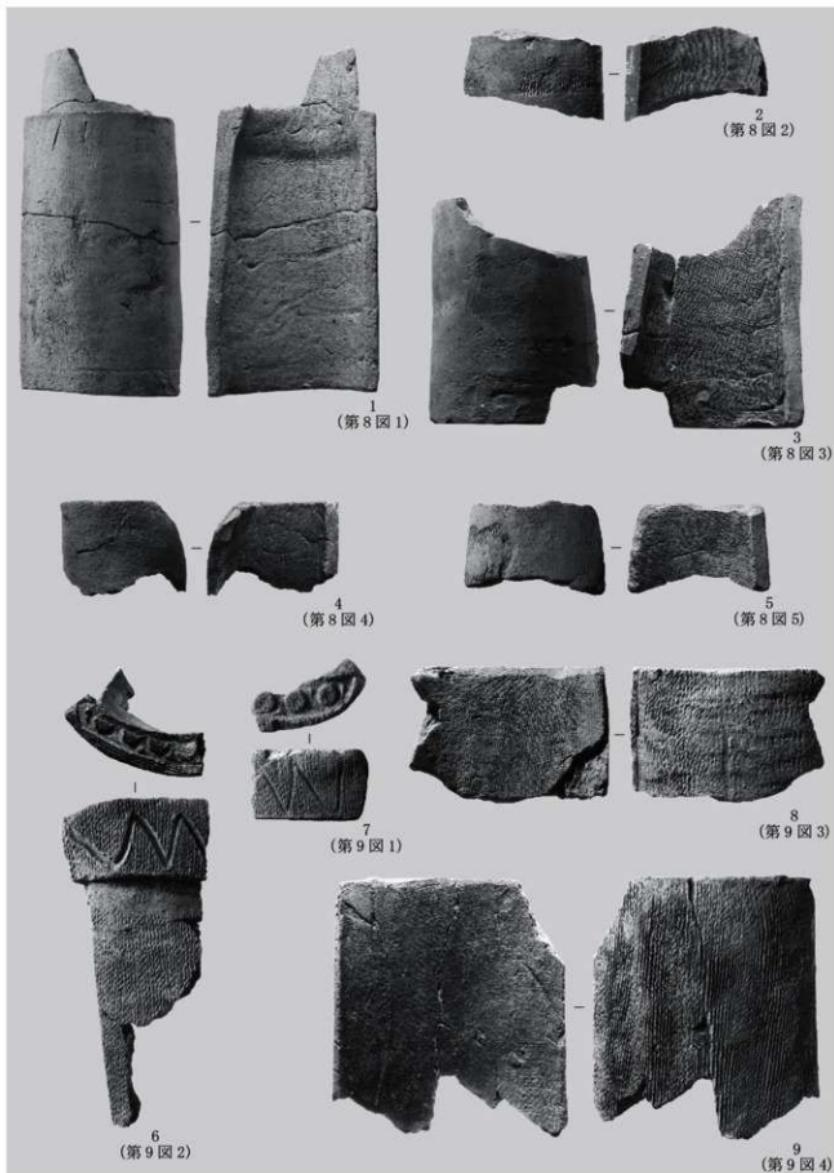


7. S02 土層断面（西から）



8. 2号灰原土層断面（西から）

写真図版 2 穴田東窯跡第1次調査 (2)



写真図版3 穴田東窯跡第1次調査出土遺物（1）



1  
(第10図1)



2  
(第10図2)

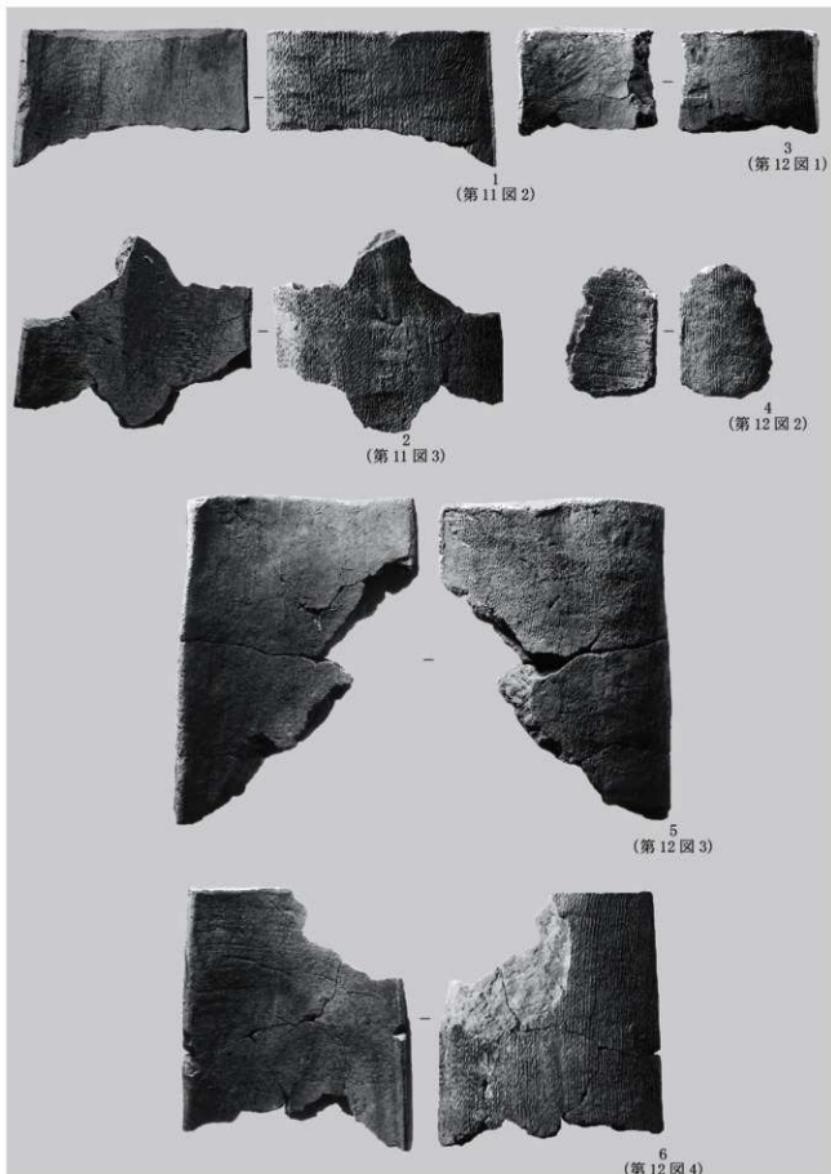


3  
(第11図3)

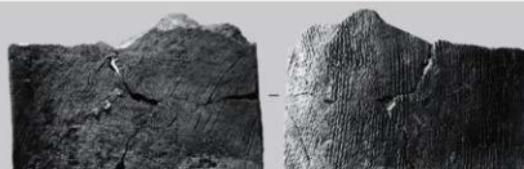


4  
(第11図4)

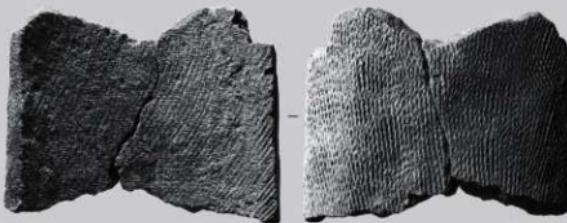
写真図版4 穴田東窯跡第1次調査出土遺物（2）



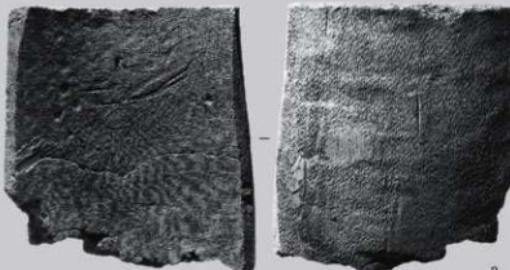
写真図版 5 穴田東窯跡第1次調査出土遺物（3）



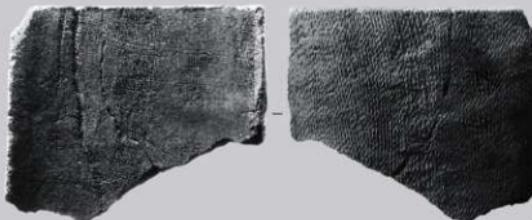
1  
(第13図1)



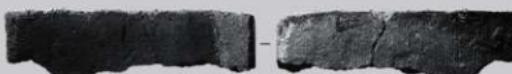
2  
(第13図2)



3  
(第13図3)

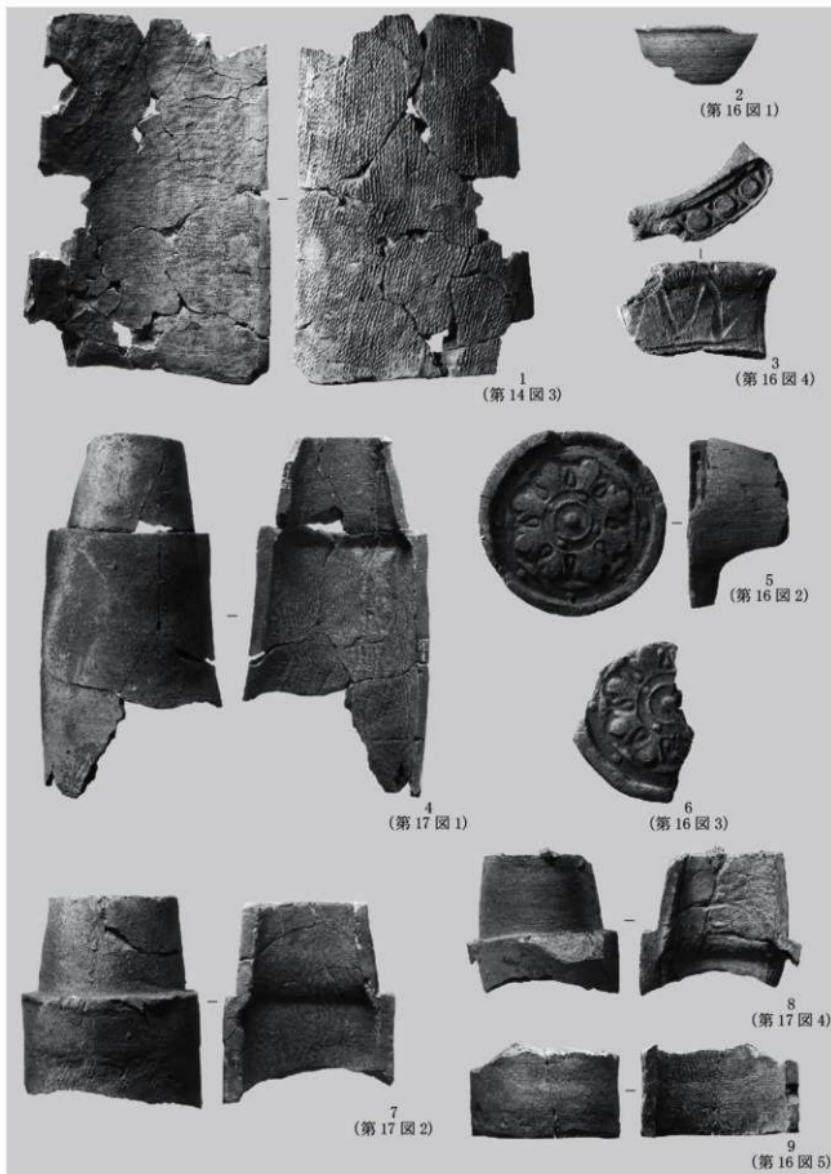


4  
(第14図1)

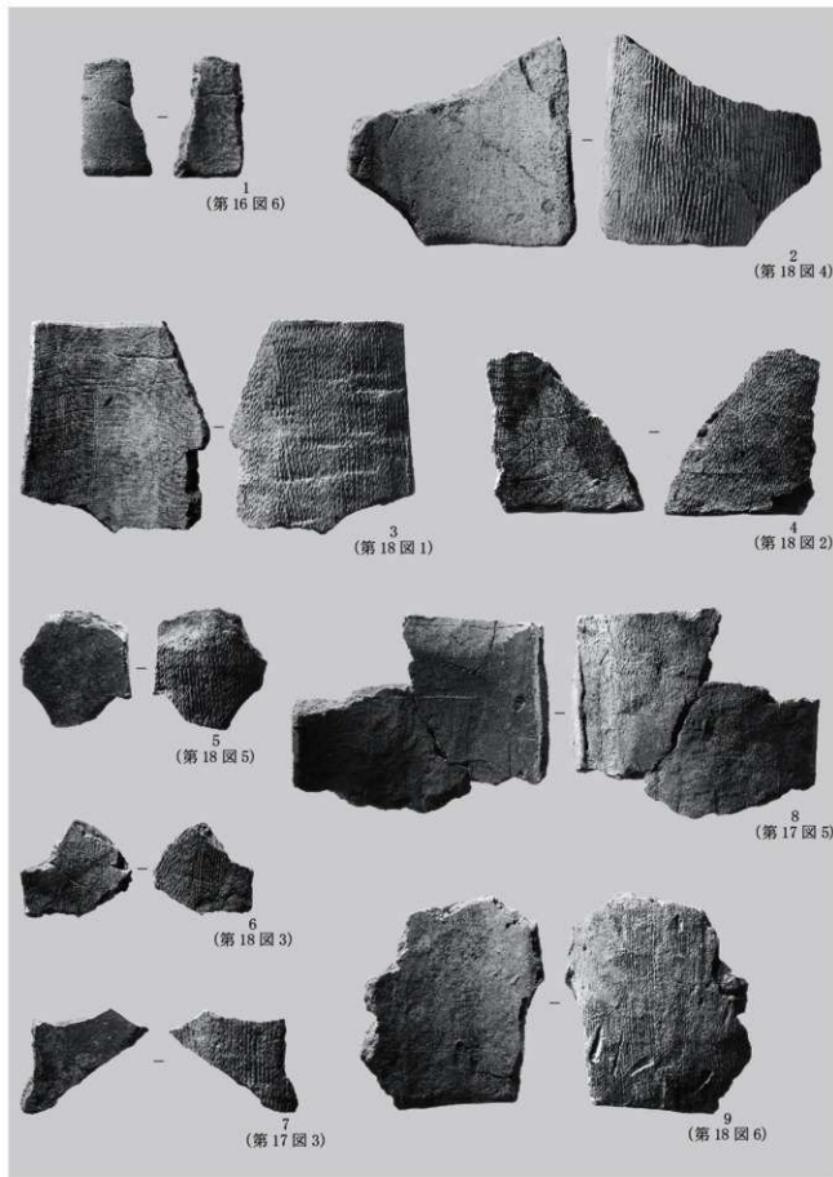


5  
(第14図2)

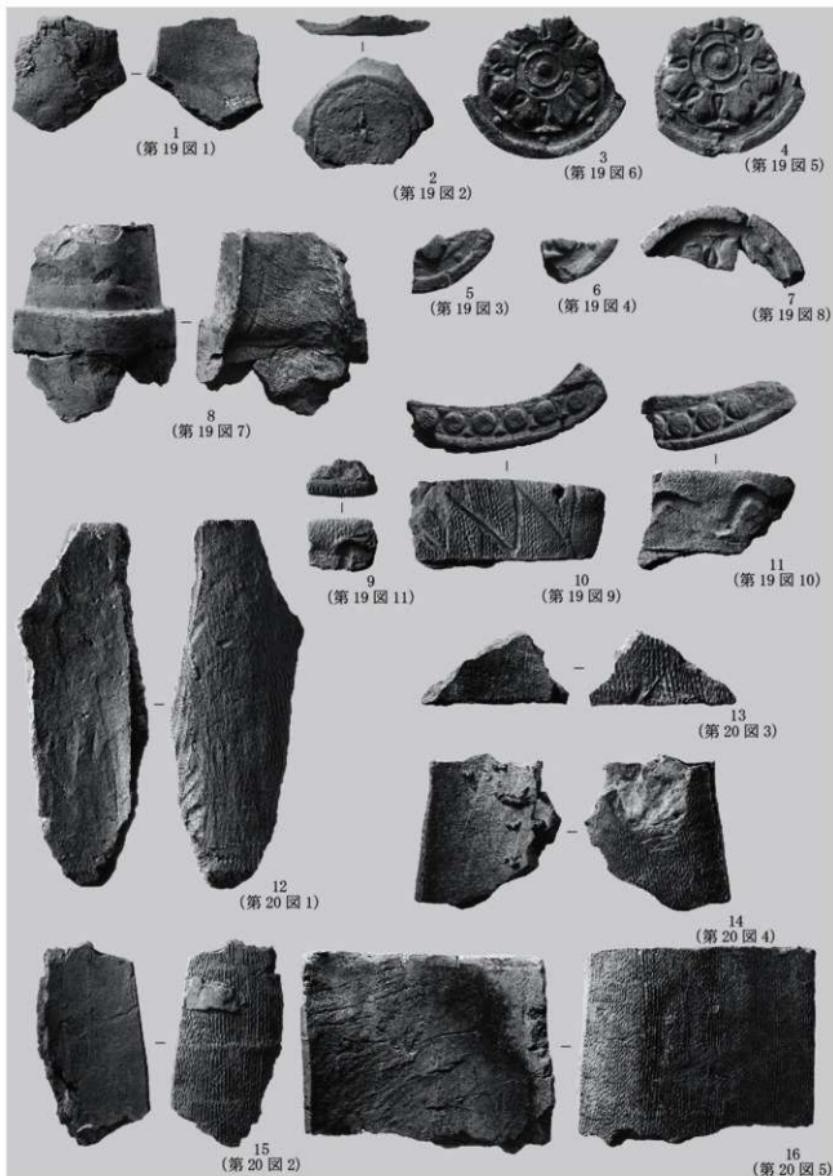
写真図版 6 穴田東窯跡第1次調査出土遺物 (4)



写真図版 7 穴田東窯跡第1次調査出土遺物 (5)



写真図版8 穴田東窯跡第1次調査出土遺物（6）



写真図版9 穴田東窯跡第1次調査出土遺物（7）

## 第3章 富沢遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

富沢遺跡は、仙台市南東部の太白区富沢、長町、長町南、泉崎、鹿野等に広くまたがる、水田跡を中心とする大規模な複合遺跡である。遺跡北西側には青葉山丘陵、南西には高館丘陵が東に向かって張り出し低地部と面している。また、青葉山丘陵南東縁には長町・利府構造線と呼ばれる活断層が北へ伸び、それによって低地と丘陵部はより明確に分けられる。青葉山丘陵と高館丘陵の間から平野部に流れ込む名取川の下流域西半部は沖積平野となっており、左岸は郡山低地、右岸は名取低地と呼ばれる。

本遺跡は郡山低地の中央西寄りに位置し、仙台平野を南東方向に流れる広瀬川と、名取川の支流である笊川の自然堤防に挟まれた後背湿地上に立地する。地質や富沢遺跡における土地条件の変遷については、富沢遺跡第15次調査報告書に詳細に記載されていることから、そちらを参照されたい。

富沢遺跡の発掘調査件数はこれまで150次を数え、弥生時代から近世にかけての水田が重層的に検出されている。特に1987～1988年の第30次調査では古代の条里型土地区分に關わる大畦畔の検出に加え、旧石器時代の遺構や遺物も発見されており重要である。今回の151次調査地点の近辺では、西に隣接する旧鍋田変電所の建設に伴う13次、太白区役所建設時の28次、東に隣接する県道仙台・館腰線建設の際の49次調査など多数行われている。それぞれ水田に伴う多くの畦畔や溝跡などが検出され、学史的に大きな成果を上げている。一方で、富沢遺跡周辺には数々の遺跡が分布しており、通時に見て生活に適した場所であったと考えられる。以下、主要な近辺の遺跡に触れて富沢の歴史環境を概観したい。

**下ノ内浦遺跡**：富沢遺跡の南に隣接する縄文時代早期～前期・後期・弥生～古代にかけての集落跡および水田跡である。日計式土器とともに竪穴造構と7基の土壙が検出されていることから、縄文早期にも近辺では生活の痕跡が確認できる。また、平安時代と考えられる水田跡が検出されている。

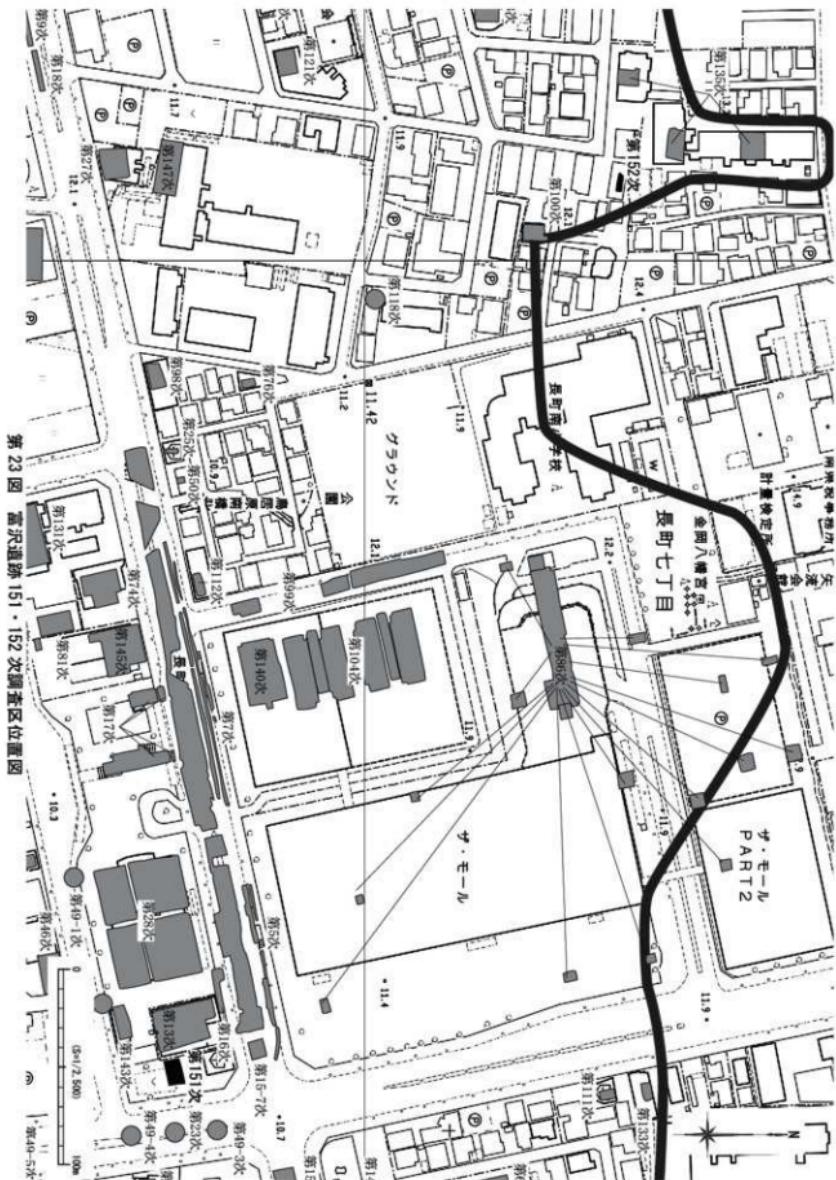
**山口遺跡**：富沢遺跡に南接、下ノ内浦遺跡に西接する縄文時代早期末～後期・弥生・中世にかけての集落跡および水田跡である。山口遺跡で検出された平安時代の水田跡は10世紀前半とされる火山灰層で覆われておらず、真北方向を基準とする大畦畔と直交する小畦畔によって区画される。この大畦畔は富沢遺跡の各調査でも検出されており、条里型土地割に關わる畦畔であると考えられている（平間 1991）。

**泉崎浦遺跡**：富沢遺跡のはば中心部に位置する、縄文～古墳・平安・近世にかけての集落跡および水田跡である。後背湿地と微高地に位置し、後背湿地側で弥生時代と平安時代の水田跡が検出された。畦畔は東西と南北が意識されているが、弥生時代の水田は水田規模、枚数などは不明である。



第22図 富沢遺跡と周辺の遺跡

第2節 第151次調査



## 第2節 第151次調査

### 1. 調査要項

遺跡名	富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号：01369）
調査地点	仙台市太白区長町南3丁目1-2、1-3
調査期間	令和3年8月23日～10月18日
調査対象面積	354.13 m <sup>2</sup> （敷地面積：849.89 m <sup>2</sup> ）
調査面積	約93.6 m <sup>2</sup>
調査原因	共同住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主査 菅原翔太 主事 早川太陽



### 2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和3年5月21日付で事業者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和3年5月25日付R3教生文第109-21号で回答）に基づき実施した。調査開始までには事前に現地確認を行い、重機の搬入経路や調査対象となる範囲の確認を行いながら、付近の建物や電柱に注意しつつ調査を開始することとした。また、範囲内の草木が重機の進入や調査の妨げとなることから、事前に伐根を行ってから掘削を開始した。調査区の大きさは約40 m<sup>2</sup>であるが、安全を考慮してGL-2.0mを目安に中段をつけて調査区を縮小した。掘削排土は場内仮置きとした。掘削の際は重機と人力を併用した。重機で盛土とI層およびII層を除去した後、側溝の掘削により水田耕作土を確認し、III・VII・IX・XII層上面において精査を行った。XII層の調査終了後は、部分的な掘り下げによる断面での調査に切り替えた。出土遺物はナンバーをつけて層位ごとに取り上げた。10月18日まで調査区内の遺構の完掘および計測、重機による埋め戻し等を行い、野外調査を終了した。

遺構の記録については、平面図はトータルステーションと遺構実測支援システムを用い、また適宜断面図（S = 1/20）を作製した。記録撮影にはデジタルカメラを用いた。

第24図 第151次調査区配置図

### 3. 基本層序

基本層は厚さ約1.6 mの盛土下にI～XII層まで確認している。土層の観察については調査担当者が全調査区で統一した見方によって行った。どの層でも年代を決定できるような遺物が出土しなかつたため、過去の調査履歴と比較して対応させ年代を決定した。I～II層は近～現代の水田耕作土であり、III層以下は中世～弥生時代の水田耕作土と泥炭質粘土のラミナ状自然堆積層が続く。

- I 層：2.5Y3/1 黒褐色シルト。径10～20 mmの小礫を含んでいる。層厚は約15～20 cmである。層中に陶磁器を少量含む。現代の耕作土である。
- II 層：2.5Y3/2 黑褐色シルト。層厚は0～8 cmである。全体的に残存状況はあまりよくない。径10 mm程度の酸化鉄粒を下面に斑状に含んでいる。水田耕作土の可能性がある。
- III 層：5Y2/2 オリーブ黒色粘土。層厚は約3～25 cmである。下面の凹凸が激しく、IV層に由来する灰白色の火山灰ブロックを少量含んでおり、調査区の東側に向かうほどIV層を攪拌しているため灰色に近くな

表6 土層対応表

層位名	色調	土性	成因	特徴	151次		28次			49次	
					対応層	水田の有無	所属年代	対応層	水田の有無	所属年代	所属年代
I 黒褐色	シルト	水田耕作土	粗質土	1	水田耕作土	現代	1	水田	現代		
II 黒褐色	シルト	水田耕作土?	酸化鉄と褐斑に含む	2?	水田耕作土?	近現代	2?	水田耕作土?	近現代		
III オリーブ黒	粘土	水田耕作土	酸化鉄と褐斑に含む	3	水田耕作土?	近世	3a	水田耕作土?			
IV 黄灰色	粘土	水田耕作土	酸化鉄と褐斑に含む	4	水田耕作土?	平安以降	4a	水田耕作土?	平安?		
V 褐色	粘土	自然準確土	下層が火山灰土で水田を複作、褐斑と斑状に残る	5	-	-	5a	-	-		
VI オリーブ黒・黄褐色	粘土	日暮准確土	瓦層	6?	-	-	-	-	-		
VII 黑褐色	粘土	水田耕作土	下層が混じて下層ブロックを含む	8a?	水田耕作土	弥生(十三塚)	8a?	水田耕作土	弥生		
IX オリーブ黒・黑色	泥炭質粘土	自然準確土	瓦層	9a?	-	-	10a?	-	-		
X 黑褐色	粘土	水田耕作土	黒褐色土ブロックを少量含む	10b	水田耕作土	弥生(時期不明)	10b?	水田耕作土	弥生		
XI 黑褐色・灰黄褐色	泥炭質粘土	自然準確土	瓦層	10c	-	-	10c	-	-		
XII 黑褐色	粘土	水田耕作土	下層に酸化鉄ブロックを含む	10d	水田耕作土	弥生(時期不明)	10d?	水田耕作土	弥生		
XIII 黑褐色・灰黄褐色	粘土	自然準確土	瓦層、黒褐色土ブロックを斑状に含む	10e?	-	-	10e?	-	-		
XIV 黑褐色	粘土	自然準確土	部分的に明瞭がある	-	-	-	-	-	-		
XV 黑褐色・灰黄褐色	粘土	自然準確土	瓦層	11b~12a	-	弥生(時期不明)	12a?	-	-		
XVI 黑褐色・灰黄褐色	粘土	自然準確土	瓦層	13	-	-	13	-	-		

る。段差状の高まりが検出された。中～近世の水田耕作土と推定される。

- IV 層：2.5Y4/1 黄灰色粘土。層厚は約5～20cmである。西壁際および東壁際の一部に分布する。径10mm程度の灰白色の火山灰ブロックを含んでいるほか、下面に酸化鉄粒を斑状に含む。下面是凹凸が激しい。過去の調査から、平安期の水田耕作土であると推定される。
- V 層：2.5Y2/1 黑褐色粘土。層厚は0～10cmである。下面に下層由来の径約20mmのブロックを斑状に含む。西壁の一部において、層下面に凹凸が見られる。部分的に欠落する。
- VI 層：5Y2/2 オリーブ黒色粘土と 2.5Y5/4 黄褐色粘土の互層。層厚は約4～13cmである。
- VII 層：2・5Y3/1 黑褐色粘土。層厚は約2～8cmである。層下面には凹凸がある。過去の調査から、弥生時代後期十三塚式段階の水田耕作土と推定される。
- VIII 層：5Y2/2 オリーブ黒色と 2.5Y2/1 黑褐色の互層。植物遺体を大量に含む泥炭質粘土層である。層厚は約25～30cmである。
- IX 層：10YR3/1 黑褐色粘土。層厚は約3～8cmである。黄褐色土ブロックを少量含む。層下面是凹凸が激しい。弥生時代の水田耕作土と推定される。
- X 層：2.5Y3/1 黑褐色と 10YR4/2 灰黄褐色土の互層。植物遺体を大量に含む泥炭質粘土層である。層厚は約8～12cmである。
- XI 層：10YR2/2 黑褐色と 10YR4/2 灰黄褐色土の互層。植物遺体を大量に含む泥炭質粘土層である。層厚は約10～15cmである。
- XII 層：2.5Y3/2 黑褐色粘土。層厚は約5～10cmである。下面に酸化鉄ブロックをごく少量含む。層下面是凹凸が激しい。弥生時代の水田耕作土と推定される。
- XIII 層：10YR2/2 黑褐色粘土と 10YR4/2 灰黄褐色粘土の互層。植物遺体が少量と、黒褐色土ブロックを斑状に含む。層厚は約3～12cmである。
- XIV 層：2.5Y3/1 黑褐色粘土。植物遺体を層下面に大量に含む。層厚は約2～5cmである。
- XV 層：2.5Y2/1 黑褐色粘土と 10YR4/2 灰黄褐色粘土の互層。植物遺体を中ほどに層状に大量に含む。層厚は約15cmである。
- XVI 層：10YR2/1 黑褐色粘土と 10YR4/2 灰黄褐色粘土の互層。植物遺体を少量含む。層厚は15cm以上である。

#### 4. 発見遺構と出土遺物

近現代を除く水田耕作土を5層（III・IV・VII・IX・XII層）検出し、このうちIII層上面で畦畔状の段差1条、VII層上面で耕作域と非耕作域を検出した。各層の水田は南東から東に向かって約3～5cm傾斜して低くなっている。

出土遺物は主に土師器34点、須恵器4点、陶器10点、磁器3点、瓦2点、自然遺物10点など計63点あり、いずれも小片であるため、写真のみの掲載とした。

##### (1) III層水田跡

###### 1. 検出・遺存状況

畦畔状の段差は、直上層を削り込んでいく過程で確認された。一部擾乱されているが、全体的に遺存状況は良好である。

###### 2. 耕作土

耕作土はオリーブ黒色粘土である。層厚は約3～25cmで一定でなく、平均約15cmである。

下面の凹凸が激しく、下層の水田耕作土を搅拌して構築されているため灰白色火山灰ブロックを少量含む。

###### 3. 遺構の状況

段差はIV層の火山灰を含んだ水田耕作土を盛り上げて造られており、南北方向に1条検出された。真北よりも8°ほど東に傾いている。高低差は約3cmである。断面を観察すると、段差とほぼ一致する箇所にIV層の耕作土が遺存している。III層水田の耕作により大部分は搅拌されたが本来IV層は全面に分布しており、段差直下は耕作が及ばないため結果的に帶状に残存したと推定される。概して、大畦畔の直下は下層の耕作土が搅拌されず残る場合が多いため、今回のIII層とIV層の状況から段差は大畦畔の一部である可能性が高いと考えられる。

###### 4. 水田面の標高と傾斜

全体的に南東方向へ緩やかに傾斜している。標高は8.624～8.516mである。

##### (2) IV層水田耕作土

###### 1. 検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかつたため、水田耕作土と判断した。遺存状況はあまりよくない。

###### 2. 耕作土

耕作土は黄灰色粘土である。灰白色火山灰をブロック状に多く含む。下面の凹凸は激しい。

##### (3) VII層水田耕作土

###### 1. 検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかつたため、水田耕作土と判断した。遺存状況はあまりよくない。また、南西隅で非耕作域が検出された。

###### 2. 耕作土

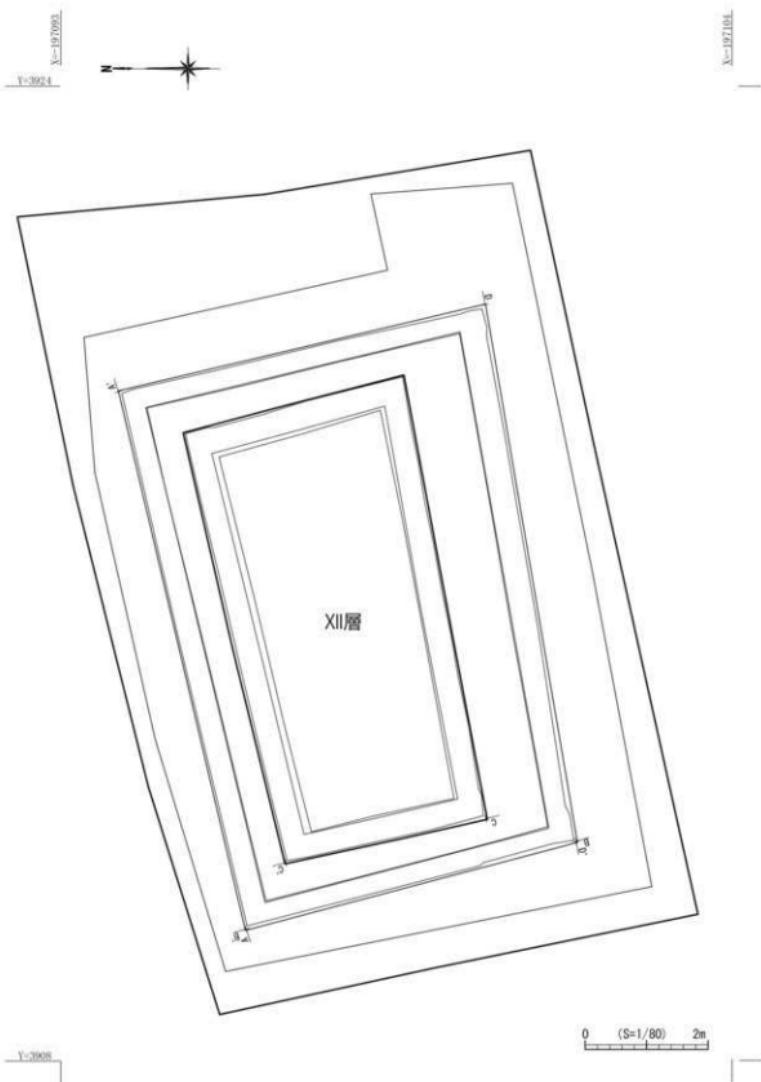
耕作土は黒褐色粘土である。層厚は約0～8cmで薄く堆積する。下面に凹凸があり、直下層を巻き上げている。

###### 3. 水田面の標高と傾斜

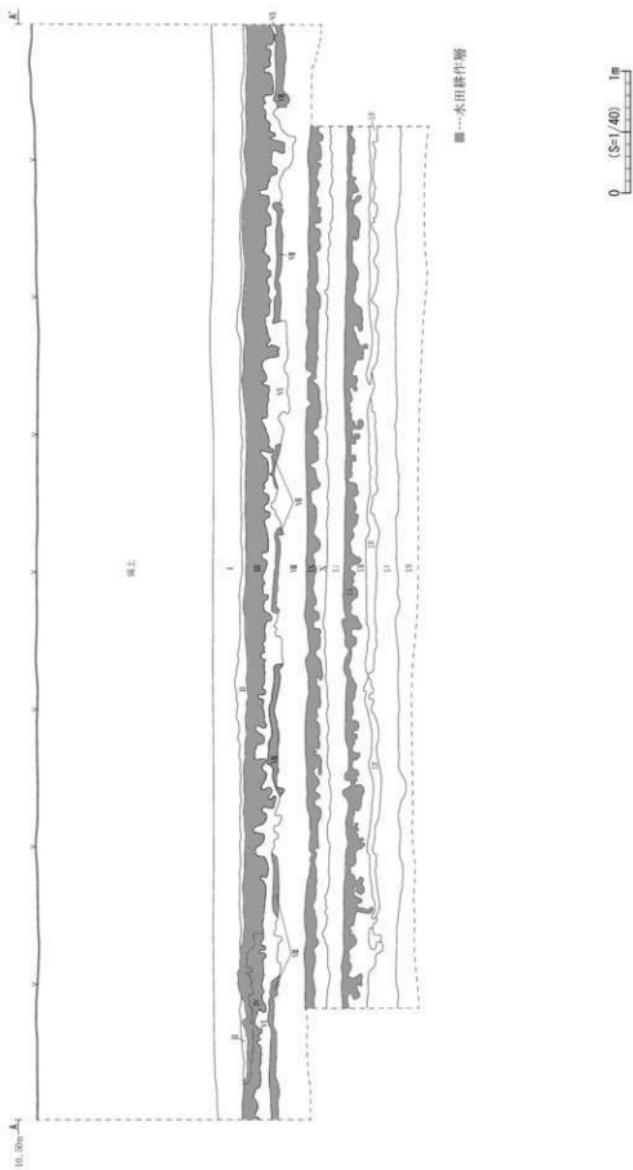
全体的に南東方向へ緩やかに傾斜している。標高は8.428～8.339mである。

###### 4. 非耕作域の状況

西壁および南壁で耕作土が途切れた位置と対応している。下層の混入がほぼない黒褐色粘土で、やや直線的に

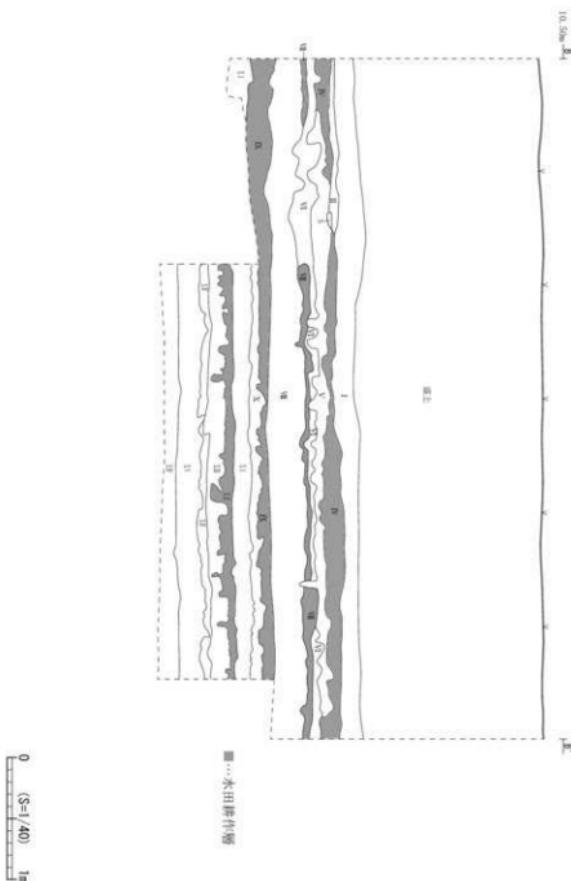


第25図 第151次調査区全体平面図



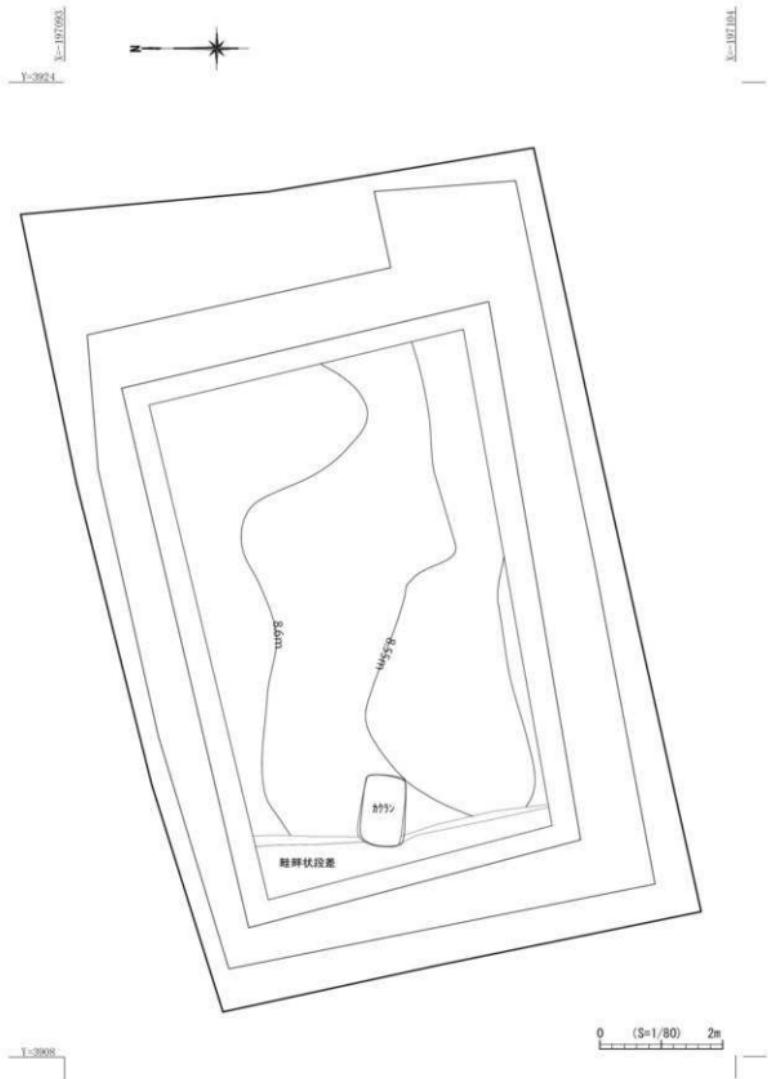
第26図 調査区北壁断面図

第27図 調査区西壁断面図

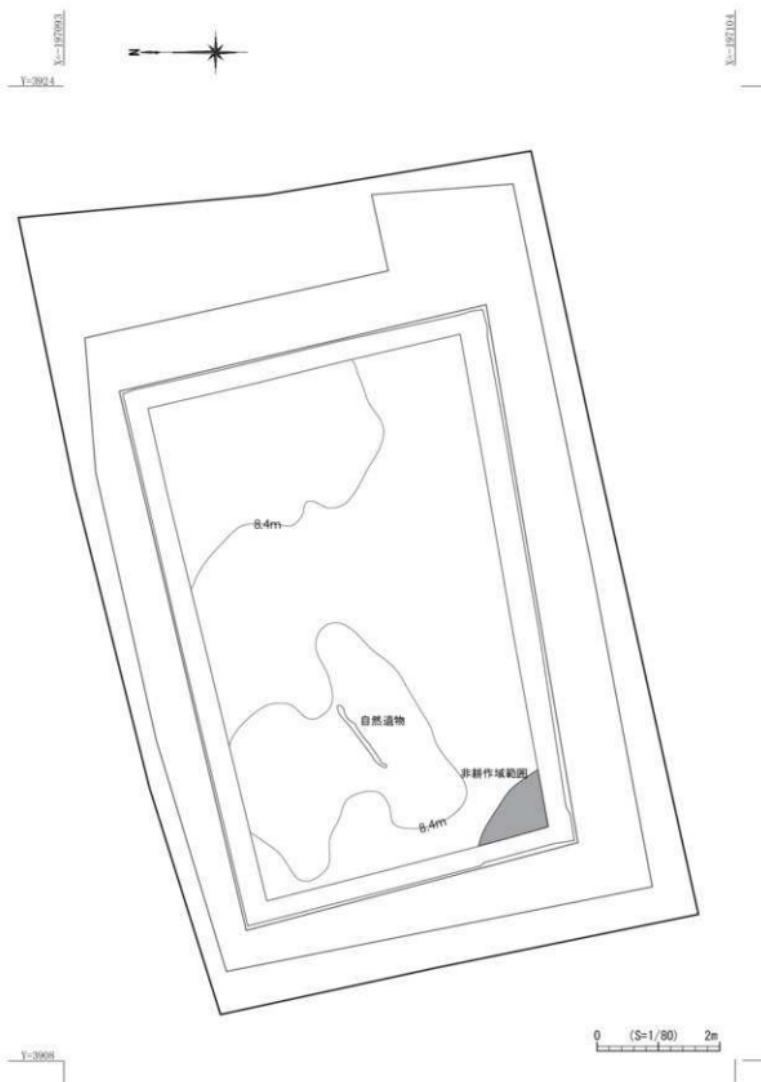


第28図 調査区南壁断面図





第29図 III層およびIV層平面図



第30図 VII層平面図

調査区外まで延びている。一方で、VII層は境界が確認された部分以外にも数箇所途切れて堆積しているが、これらの部分では対応する境界線は確認されていない。いずれの平面及び断面でも判断が難しいことから、今回はその可能性があると指摘するに留める。

#### (4) IX層水田耕作土

##### 1. 検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかつたが層相から水田耕作土と判断した。遺存状況は比較的良好である。

##### 2. 耕作土

耕作土は黒褐色粘土である。層厚は約3～8cmで、概ね一定である。下面の凹凸が激しく、直下層を巻き上げている。

##### 3. 水田面の標高と傾斜

ほぼ平坦な面だが、わずかに東へ傾斜する。標高は8.111～8.071mである。

#### (5) XII層水田耕作土

##### 1. 検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかつたが層相から水田耕作土と判断した。遺存状況は比較的良好である。

##### 2. 耕作土

耕作土は黒褐色粘土である。層厚は約5～10cmで概ね一定である。下面の凹凸が激しく、直下層を巻き上げている。

##### 3. 水田面の標高と傾斜

ほぼ平坦な面だが、わずかに南東へ傾斜する。標高は7.792～7.759mである。

表7 遺物観察表

番号	標記番号	出土位置	層位	種別	墓地	遺量(cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	深度	幕高				
1	C-1	-	II層中(側底)	井戸クロト 土師器	幾々	-	-	-	ヘラナゲ	鋸面剥落	粘土繊維 砂粒含む	17-1
2	C-2	-	VII層中 上部	井戸クロト 土師器	坪々	-	-	-	ヘラナゲ	ヘナナゲ	外面・内面ともに剥落が著しい、堅土繊維 砂粒含む	17-2
3	D-1	-	II層中 上部	井戸クロト 土師器	坪々	-	-	-	ロクロナゲ	鋸面剥落	粘土繊維 砂粒含む	17-3
4	D-2	-	II層中 上部	井戸クロト 土師器	坪々	-	-	-	ロクロナゲ→手持ちヘラケズリ	鋸面剥落	粘土繊維 砂粒含む	17-4
5	D-3	-	III層上部 上部	井戸クロト 土師器	坪々	-	-	-	ロクロナゲ→手持ちヘラケズリ	鋸面剥落	粘土繊維 砂粒含む	17-5
6	D-4	-	III層上部 上部	井戸クロト 土師器	幾々	-	-	-	ロクロナゲ	鋸面剥落	粘土繊維 砂粒含む	17-6
7	D-5	-	III層上部 上部	井戸クロト 土師器	坪々	-	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	粘土繊維 砂粒含む	17-7
8	D-6	-	VII層中 上部	井戸クロト 土師器	坪々	-	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	粘土繊維 砂粒含む	17-8
9	D-7	-	VII層中 上部	井戸クロト 土師器	坪々	-	-	-	ロクロナゲ→手持ちヘラケズリ	鋸面剥落	内面の剥落が著しい 粘土繊維 砂粒含む	17-9
10	D-8	-	VII層中 上部	井戸クロト 土師器	幾々	-	-	-	ロクロナゲ→ヘラケズリ	鋸面剥落	粘土繊維 砂粒含む	17-10
11	D-9	-	VII層中 上部	井戸クロト 土師器	坪々	-	-	-	ロクロナゲ	鋸面剥落	外側の削落が著しく内面の剥落が著しい 粘土繊維 砂粒含む	17-11
12	E-1	-	II層中 (側底)	瓶底器	坪々	-	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	粘土繊維	17-12

番号	標記番号	出土位置	層位	種別	墓地	遺量(cm)			備考	写真図版	
						長さ	幅	厚さ			
13	G-1	-	Ⅲ層中 (火山灰含)	瓦	平瓦	(4.5)	(5.5)	(1.0)	機工瓦 凸面:ナゲ 凹面:ナゲ		17-13
14	H-1	-	Ⅲ層中 (火山灰含)	石製品	砥石?	(6.0)	(4.0)	(1.0)	部分的に砥石と見られる面あり 磨耗の程度あり 表面は剥落している 重さ44.00g 石材:安山岩		17-14
15	I-2	-	Ⅲ層中 (火山灰含)	本製品?	-	-	-	-	部分的に平坦な面が見られる		17-15
16	I-1	-	Ⅲ層	本製品?	-	-	-	-			17-16

## 出土遺物（写真図版17）

1～11は土師器である。土師器は主にⅢ層水田耕作土中から出土している。全体で34点出土した内、16点を掲載した。1～2は非クロコロ土師器で、2点とも摩滅や器面剥落が激しく観察が困難である。1は甕で外面にヘラナデ痕跡がわずかに見える。2は壺で内外面ともヘラナデ調整と考えられる。3～11はロクロ土師器で、ほとんどが壺の破片である。これらも摩滅や器面の剥落が著しく調整の観察が困難である。基本的には内外面ともにロクロナデで、数点外顔をロクロナデ後手持ちによるヘラケズリを施す。

12は須恵器で壺の口縁部であり、内外面ともにロクロナデ痕跡が確認できる。

13は焼し瓦で、Ⅲ層から出土の破片資料であり、全体的に暗灰色を呈した平瓦である。

15、16は自然遺物である。16は長さ約130cmの大型の枝であり、中ほどに穴が開いている。これは節が何らかの要因で抜け落ちたことで形成された穴と考えられる。木製品ではなく自然遺物ととらえたが、付近で行われた28次調査においては類似する杭などが出土していることから、この遺物も杭材として遺跡内に搬入された可能性がある。15は長さ約13cmでひし形に近い。切断されたような平坦な面が一部見られる。現段階では用途の推定が難しく判断ができないため、自然遺物ととらえた。

14は砥石と考えられる石製品で、安山岩が用いられている。部分的に砥面の形成が認められ線状の擦痕が観察できることから、小片であるが砥石と判断した。

## 5.まとめ

調査の結果、水田耕作土5層とⅢ層上面で畦畔状の段差が1条、VII層上面で耕作域と非耕作域が検出された。Ⅲ層（近世）、IV層（平安）、VII層（弥生—十三塚式）、IX層・II層（弥生一舟形圓式以降）は過去の調査履歴と概ね対応した水田跡である。しかし全体的に遺存状態は悪く、主な比較対象の第28次および第49次調査と対応するような畦畔は平面でも断面でも確認されなかった。

また、Ⅲ層上面では畦畔状の段差が確認された。段落下のIV層は他と比べて搅拌されずよく遺存していることから、この段差は大畦畔の一部であった可能性が高い。

## 引用・参考文献

- 仙台市教育委員会・仙台市交通局 1985 「VI富沢水田遺跡(C-301)鳥居原地区」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 pp55-59
- 仙台市教育委員会 1987 『富沢 仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴なう富沢遺跡第15次発掘調査報告書』  
仙台市文化財調査報告書第98集
- 仙台市教育委員会 1988 『富沢遺跡—第28次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第114集
- 仙台市教育委員会 1990 『富沢遺跡49次 東光寺遺跡第3次 青葉山A遺跡』仙台市文化財調査報告書第142集  
pp1-18
- 斎野裕彦 2005 「水田跡の調査方法及び構造の理解について」『シンポジウム 山形県の水田遺構 資料集』  
山形考古学会 pp5-19
- 平間亮輔 1991 「(ウ)条里型土地割について」『富沢遺跡—第30次調査報告書第1分冊—調文  
～近世編』仙台市文化財調査報告書第149集 第6章第3節 pp366-371



1. Ⅲ層水田跡 確認状況（南から）



2. Ⅲ層水田跡 確認状況（東から）

写真図版 10 富沢遺跡第151次調査（1）



1. III層水田跡 畦畔状段差 確認状況（東から）



2. III層水田跡 畦畔状段差 確認状況（部分）（東から）

写真図版 11 富沢遺跡第 151 次調査（2）

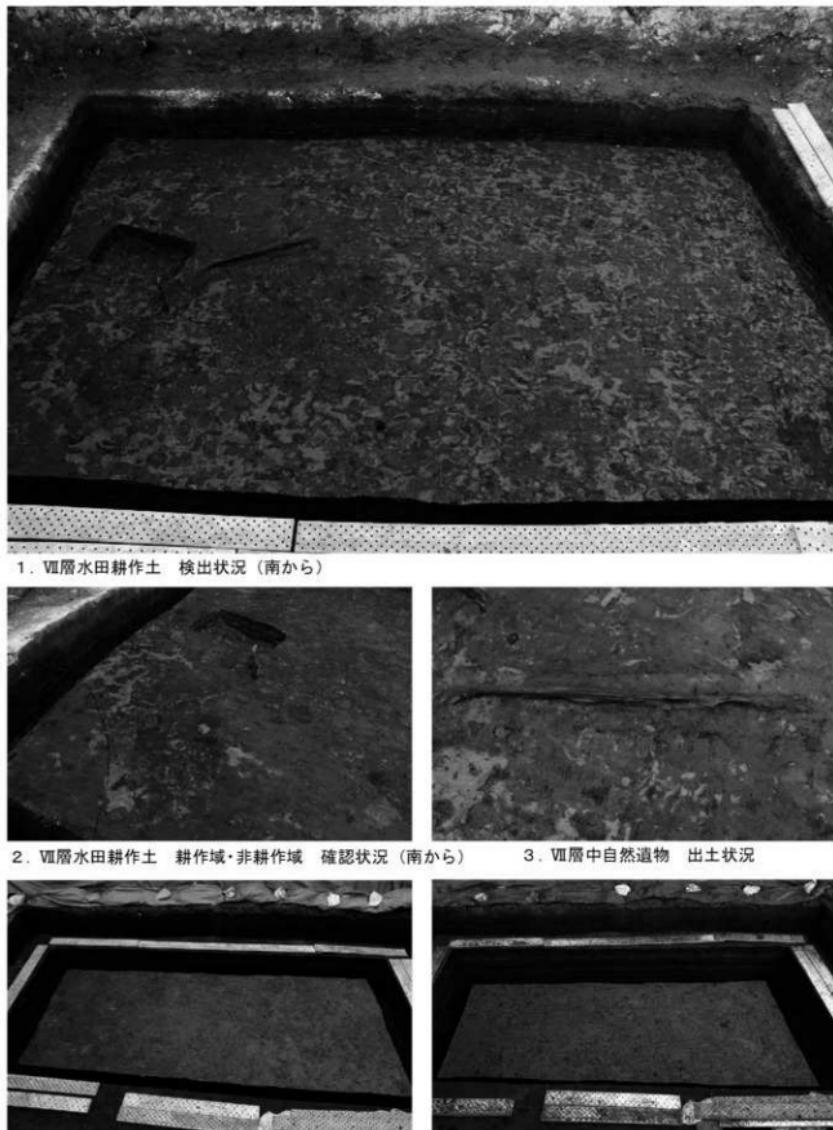


1. III層水田跡 検出状況（南から）

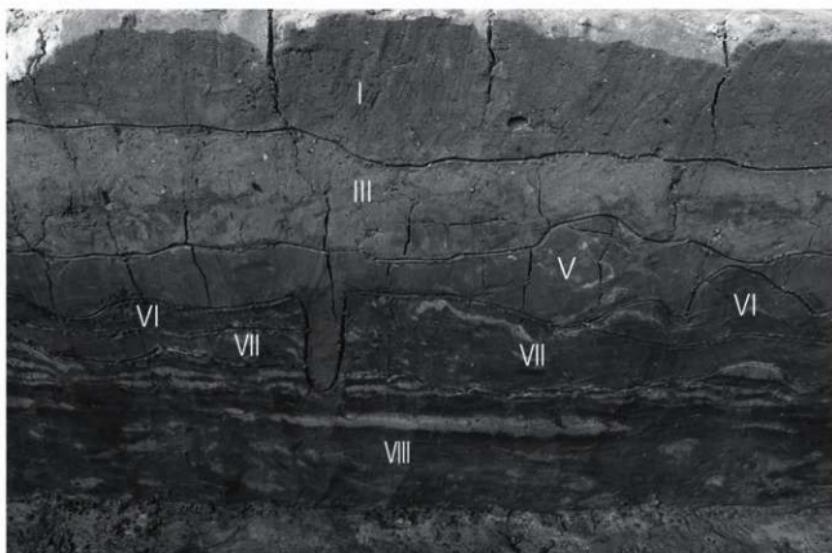


2. VII層水田耕作土 確認状況（南から）

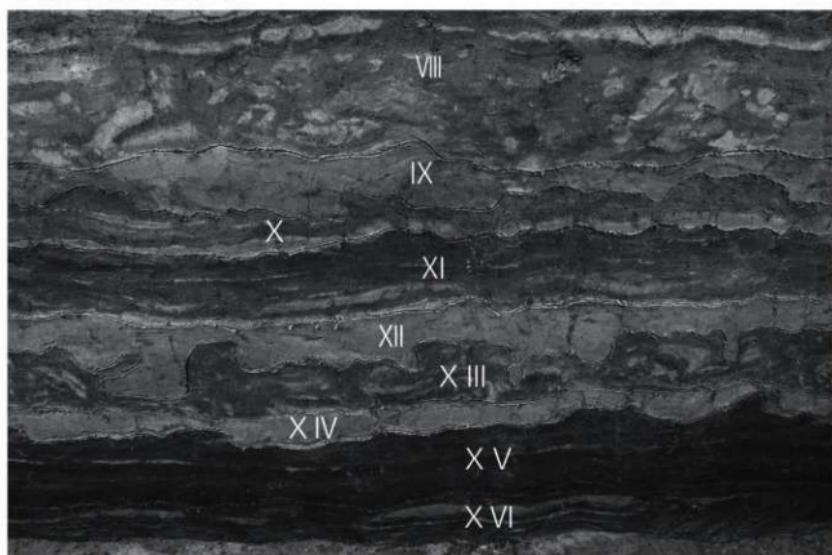
写真図版 12 富沢遺跡第151次調査（3）



写真図版 13 富沢遺跡第 151 次調査（4）

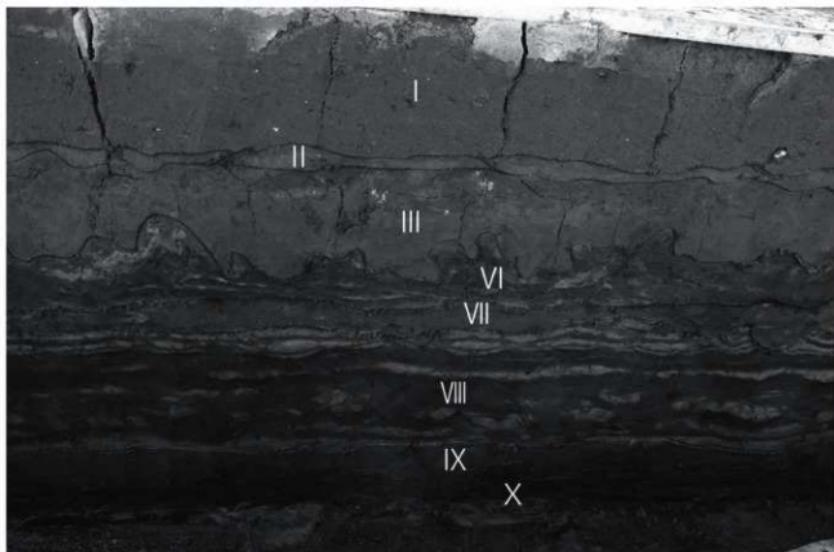


1. 調査区基本層 西壁 (1)



2. 調査区基本層 西壁 (2)

写真図版 14 富沢遺跡第151次調査 (5)

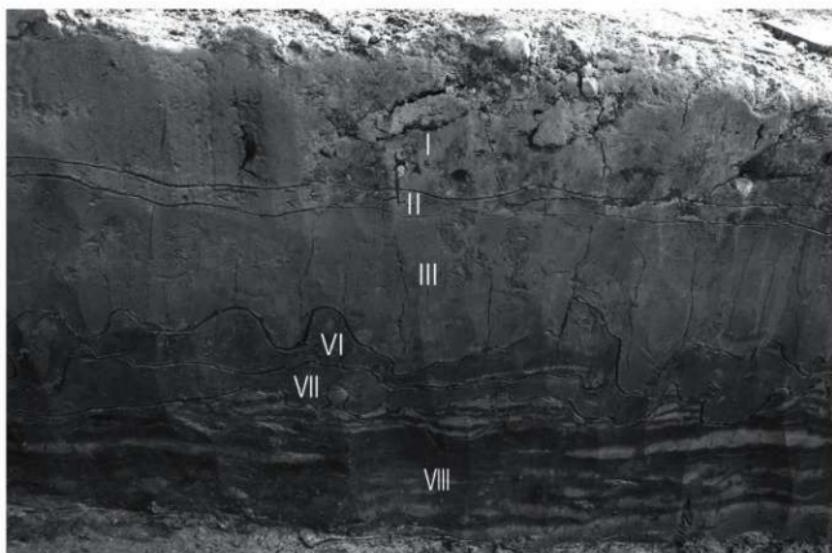


1. 調査区基本層 南壁 (1)

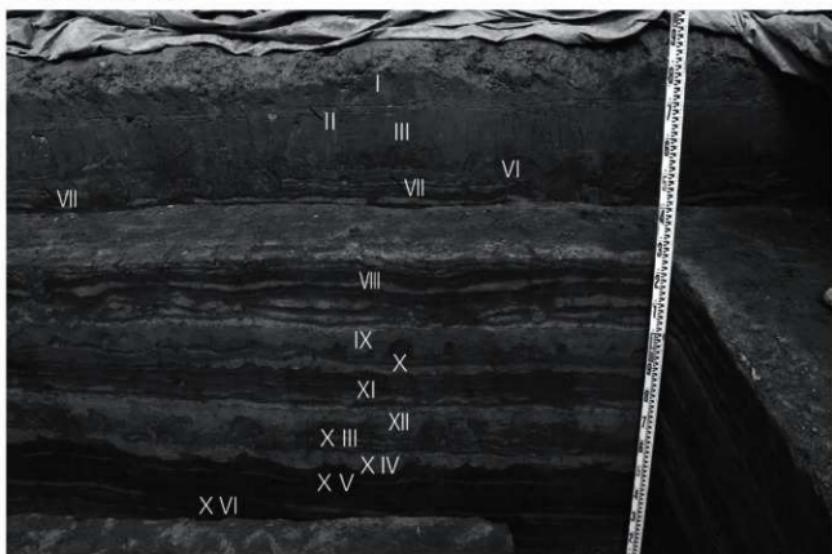


2. 調査区基本層 南壁 (2)

写真図版 15 富沢遺跡第 151 次調査 (6)

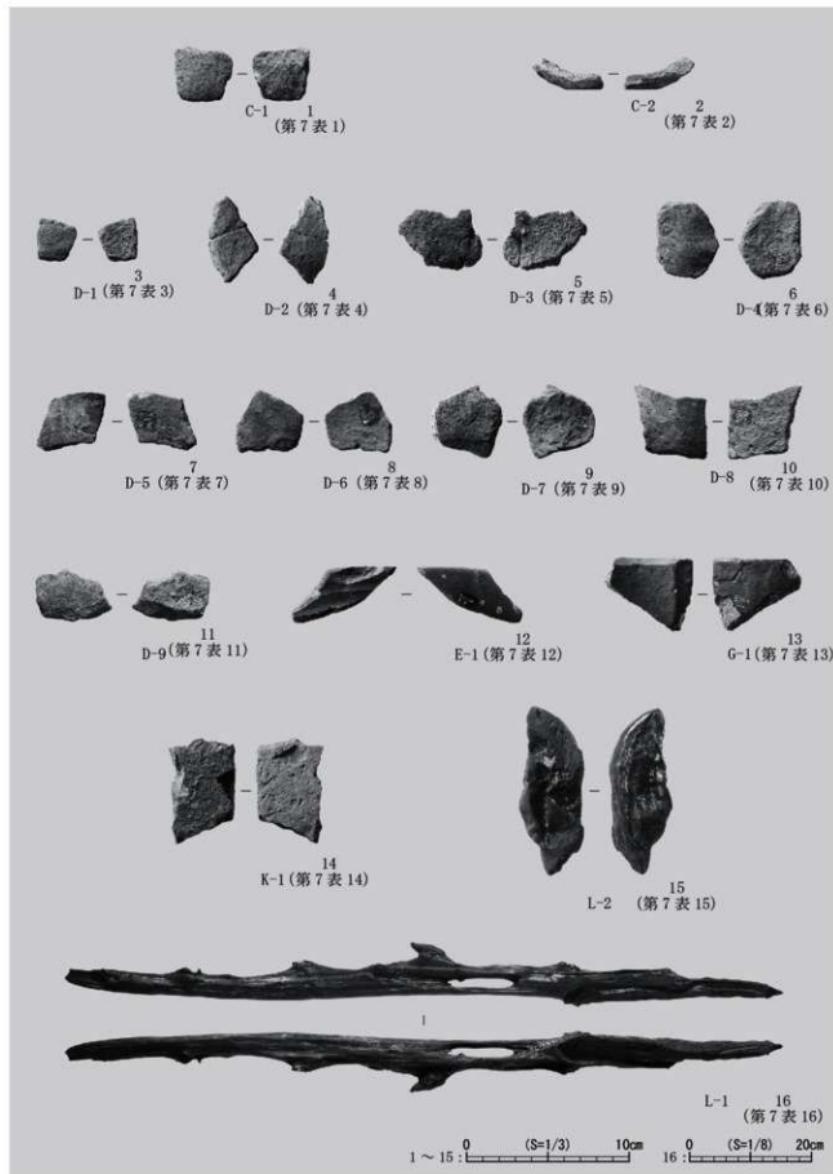


1. 調査区基本層 東壁



2. 調査区基本層 北壁

写真図版 16 富沢遺跡第 151 次調査 (7)

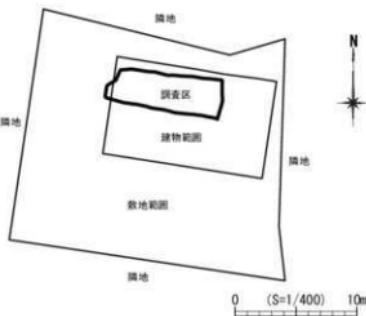


写真図版 17 富沢遺跡第 151 次調査出土遺物

## 第3節 第152次調査

## 1. 調査要項

遺跡名	富沢遺跡(01369)
調査地点	仙台市太白区鹿野3丁目211-7
調査期間	令和3年12月6日～10日
調査対象面積	116.56 m <sup>2</sup> (敷地面積: 428.92 m <sup>2</sup> )
調査面積	約24 m <sup>2</sup>
調査原因	共同住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担当職員	係長 平間亮輔 主事 早川太陽



第31図 第152次調査区配置図

## 2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は令和3年9月13日付で事業者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和3年9月16日付R3教生文第109-85号で回答）に基づき実施した。今回の調査地点は、第30次調査で確認されていた平安時代の条里型土地割に関わる大畠畔の南北方向の延長上にあることから、埋没条里の検出が予想された。調査区は東西約8.0m×南北3.0mで設定した。

重機掘削で盛土と現代の水田耕作土を除去した後、遺構確認および掘下げを行った。出土遺物はナンバーをつけて各層位ごとに取り上げた。12月10日までに調査区内の計測等を行い野外調査を終了した。

遺構の記録については、平面図、断面図(S=1/20)を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。また基準点は近隣の2級基準点「1114A」からトータルステーションを用いて移設した。

## 3. 基本層序

基本層は盛土以下にI a～V層まで確認している。土層の観察については調査担当者が統一した見方によって行った。

I a層：2.5Y3/1 黒褐色粘土。現代の水田耕作土であるが、造成時の盛土やゴミが混入している。

I b層：2.5Y2/1 黒色粘土。現代の水田耕作土である。調査区西側で部分的に深くなり下層を切っている。

II 層：2.5Y3/1 黑褐色粘土。下面是乱されておらず、水田耕作土の可能性は低い。

III 層：2.5Y3/1 黑褐色粘土と5Y4/2 粗砂との互層。自然堆積した粘土と丘陵部から複数回流れ込んだ砂によって形成されたと考えられる。

IV 層：2.5Y4/2 黑褐色粘土。

V 層：10YR3/2 黑褐色の泥炭質粘土。

#### 4. 発見遺構と出土遺物

今回は30次調査で確認された平安時代の条里型土地割（特にNS0-1）に伴う大畦畔の検出を主な目的とし、東西約8m×南北約3mの調査区を設定したが、中・近世や古代の水田および区画等は確認されなかった。参考とした30次調査においては旧測地系に基づいて座標を割り出して区画を復元していることから、現在の都市計画図と合わせるために世界測地系に変換した。数値は以下の通りである。

畦畔No.	X 座標	Y 座標	→	X 座標	Y 座標
NS0-1	-197606.2	+3749.8		-197297.4392	3449.7994

さらに、世界測地系に合わせた土地割推定線を、富沢遺跡を含め主要な周辺の遺跡範囲を加えて示した（第33図）。これを参照すると、条里型土地割に伴う大畦畔は今回の調査のような丘陵部に近い遺跡の北端ではなく、遺跡中心から東側でよく検出されている。大畦畔の存在する可能性がある範囲を狭めた点では一定の成果があつたといえる。

出土遺物はⅡ層中から土器の小片が1点のみである。約3cm四方で器面の摩耗が著しく、時期の判断は難しい。

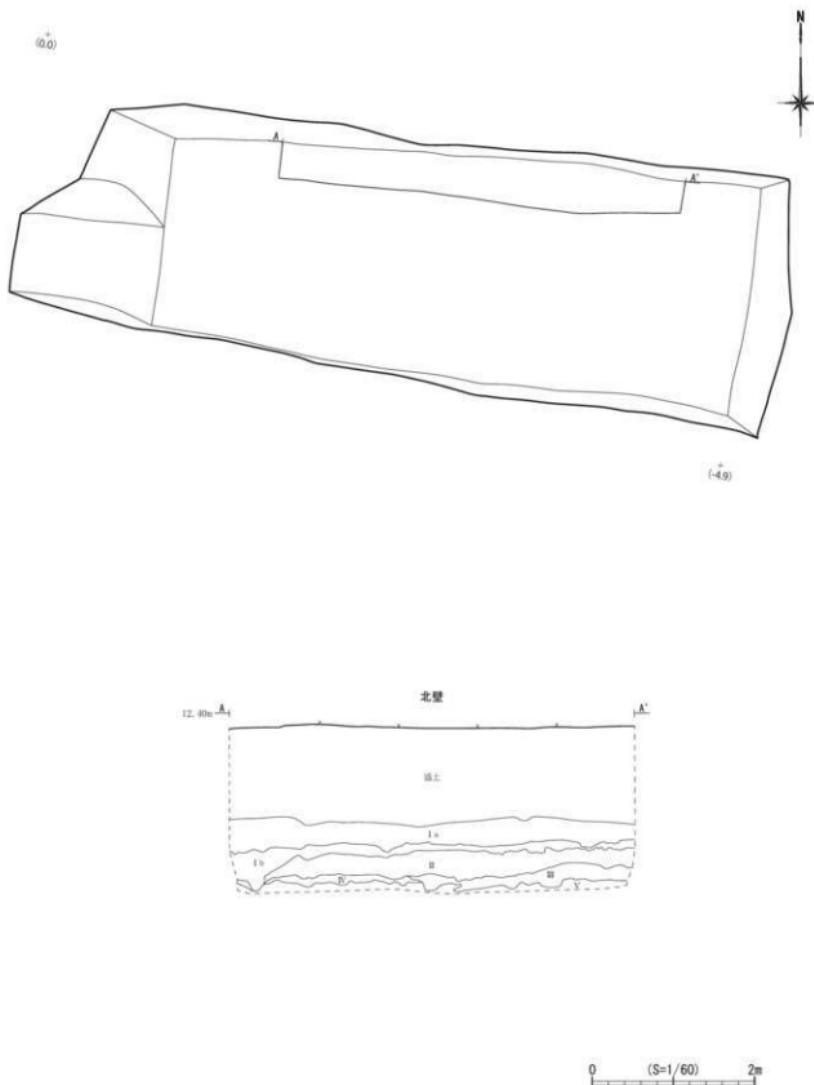
#### 5.まとめ

今回の調査では、平安時代の大畦畔検出を目的とし、最深でGL-2.0mまで掘削した。しかし畦畔や水田跡は検出されなかった。富沢遺跡では10世紀前半頃の火山灰を含んだ水田耕作土が頻繁に検出され、近隣の土地で行われた第135次調査でも火山灰を含んだ水田耕作土が検出されているが、今回の調査区では確認されなかった。現代の水田耕作土が下層へ深く陥入する部分があるため、近年の水田耕作などによって失われた可能性もある。

また、条里型土地割に関わる南北に伸びる大畦畔は、今回の調査地点のように青葉山丘陵の裾に近い地域まで延びていないことが確認できた。条里型土地割が広がる範囲については今後の調査成果の蓄積を待って改めて検討したい。

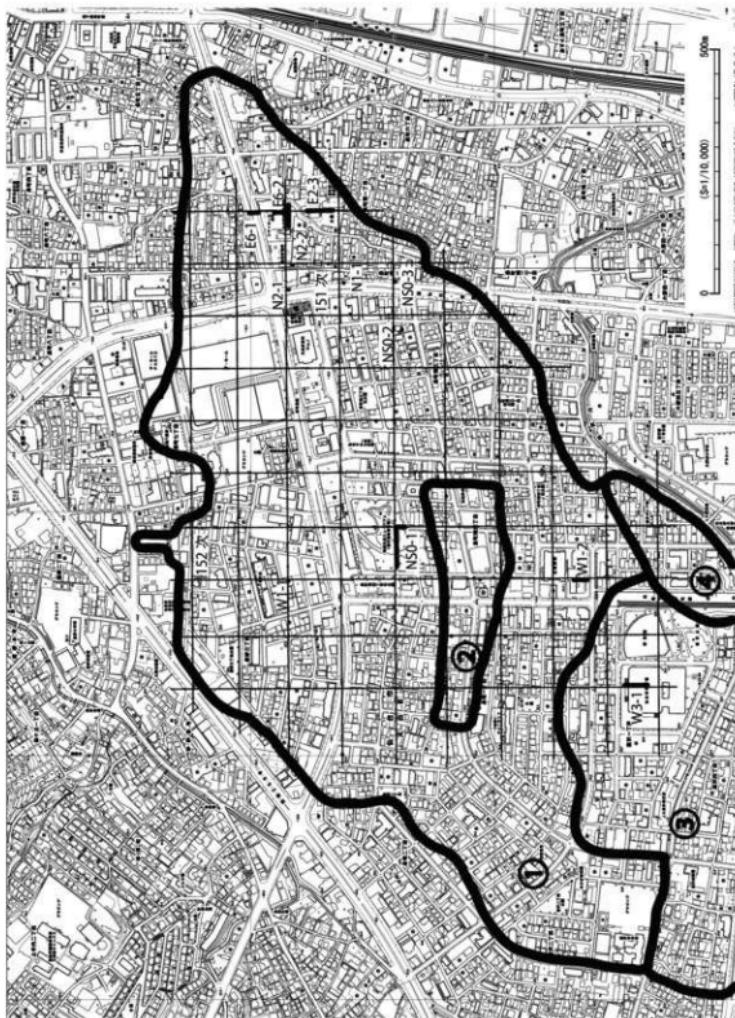
#### 引用・参考文献

- 平間亮輔 1991 「(ウ)条里型土地割について」『富沢遺跡—第30次調査報告書第I分冊—縄文～近世編』仙台市文化財調査報告書第149集 第6章第3節 pp366～371
- 斎野裕彦 2005 「水田跡の調査方法及び構造の理解について」『シンポジウム 山形県の水田遺構 資料集』山形考古学会 pp5～19
- 仙台市教育委員会 2006 『前田館跡他』仙台市文化財調査報告書第301集（第135次）



第32図 調査区平・断面図

- ①富沢遺跡
- ②泉崎浦遺跡
- ③山口遺跡
- ④下ノ内浦遺跡



第33図 富沢遺跡における条里制土地割合図



1. 調査区掘削状況（南から）



2. 調査区掘削状況（西から）



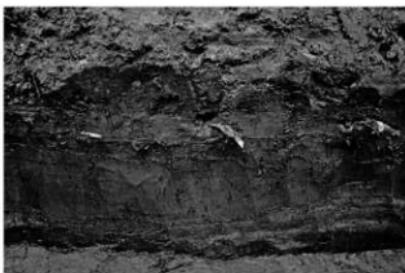
3. 調査区段下げる部分掘削状況（西から）



4. 調査区北壁断面



5. 調査区北壁断面



6. 調査区北壁断面

写真図版 18 富沢遺跡第152次調査

## 第4章 富沢館跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

富沢館跡は仙台市太白区富沢字館、熊野前に所在する。仙台市の南部、地下鉄南北線富沢駅から西へ約700mに位置し、名取川の支流の笊川によって形成された自然堤防上に立地する。現況での標高は約14～18mである。

富沢館跡はこれまでに19次にわたる調査が行われており、縄文時代、古代、中近世の時期の遺構、遺物が発見されている。

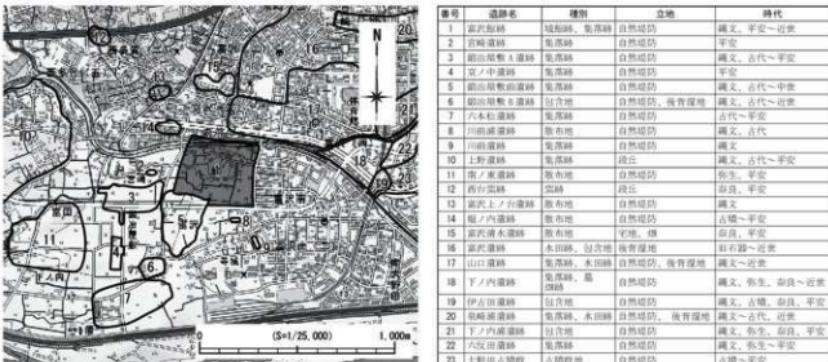
縄文時代では後期中葉の宝ヶ峰式の時期を主体として竪穴住居跡などの遺構が確認されており、縄文土器のほかに土偶やスタンプ形土器なども出土している。

古代では炉跡を伴う竪穴遺構が複数確認されている。これらの時期は9世紀から10世紀と推定され、鐵滓が多く出土した竪穴遺構もあることから鍛冶関連の遺構であると考えられている。また同様の遺構は隣接する鍛冶屋敷A遺跡、鍛冶屋敷前遺跡などでも確認されており、鍛冶屋敷A遺跡からは「謹解 申請稻事 合口口」「大田部」などと刻印された砥石が出土している（仙台市教育委員会 2018）。

中世になるとこの地域は国人領主栗野氏の支配下となり、城館が造営される。この館の詳細な造営時期や造営者は不明だが、入生田家に残る『入生田家之故実』と『館記』においては北目城主であった栗野大膳の造営によるものとされ、地域の伝承では栗野氏臣の富沢伊賀守が居城したと伝わる。

平成25年度から始まった土地地区画整理事業に伴い、城館の様相の大部分は変化したが、中心部分の土塁は現在も保存され、その姿を残している。発掘調査により館跡の周囲には1～4条に渡る堀跡が巡らされていたことが判明した。また主郭部の東側には出入口に位置したと考えられる門跡が検出され、また南西側では土塁が筋違いに配置されていることが確認され、虎口を形成していたものと考えられている。また2基の火葬遺構が検出され、骨片のほか古錢などが出土した（仙台市教育委員会 2018）。

近世になると入生田家の在郷屋敷となり、『館記』には仙台藩二代藩主伊達忠宗の時、堀や土塁があつて城や要害のようで誤解を招くとのことから、土塁を崩し、堀を埋めたとの記述がある。その後は一部の土塁を残して、この地を畠や水田として利用していたと考えられる。



第34図 富沢館跡と周辺の遺跡

## 第2節 第20次調査

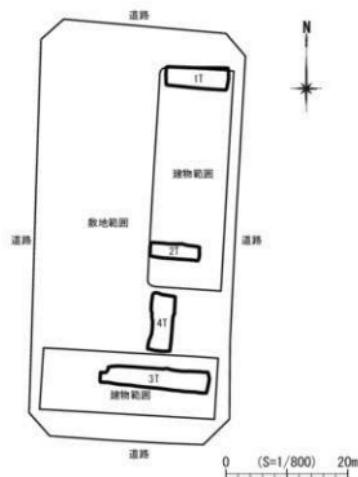


第35図 第20・21次調査区位置図

## 第2節 第20次調査

### 1. 調査要項

遺 跡 名 富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）  
 調 査 地 点 仙台市富沢駅西土地区画整理事業  
 地内 35街区  
 調 査 期 間 令和2年11月30日～12月11日  
 調査対象面積 A棟：359.04 m<sup>2</sup> B棟：287.82 m<sup>2</sup>  
 調 査 面 積 127 m<sup>2</sup>  
 調 査 原 因 共同住宅建築工事  
 調 査 主 体 仙台市教育委員会  
 調 査 担 当 仙台市教育局生涯学習部  
 文化財課調査調整係  
 担 当 職 員 主任 近藤勇亮  
 主事 木村 恒



第36図 第20次調査区配置図

## 2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和2年3月24日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和2年3月25日付H31教生文第102-116号で回答）に基づき実施した。

調査ではA棟の建築範囲内に2箇所の調査区（1トレンチ（12m×3m）、2トレンチ（8m×2m））を設定し、B棟の建物範囲内に1箇所の調査区（3トレンチ（16m×3m））を設定した。重機により碎石および盛土、基本層I～III層を除去した後、IV層上面で遺構確認作業を行った。その結果、3トレンチのIV層上面で南北方向の溝跡1条（SD1）が確認された。1トレンチではIIIa層上面で溝跡1条（SD2）が認められ、2トレンチでは遺構は確認されなかつた。3トレンチより北でSD1溝跡が検出されなかつたことから、3トレンチと2トレンチの間でのSD1溝跡のプランを確認するため、申請者側の了承の上で建物範囲外に調査区（4トレンチ（9m×3m））を追加で設けて調査を行つた。4トレンチにおいてもSD1溝跡が検出され、概ね南北方向に延びるが北東方向にやや傾いている様子が確認された。令和2年12月11日まで調査区内の遺構の完掘および計測等を行い、野外調査を終了した。

遺構の記録は、トータルステーションを用いて調査区平面図を、また必要に応じて各断面図（S=1/20）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

## 3. 基本層

今回の調査区では、厚さ約0.9～1.0mの盛土の下に大別5層、細別11層の基本層を確認した。IIIa層、IV層上面が遺構検出面であり、盛土以前の現代の耕作土と考えられる層をI層として一括した。

I a層：10YR4/1褐色灰色粘土質シルト。粘性あり、しまりあり。酸化鉄を少量斑状に含む。盛土以前の耕作土である。1、3トレンチで確認された。

I b層：10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性やや弱、しまりあり。I a層由来の粘土質シルトブロックを含む。盛土以前の耕作土である。1トレンチで確認された。

I c層：10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性やや弱（I bより弱）、しまりあり。灰黄褐色粘土質シルトを多量に含む。盛土以前の耕作土である。1トレンチで確認された。

I d層：10YR4/1褐色灰色粘土質シルト。粘性あり、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。粘土ブロックを含む。盛土以前の耕作土である。2、4トレンチで確認された。

I e層：10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト。粘性弱、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。土坑状になっており、深い箇所では下部がIV層まで至る。1、3、4トレンチで確認された。

II a層：10YR5/4にぶい黄褐色粘土。粘性あり（I aより強）、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。灰黄褐色粘土を部分的に帶状に含む。下面が乱れる。

II b層：10YR5/4にぶい黄褐色粘土。粘性あり（IIaよりやや強）、しまりあり。灰黄褐色粘土を含まず、比較的均質。1トレンチで確認された。

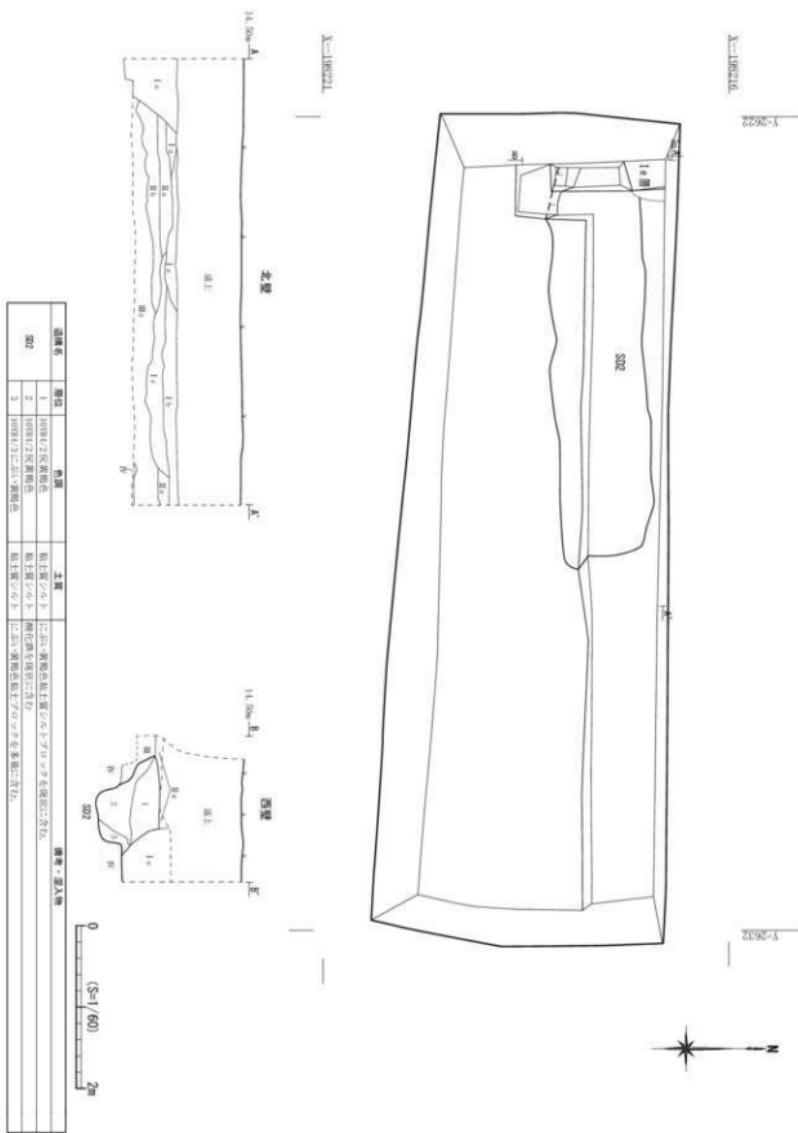
III a層：10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性やや弱、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。φ2～3mm程度の白色粒を斑状に含む。下部の方で砂質が強くなる。下面がやや乱れている。1トレンチでは全体的に砂質が強くなっている。

III b層：10YR5/2灰黄褐色砂質シルト。粘性やや弱、しまりやや弱。酸化鉄を斑状に含む。φ2～3mm程度の白色粒を斑状に含む。III a層に比べて砂質が強い。部分的に検出される。2、3、4トレンチで確認された。

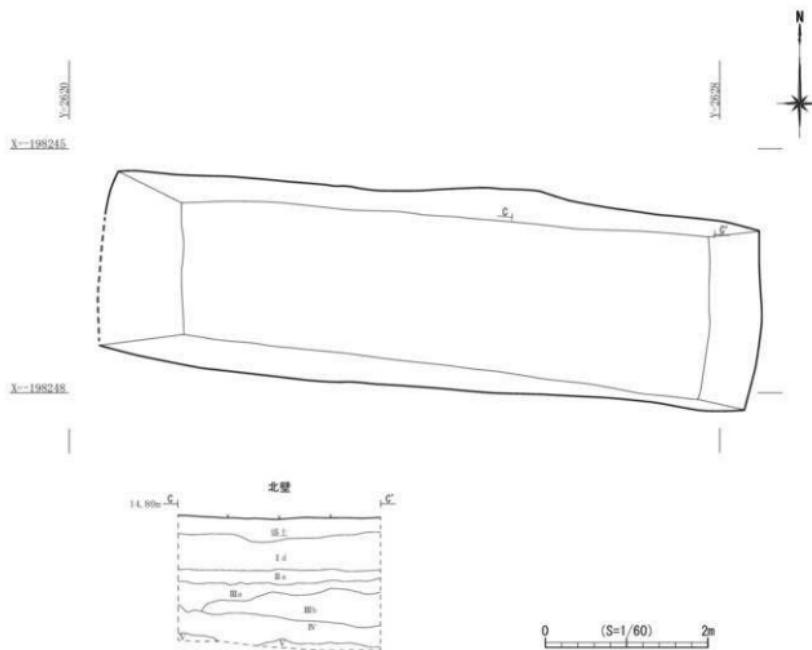
IV 層：10YR4/2灰黄褐色粘土。粘性あり、しまりあり。φ～数mmの礫を少量含む。酸化鉄を斑状に含む。

V 層：10YR4/3にぶい黄褐色粘土。粘性あり、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。IV層よりも砂質が弱い。

## 第2節 第20次調査



第31図 1トレンチ平・断面図



第38図 2トレンチ 平・断面図

#### 4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、溝跡が2条検出された。遺物は土師器片が溝跡から僅少量出土した。

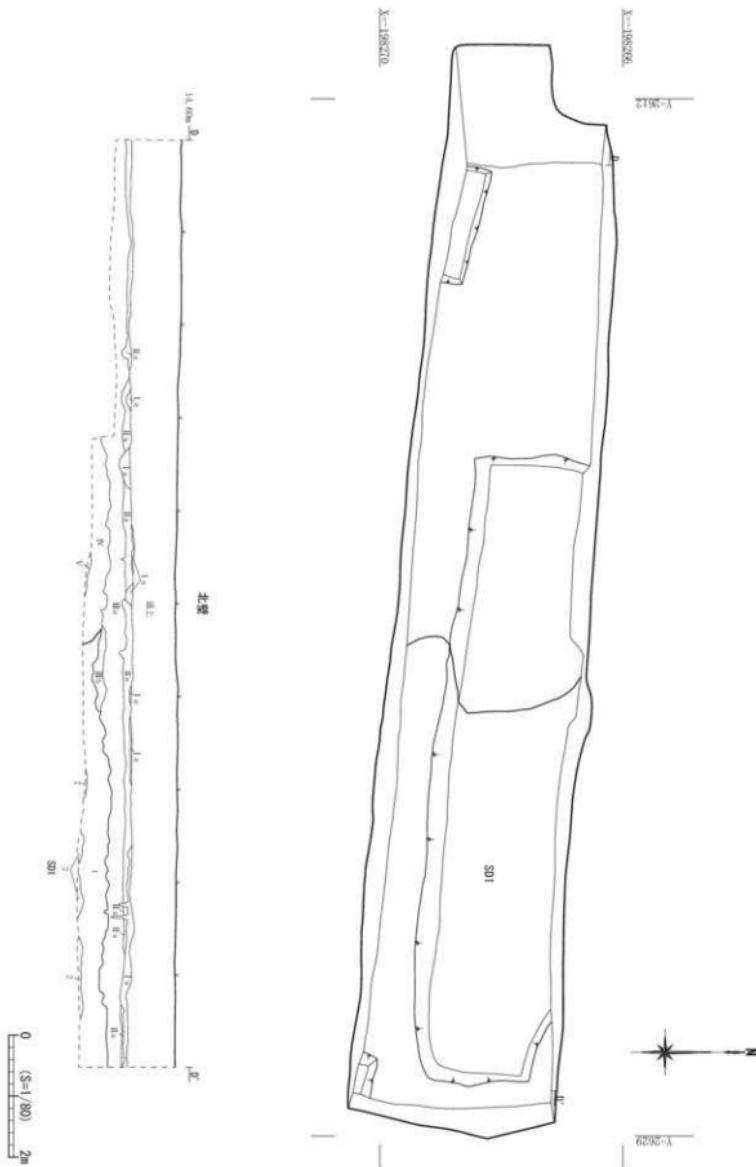
##### SD1 溝跡

3, 4トレンチのIV層上面で検出された溝跡である。3トレンチでは南北方向に延びており、4トレンチでは北東方向にやや傾いて延びていることが確認された。両調査区ともに東肩は認められていないため、幅は7.7m以上にの規模になると推測される。安全性を考量し、それ以上の掘削を行わなかったため、底面は未検出であるが、深さは0.7m以上である。堆積土の1層から土師器の小片が僅かに出土した。

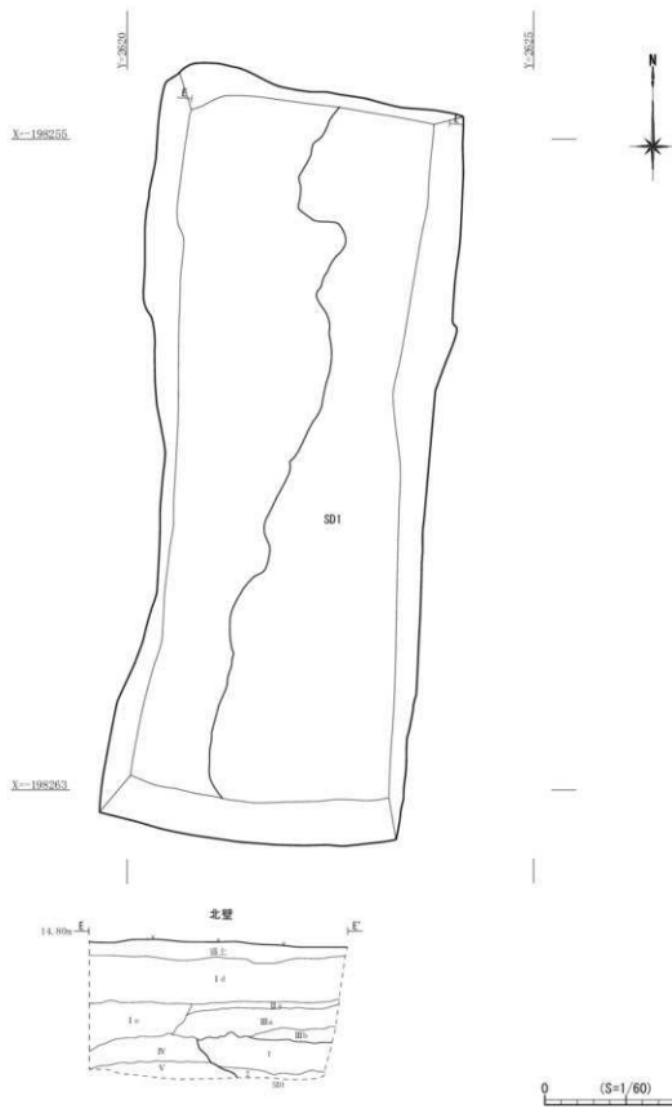
3Tでの検出長は約2.7m、検出幅は7.7mである。堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積土と考えられる。4Tでの検出長は約8.4m、検出幅は最大で約2.7mである。堆積土は3Tと対応する。

##### SD2 溝跡

1トレンチのIIIa層上面で検出された、東西方向の溝跡である。検出長は約4.8mである。西端は調査区外の西側に延びているが、東端は調査区のほぼ中央で途切れている。幅は約1.1m、深さは約0.8mである。堆積土は3層に分けられた。



第39図 3トレンチ平・断面図



第40図 4トレンチ平・断面図

遺構名	層位	色調	土質	備考・記入物
SD1	1	10YR5/2 反青褐色	粘土	少數程度の酸化鉄を斑状に含む。
	2	10YR5/3 にら、黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。含まれる酸化鉄粒が1層よりも小さい。

### 5.まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の東端に位置している。今回の調査では3・4トレンチのIV層上面でSD1溝跡が、1トレンチのIIIa層上面でSD2溝跡が検出された。

3・4トレンチで検出されたSD1溝跡は未調査区間を含めると検出長は約15mになる。また今回の調査区の南側に接する道路部分は平成25・26年に実施された確認調査のIV-44調査区が存在するが、堀跡と推定される溝跡が検出されているが、今回検出されたSD1溝跡はその延長線上に位置し、規模からも同一の遺構であると考えられる。2トレンチではSD1溝跡が検出されなかったことから、SD1溝跡は4トレンチと2トレンチの間で東に屈曲するか、途切れていると推測される。

### 引用・参考文献

仙台市教育委員会 2018 『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第466集



1. 1トレンチ 遺構検出状況（東から）



2. 1トレンチ 北壁土層断面（南東から）



3. 1トレンチ SD2溝跡断面（東から）



4. 2トレンチ完掘状況（東から）

写真図版19 富沢館跡第20次調査（1）



1. 2トレンチ北壁土層断面（南東から）



2. 3トレンチ完掘状況（南東から）



3. 3トレンチ SD1溝跡検出状況（南西から）



4. 4トレンチ SD1溝跡検出状況（南から）



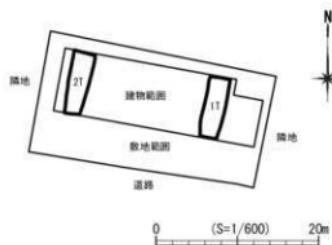
5. 4トレンチ北壁土層断面（南から）

写真図版 20 富沢館跡第20次調査（2）

## 第3節 第21次調査

## 1. 調査要項

遺跡名	富沢館跡（宮城県遺跡登録番号01246）
調査地点	仙台市太白区富沢字館東81-1
調査期間	令和3年1月7日～令和3年1月8日
調査対象面積	369.29m <sup>2</sup>
調査面積	37.5m <sup>2</sup> (2.5m × 7.5m) × 2
調査原因	長屋住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担当職員	主任 小浦真彦 主事 木村恒



第41図 21次調査区配置図

## 2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より令和2年11月9日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和2年11月12日付R2教生文第101-283号で通知）に基づき実施した。

調査では建築範囲内に2.5m × 7.5mの調査区を2箇所設定した。重機により碎石および盛土、基本層I～II層を除去した後、III層上面で遺構確認作業を行った。

その結果、1トレンチ（東側）では調査区のGL-1.5m以下に及ぶ擾乱が調査区の半分以上に及んでいることが確認され、想定されていた溝跡のプランは確認できなかった。2トレンチ（西側）においても、調査区の約半分は擾乱を受けておりGL-1.5m以下まで擾乱が及んでいることが確認された。また、擾乱が及ばない箇所でも、GL-1.5m程度までII層が堆積していることが確認された。そのため、西壁付近に側溝を設定して土層を確認したが、断面においても堀跡の肩の落ち込みは確認できなかった。令和3年1月8日まで調査区内の遺構完掘および計測等を行い、野外調査を終了した。

遺構の記録は、調査区平面図(S=1/40)および断面図(S=1/20)を作製し、デジタルカメラを用いて写真撮影を行った。

## 3. 基本層序

今回の調査区では、厚さ約0.5mの碎石・盛土の下に大別2層、細別8層の基本層を確認した。遺構確認作業はIII層上面で行った。盛土以前の現代の耕作土をI層、それ以前の耕作やその他の擾乱が及ぶ層をII層として一括した。

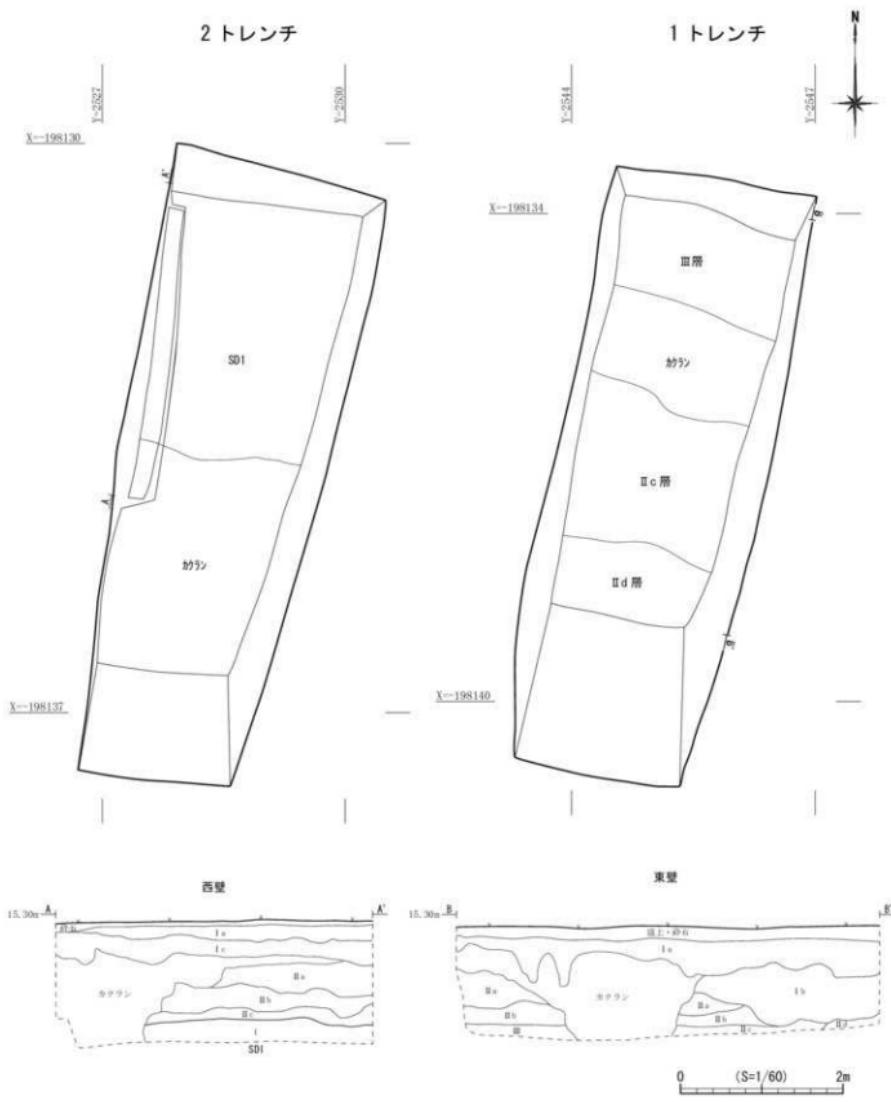
I a層：10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト。粘性やや弱、しまりあり。近現代の耕作土である。

I b層：10YR4/1 暗灰色粘土質シルト。粘性あり、しまりあり。近現代の耕作土である。

II a層：10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性あり、しまりやや弱。灰黄褐色粘土質シルトブロックを含む。現代のビニール等が混入する。

II b層：10YR4/4 暗色粘土質シルト。粘性あり、しまりやや弱。灰黄褐色粘土質シルトブロックを多量に含む。現代のビニール等が混入する。

II c層：10YR4/4 暗色粘土質シルト。粘性あり（II a層、II b層より強）、しまりあり。にぶい黄褐色粘土質シルトブロック、10YR4/2 粘土ブロックを含む。



遺構名	層位	色調	土質	備考・出土物
SD1	I	16194/3に近い黄褐色	粘土質シルト 小礫を少量含む(部分的にまとまる箇所あり)、細化鉄を斑状に含む、炭化物を少量含む。	

第42図 富沢館跡21次調査区平面・断面図

### 第3節 第21次調査

II d層 : 10YR4/6 暗褐色粘土質シルト。粘性あり（II c層と同程度）、しまりあり。灰黄褐色粘土ブロックを多量に含む。

II e層 : 10YR4/1 暗灰色粘土質シルト。粘性やや弱、しまりあり。酸化鉄を斑状に含む。下部にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。

III 層 : 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。粘性あり、しまりあり。小礫を少量含む。1トレンチでのみ確認された。

#### 4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、溝跡が1条検出された。遺物は出土していない。

##### SD1溝跡

2トレンチの北半で検出された。調査区内では肩の落ち込みが認められず、プランが不明瞭であるが、周辺調査との比較から溝跡であると推測された。安全性を考慮し遺構の掘削を行わなかったため底面は未検出である。

近隣で行われた第2次、第3次調査では、北西—南東方向の溝跡がそれぞれ検出されており、今回の調査範囲はそれら調査の中間に位置する。1トレンチの基本層Ⅲ層は、土層の特徴と検出標高から第2次調査の基本層V層と類似し、対応するものと考えられる。また、2トレンチで確認されたSD1溝跡の1層は第3次調査のSD1溝跡の1層と類似しており、対応する可能性が考えられる。そのため、明確なプランは不明であるが、今回検出されたSD1溝跡はそれら調査で認められた堀跡の延長にある可能性が推測される。

1トレンチでは、擾乱の北で基本層Ⅲ層が確認される一方、擾乱の南側では基本層Ⅲ層は認められず、基本層IIa～II d層が落ちこんでいた。2トレンチの南半は擾乱を受けているものの、北側ではII層の下にSD1の堆積土が確認され、基本層Ⅲ層は認められなかった。よって、1トレンチでは北側以外ではⅢ層が確認されず、溝跡の肩のプランも確認できないことから、北側の肩は擾乱の以前にあるものと考えられる。また、2トレンチにおいては、両肩のプランが確認できないことから、北側の肩が調査区外の北側にあり、南側の肩が擾乱の内部、または調査区外の南側にあるものと推測される。

#### 5.まとめ

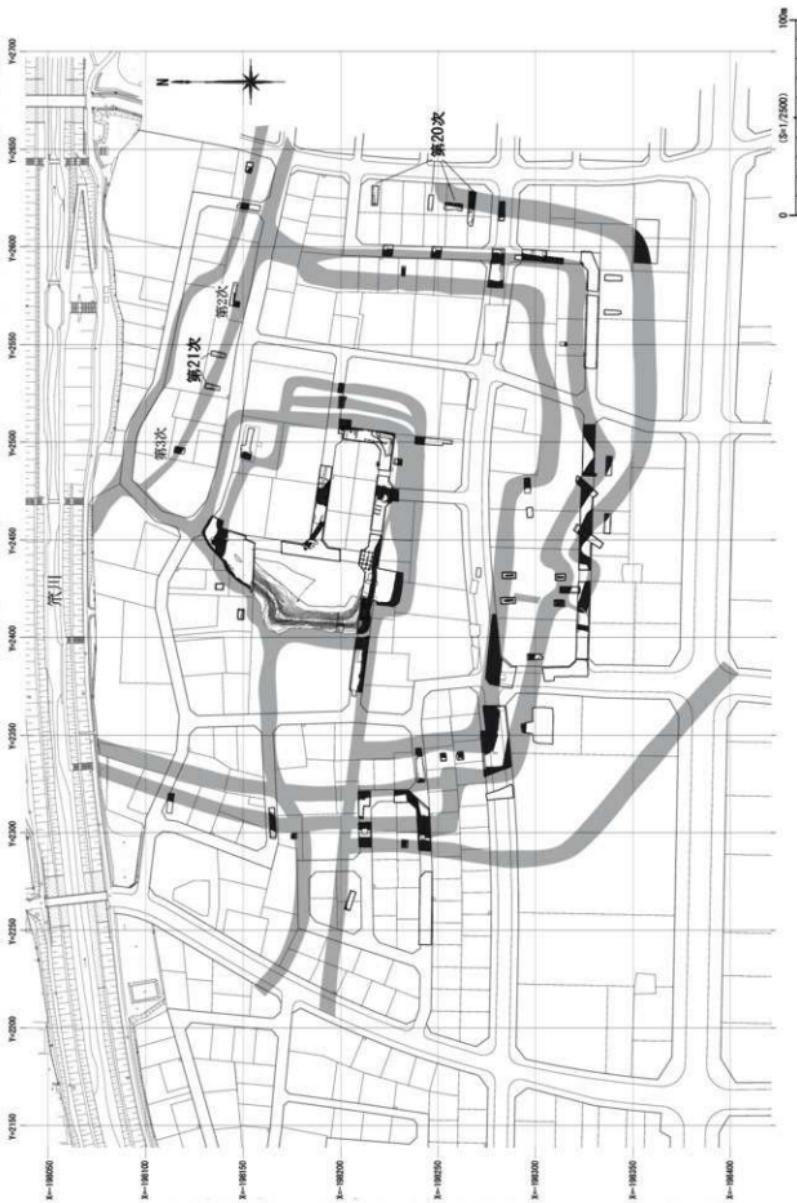
今回の調査地点は、富沢館跡の北東部に位置している。今回の調査では、1トレンチ、2トレンチともにGL-1.5m以上の擾乱を受けていることが確認され、擾乱が及ばない範囲でもGL-1.5m程度まで、現代の耕作などの影響を受けているII層が確認された。

当初、今回の調査範囲内では、第2次、第3次調査で検出された北西—南東の溝跡の延長が検出される想定されていたが、今回の調査では、溝跡は両肩とともにプランでは確認できなかった。周辺の調査結果から、1トレンチの基本層Ⅲ層が、第2次調査の基本層V層と対応し、2トレンチで確認されたSD1溝跡の1層が第3次調査で確認されたSD1溝跡の1層と対応する可能性が推測される。そのため、明確なプランは不明であるが、溝跡の推定ラインとも大きなずれがないことからも、SD1溝跡は1トレンチの擾乱より南側に北の肩があり、2トレンチの少なくとも北側はSD1溝跡の内部に入っている可能性が考えられる。

#### 引用・参考文献

仙台市教育委員会 2004 『保春院前遺跡他 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第274集

仙台市教育委員会 2013 『仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告I—平成23年度・平成24年度震災復興民間文化財発掘調査助成事業に伴う発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第416集



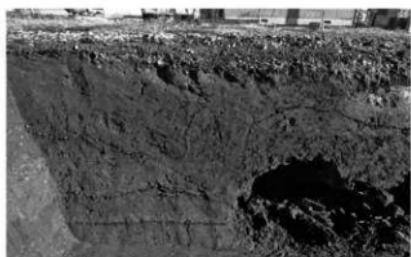
第43図 富沢館跡 検出溝跡位置図



1. 1 トレンチ完掘状況①（南から）



2. 1 トレンチ完掘状況②（南西から）



3. 1 トレンチ東壁断面 北半（西から）



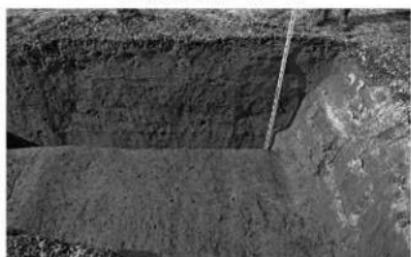
4. 1 トレンチ東壁土層断面 南半（西から）



6. 2 トレンチ遺構検出状況（北から）



6. 2 トレンチ遺構検出状況（南から）



7. 2 トレンチSD1 土層断面（東から）



8. 2 トレンチ遺構検出状況（北東から）

写真図版 21 富沢館跡第21次調査

## 第5章 京ノ中遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

京ノ中遺跡は仙台市太白区富田字京ノ北に所在する。JR 東北本線長町駅から南西へ約 3.2 km、仙台市地下鉄南北線富沢駅から西へ約 1.4 km の地点で、名取川下流域の左岸、郡山低地と呼称される沖積地帯の自然堤防上に立地している。現況は仙台市富沢駅西土地区画整理事業に伴い盛土造成され、旧来の地形は失われており、周辺は住宅地や商業施設となっている。

本遺跡は、土地区画整理事業に伴い平成 26 年度に行なわれた試掘調査で発見され、新規登録された。平成 27 年に行なわれた第 1 次調査では、竪穴住居跡 2 軒、溝跡、柱穴群が確認されており、住居が散見する集落であることが想定された。また平成 30 年度に医療施設建設工事に伴う第 2 次調査では、竪穴住居跡 15 軒、竪穴遺構、掘立柱建物跡、柵列跡、溝跡などが確認され、8 世紀後半～10 世紀前半の古代には集落が断続的に営まれ、中世には柵列と溝跡に囲まれた屋敷地であることが確認されている。

### 第2節 第3次調査

#### 1. 調査要項

遺 跡 名 京ノ中遺跡（宮城県遺跡登録番号 01573）

調 査 地 点 仙台市太白区富田字京ノ北 110、111、112 の各一部

調 査 期 間 令和 3 年 2 月 8 日～10 日（試掘調査）

令和 3 年 3 月 8 日～25 日（本発掘調査）

調査対象面積 640.96 m<sup>2</sup>

調査面積 約 266.5 m<sup>2</sup>

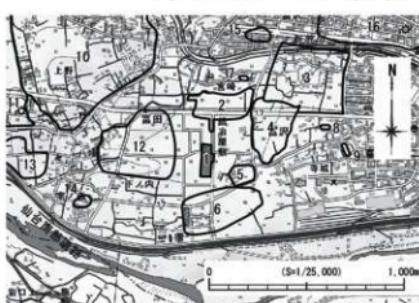
調査原因 共同住宅建築工事（北棟）

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課調査調整係

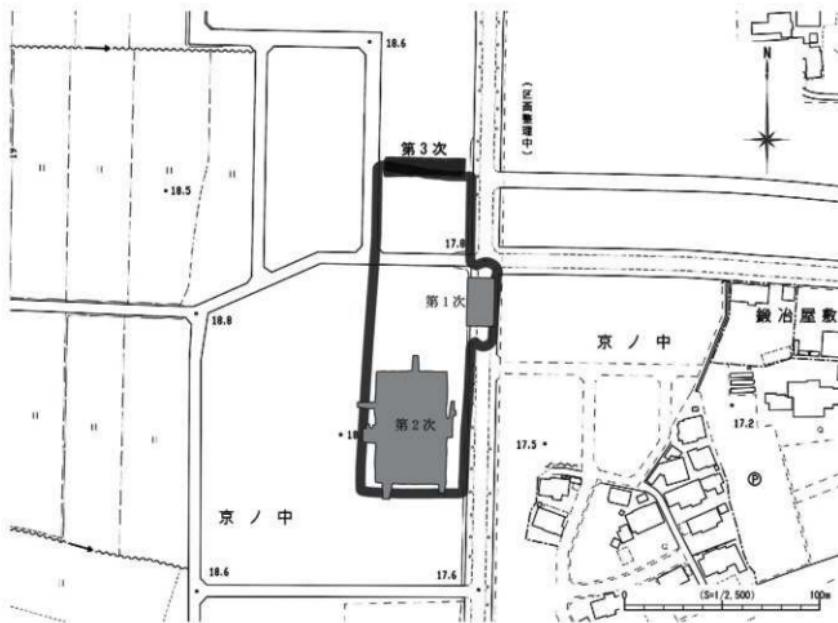
担当職員 主任 及川謙作 小浦真彦 主事 木村恒（試掘調査）

主任 小浦真彦 主事 澤田雄大（本発掘調査）



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	京ノ中遺跡	集落跡	自然堤防	平安
2	源氏居所跡 & 遺跡	集落跡	自然堤防	平安～古代～平安
3	源氏船跡	埴輪跡・集落跡	自然堤防	平安～平安～近世
4	源氏居所跡 & 遺跡	集落跡	自然堤防	平安～古代～平安
5	源氏居所跡 & 遺跡	住居跡	自然堤防・後背湿地	平安～古代～近世
6	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	古代～平安
7	吉崎遺跡	集落跡	自然堤防	平安
8	川前遺跡	散布地	自然堤防	平安～古代
9	川前遺跡	集落跡	自然堤防	平安
10	上野遺跡	集落跡	段丘	平安～古代～平安
11	山田余里遺跡	木田跡・雨敷跡	段丘・自然堤防	平安～古代～平安～近世
12	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	古生～平安
13	利瀬前遺跡	集落跡	自然堤防	平安～御代・古代～平安
14	葛田南西遺跡	散布地	自然堤防	古代～平安
15	塙田内遺跡	散布地	自然堤防	古生～平安
16	山口遺跡	集落跡・木田跡	自然堤防・後背湿地	平安～古世

第 44 図 京ノ中遺跡と周辺の遺跡

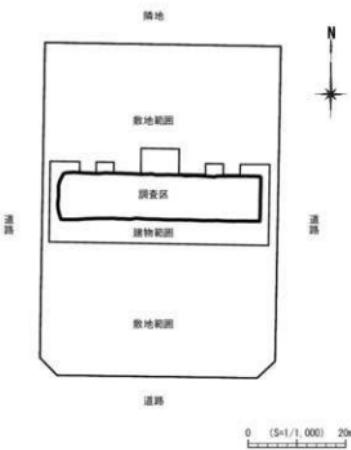


第45図 第3次調査区位置図

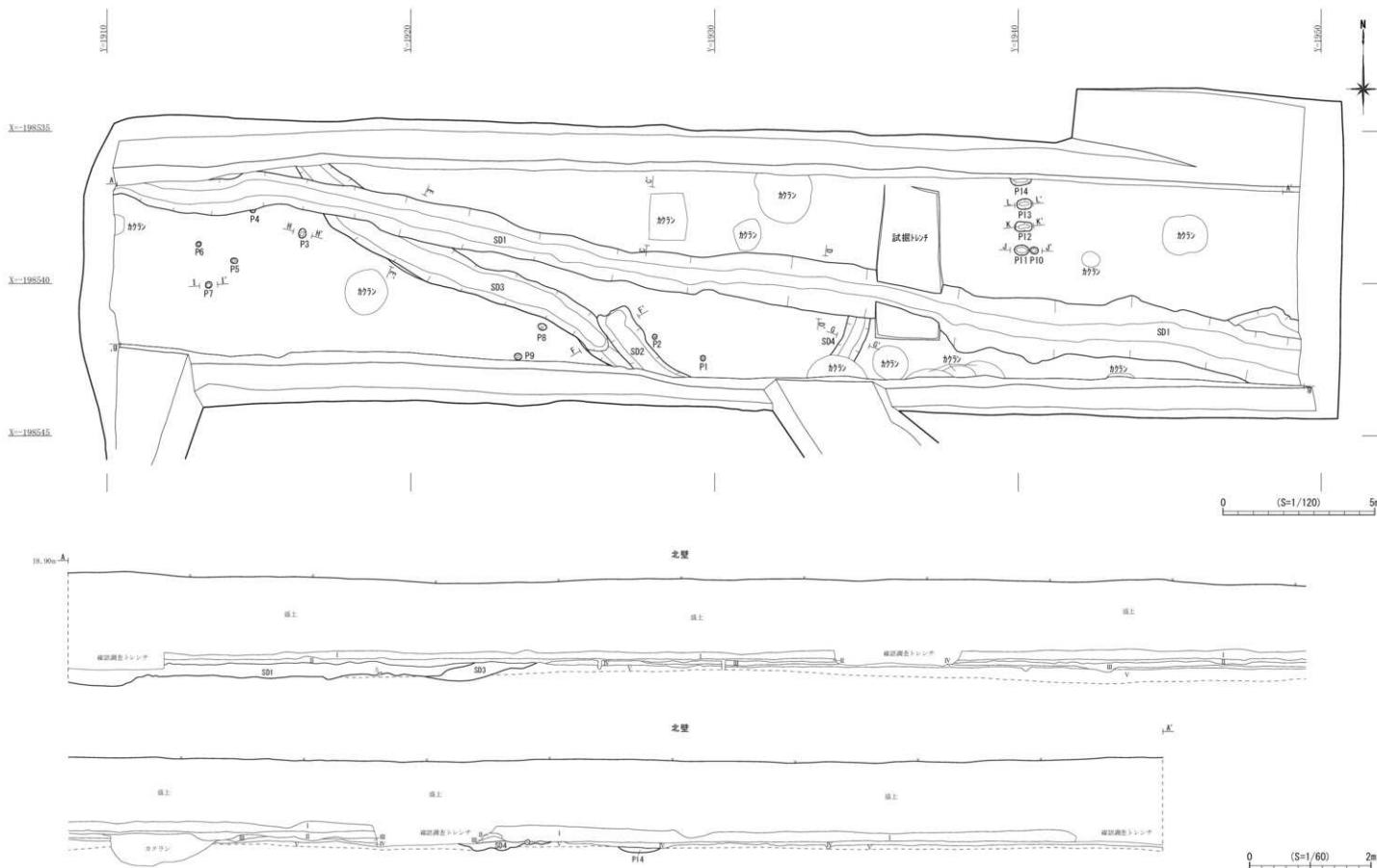
## 2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は令和3年1月14日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和3年1月18日付R2教生文第102-86号で回答）に基づき実施した。令和3年2月8日～10日に共同住宅2棟のうち北棟のみを対象として確認調査を実施、調査を行ったところ、構跡が検出され、遺物も土師器、陶器などが出土したことから、当該範囲まで遺跡範囲を拡大することを宮城県に通知し（R2教生文第3135号）、3月8日から本発掘調査を実施した。今回の発掘調査では、43.0×8.5mの調査区を設定した。埋土および基本層I～IV層を重機で除去した後、遺構確認作業と遺構の精査を行った。出土遺物は層位ごと、検出した遺構ごとに取り上げた。3月25日まで調査区内の遺構完掘および計測を行い調査的一切を終了した。

遺構の記録は、トータルステーションを用いて遺構平面図（S=1/20）を、また必要に応じて各土層断面図（S=1/20）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。



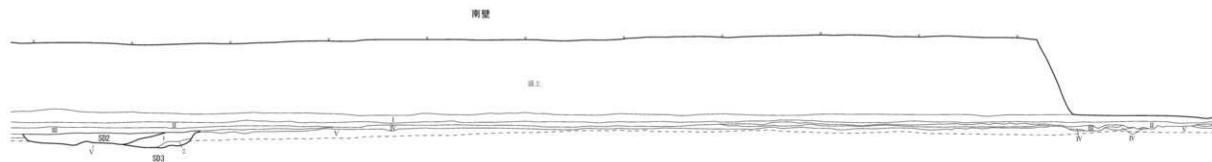
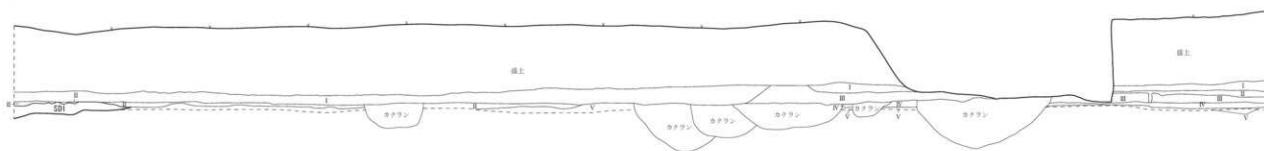
第46図 第3次調査区配置図



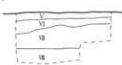
第47図 調査区平・断面図(1)



18.90m



17.20m E4 カクラン西壁 基本層



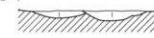
17.20m E4 SD1



17.20m E4 SD1 SD3



17.20m E4 SD3 SD2



17.20m E4 SD4



17.30m E4 P3



17.30m E4 P7



17.30m E4 P11 P10



17.30m E4 P12



17.30m E4 P13



0 (S=1/60) 2m

断面名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	2. 0m/1 黑灰色	粘土質シルト	酸化鉄を少量、微小物粒を微量含む。
	2	0.1m/1 灰色	シルト	酸化鉄を多量、マンゴー棕を微量含む。やや砂質気味。
SD2	1	10.0m/1 黑褐色	シルト	酸化鉄を多量、黑色粘土質シルトを下位に含む。
	2	8.0m/1 黑褐色	シルト	退成黃褐色を帶びた多量含む。
SD3	1	2. 0m/1 黑褐色	シルト	酸化鉄を多量含む。
	2	2. 0m/2 黑褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量含む。
	3	2. 0m/1 黑灰色	粘土質シルト	酸化シルトブロック、酸化鉄を少量含む。
P2	1	2. 0m/1 黑褐色	シルト	
P10	1	2. 0m/1 黑褐色	シルト	
	2	2. 0m/1 黑褐色	シルト	
P12	1	2. 0m/1 黑褐色	シルト	酸化物鉄・酸化鉄・灰色シルトブロックを少量含む。
P13	1	2. 0m/1 黑褐色	シルト	酸化物鉄・酸化鉄・灰色シルトブロックを少量含む。

第48図 調査区 断面図(2)



### 3. 基本層序

基本層は盛土以下に I ~ VII 層まで確認している。I ~ II 層は現代の水田耕作土で、遺構検出作業は主に V 層上面で行った。遺構検出面である V 層までの深さは GL-1.2 m である。

- I 層 : 2.5GY4/1 暗オリーブ褐色粘土。植物遺体を少量含む。層厚は約 18 ~ 31cm である。
- II 層 : 5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト。酸化鉄を多量に含む。層厚は約 5 ~ 14cm である。
- III 層 : 5Y3/1 オリーブ黒色シルト。酸化鉄を多量、マンガン粒を少量含む。層厚は約 4 ~ 10cm である。
- IV 層 : 2.5Y3/1 黒褐色シルト。酸化鉄を多量、マンガン粒を多量に含む。層厚は約 4 ~ 11cm である。
- V 層 : 2.5Y4/1 黄灰色シルト。酸化鉄を多量、マンガン粒を多量に含む。遺構検出面。層厚は約 30 ~ 34cm である。
- VI 層 : 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト。層厚は約 10 ~ 20 cm である。
- VII 層 : 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト。層厚は約 24 ~ 37cm である。
- VIII 層 : 10YR4/4 褐色粘土質シルト。層厚は約 23cm 以上である。

### 4. 発見遺構と出土遺物

#### (1) 調査の概要

今回の調査で確認された遺構は、溝跡 4 条、ビット 14 基である。調査区中央には、SD1 溝跡が東西方向に延びており、これに切られて SD2 ~ 4 溝跡が確認されている。また、SD1 溝跡の周辺には径約 0.6 ~ 1.1m および径約 1.5 ~ 2.1m の円形を呈する搅乱が 11 基確認されている。掘り込み面や堆積土から比較的新しい土坑ないし井戸跡とみられ、取水・貯水に用いられたと考えられる。遺物は主に遺構検出面および SD1・3 溝跡から出土しており、縄文土器、土師器、須恵器、赤焼け土器、陶器、磁器、瓦、石器、金属製品などである。

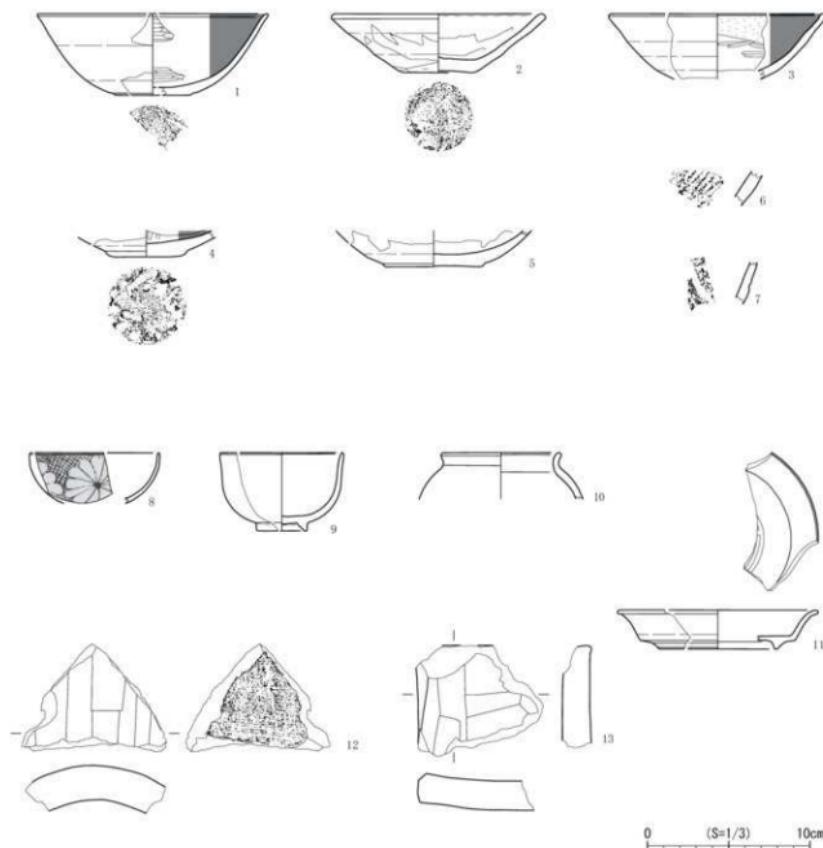
#### (2) 溝跡

##### SD1 溝跡

調査区の北西～南東にかけて検出された東西方向に延びる溝跡で、SD3・4 溝跡より新しい。調査区壁断面の觀察から、掘り込み面は明確ではないが II 層に覆われており、IV 層を掘り込み面とする SD3 溝跡を切る。検出長は約 41.5m で、調査区外の東西方向へさらに延びる。規模は上端幅 1.5 ~ 2.5m、下端幅 0.5 ~ 0.8m、深さは検出面から約 0.5m 前後である。断面形状は半円形ないし逆台形を呈し、立ち上がりはやや急角度である。堆積土は 2 層確認され、1 層にはビニールゴミ等が混入する。出土遺物は、堆積土から縄文土器、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、石器、金属製品等が出土しており、その中から縄文土器 1 点（第 49 図 7）、ロクロ土師器壊 1 点（第 49 図 2）、平瓦 2 点（第 49 図 13・第 50 図 1）、陶器碗と小壺がそれぞれ 1 点（第 49 図 9・10）、磁器碗と小皿がそれぞれ 1 点（第 49 図 8・11）、磨製石斧 1 点（第 50 図 4）、不定形石器 1 点（第 50 図 3）を図化している。

##### SD2 溝跡

調査区中央南寄りで検出された南北方向に延びる溝跡で、SD3 溝跡より新しい。検出長は約 3.2m で、北側は溝跡の端部となって途切れしており、南側は調査区外へ更に延びる。規模は上端幅約 1.1m、下端幅 0.5 ~ 0.6m、深さは検出面から約 0.2m である。断面形状は皿形ないし逆台形を呈し、立ち上がりはやや緩やかである。堆積土は 1 層確認された。遺物は出土していない。本遺構は SD3 溝跡の延長線上に位置し、やや入れ違うようにして重複している。堆積土も類似することから、本遺構の方がやや新しい時期の拡張ないし延長された溝跡と考えられる。

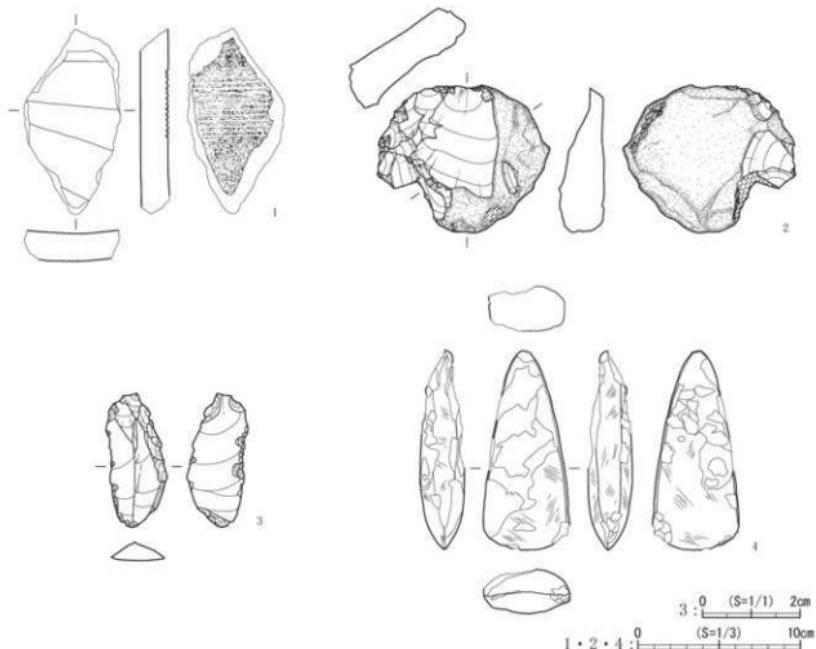


図版 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	基盤	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真 図版
						口徑	底径	厚さ				
1	D-3	S03	堆積土	e7x土焼器	坪	(14.0)	(1.6)	5.0	ロクロナデ 泥：回転舟切	ヘラミガニ 黒色処理	粘土綈密 面面合符行	25-1
2	B-1	S01	堆積土	e7x土焼器	坪	(12.8)	6.2	3.6	ロクロナデ 舟下端：手持ちハラケズリ	ロクロナデ～コテあて	泥棒	25-2
3	B-4	S03	堆積土	e7x土焼器	坪	(13.0)			ロクロナデ	ヘラミガニ 黑色処理	粘土綈密	25-3
4	D-5	S03	堆積土	e7x土焼器	坪		4.8		ロクロナデ 泥：植物種子他	ヘラミガニ 黑色処理	粘土綈密	25-4
5	D-2		1～IV	赤土土器	坪		(6.0)		ロクロナデ 泥：切離し不明 斜直	ロテアド	泥棒	25-5
6	A-2	S03	堆積土	調文土器	凹面				夏機文			25-6
7	A-1	S03	堆積土	調文土器	凹面				沈綱文灰陶	紅燒？		25-7
8	J-2	S01	堆積土	陶器	坪	(2.8)			突付 菊花文模し 透明釉		肥前 8c 後半～10c 前半 粘土白色	25-8
9	I-1	S01	堆積土	陶器	坪	(7.0)	3.1	4.8	ロクロナデ 刷毛舟 斜直	灰釉	大堀町 10c 中頃～後半	25-9
10	I-2	S01	堆積土	陶器	小底	(7.2)			灰釉			25-10
11	J-1	S01	堆積土	陶器	小底	(12.2)	(7.2)	2.4	凸縁 透印輪	見达「海」文字 型押	轟戸美濃 10c 中頃～後半	25-11

図版 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	基盤	法量 (cm)			備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ		
12	F-1		神田面	瓦	丸瓦	2.1			内面：ナゲ 回面：コビキ板 布目	25-12
13	G-1	S01	堆積土	瓦	平瓦	1.8			内面：ナゲ 回面：ナゲ	25-13

第49図 第3次調査区出土遺物



第50図 第3次調査区出土遺物

## SD3溝跡

調査区中央南寄り～北西にかけて検出された北西一南東方向に延びる溝跡で、SD1・2溝跡より古い。検出長は約11.4mで、調査区外の南北方向へさらに延びる。規模は上端幅約1.0～1.4m、下端幅約0.5～0.7m、深さは約0.3mである。断面形状は皿形ないし半円形を呈し、立ち上がりはやや急角度である。堆積土は2層確認された。出土遺物は、堆積土から縄文土器、非クロロ土師器、クロロ土師器、石器等が出土しており、その中から縄文土器1点（第49図6）、ロクロロ土師器坏3点（第49図1）、不定形石器1点（第50図2）を図化した。

## SD4溝跡

調査区中央東寄りで検出された南北方向に延びる溝跡で、SD1溝跡より古い。検出長は約1.8mで、調査区外の南北方向へさらに延びる。規模は上端幅約0.8m、下端幅約0.3m、深さは検出面から約0.3mである。断面形状は半円形を呈し、立ち上がりはやや急角度である。堆積土は3層確認された。遺物は出土していない。

(3) ビット

P1～14

調査区全域に散在しているが、主に中央部から西側で検出された。平面形状は円形ないしやや歪な橢円形を呈し、径約15～30cmのものと径約50～70cmのものがある。検出面からの深さは10～18cmである。堆積土は1層のみで、柱痕跡は確認されなかった。またP11～14の4基は規模・堆積土等が類似しており、約0.8mの等間隔に並んでいることから、柱列の可能性が考えられる。遺物は出土していない。

(4) 遺構外出土遺物

検出面や搅乱等から縄文土器、非クロロ土師器、ロクロ土師器、赤焼土器、須恵器、陶器、磁器、瓦、金属製品等が出土しており、その中から1点（第49図5）、丸瓦1点（第49図12）を図化した。

5.まとめ

今回の調査は、京ノ中遺跡の北端部に位置し、今回の建築計画に伴い実施した試掘調査により遺跡範囲を拡大した箇所である。

今回の調査で発見された遺構は、溝跡、柱列、ビットなどである。溝跡のうち調査区の大半を占めるSD1溝跡は、1975年の航空写真（写真図版23-5）でも確認できる用水路とほぼ位置が合致している。出土遺物は、縄文土器や土師器、近世から近現代の陶磁器に加え、ビニールゴミも混入しており、水路機能時に京ノ中遺跡を含む周辺の遺跡から混入した可能性も考えられる。SD2～4溝跡は古代の溝跡で、第1・2次調査で確認された集落との関連がうかがわれる。今回の調査区からは竪穴住居跡は確認されなかったことから集落の範囲は本調査区まで広がっておらず、その外縁部に位置するものと考えられる。

引用・参考文献

仙台市教育委員会 2010 『沼向遺跡第4～34次調査』仙台市文化財調査報告書第360集

仙台市教育委員会 2018 『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第466集

仙台市教育委員会 2020 『京ノ中遺跡第2次調査』仙台市文化財調査報告書第481集

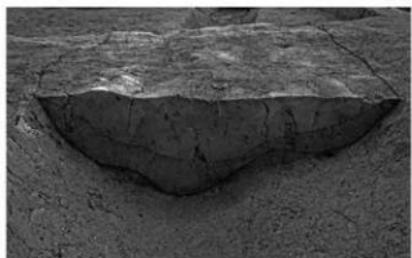


1. 調査区完掘状況全景（1）（東から）



2. 調査区完掘状況全景（2）（西から）

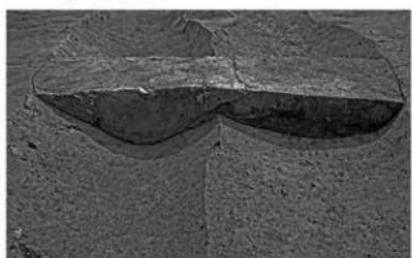
写真図版 22 京ノ中遺跡第3次調査（1）



1. SD1 溝跡土層断面 D-D' (西から)



2. SD1 溝跡完掘状況 (西から)



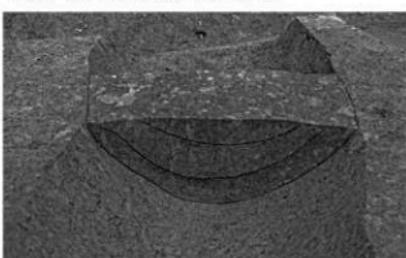
3. SD1・3 溝跡土層断面 E-E' (西から)



4. SD2・3 溝跡完掘状況 (北西から)



5. SD2・3 土層断面 F-F' (南から)



6. SD4 溝跡土層断面 (南から)



7. SD4 溝跡完掘状況 (南から)

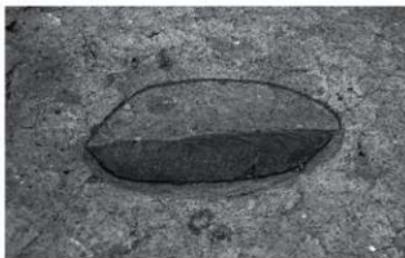


8. P3 土層断面 (南から)

写真図版 23 京ノ中遺跡第3次調査 (2)



1. P10 ~ 14 完掘状況（北から）



2. P13 土層断面（南から）



3. 調査区北壁中央付近基本層断面（南から）



4. 検出面V層以下基本層断面（東から）



5. 国土地理院撮影航空写真（1975年撮影）

写真図版 24 京ノ中遺跡第3次調査（3）



写真図版 25 京ノ中遺跡第3次調査出土遺物

## 第6章 総括

### 1. 穴田東窯跡第1次調査

今回の調査地点は遺跡の北側に位置する。穴田東窯跡はこれまで遺構は見つかっていなかったが、今回の調査で初めて窯跡2基、溝跡2条、灰原2基が検出され、289kg以上の遺物が出土した。そのほとんどが瓦であったことから窯跡は瓦を主体に生産した瓦窯であったことが判明した。検出された遺構はS02窯跡が最も古く、S01窯跡とSD1・2溝跡は同時期に機能した一連の遺構で、2号灰原は最も新しい遺構である可能性が高く、斜面の下側から順に遺構が構築されたものと考えられる。S01窯跡の南側には1号灰原が、両脇にはSD1・2溝跡が配されておりSD1・2溝跡はS01窯跡の周縁をめぐる排水溝、もしくは作業用の通路であったと推測される。

出土した軒瓦が宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦のみであることから、遺構の時期は多賀城IV期の9世紀後半以降に比定されるが、この時期は貞觀11(869)年に起きた大地震により多賀城や陸奥国分寺などにも大きな被害が出たことが知られており、実際に陸奥国分寺跡では今回出土した宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦は創建期の瓦に次ぐ量が出土している。穴田東窯跡の近隣の堤町B窯跡や堤町瓦窯跡、五本松窯跡などでも同様の軒先瓦や須恵器が出土していることから、これらの窯跡は一連の窯跡群を形成し、貞觀地震からの復興のために瓦を生産していたと考えられる。また平瓦は回型台を利用して凹面を調整したB類が一定数出土した。この形式は多賀城跡の調査では平瓦II B類に、陸奥国分寺の1989年の調査ではV類に分類され、時期は多賀城III期(9世紀後半以前)までと想定されていた。しかし前述した五本松窯跡の第1・2次調査や利府町の硯沢・大沢窯跡の調査でも多賀城IV期以降の軒瓦がこのII B類の平瓦とともに出土しており、多賀城IV期以降も製作されていたことが指摘されていた。今回の穴田東窯跡で出土した資料についてもそれを裏付けるものであると言える。

### 2. 富沢遺跡第151次調査

調査地点は、遺跡の中央よりやや東に位置する。調査の結果、水田跡5面が検出され、南北方向の畦畔状の段差1条と非耕作域1箇所がわざかに確認された。畦畔状の段差は火山灰を含む土層を母材としており、今回の調査地点の北西隣接地で実施された第13次調査で検出された畦畔とはほぼ同一方向かつ同一の層位であることから、関連する同時期の遺構であると考えられる。

### 3. 富沢遺跡第152次調査

調査地点は遺跡北端に位置し、対象地内に24m<sup>2</sup>の東西に長いトレンチを設定して行った。調査地点では過去の調査歴より、古代の条里型土地割に関わる大畦畔の検出が想定されていた。しかし、土地造成前の耕作による上層からの擾乱を受け、水田跡や畦畔、火山灰層などは確認されなかった。

### 4. 富沢館跡第20次調査

調査地点は、遺跡東端に位置する。調査は計4か所のトレンチで行い、溝跡2条が検出された。特に南北方向のSD1は、幅7.7m以上、深さ0.7m遺構という規模からも堀跡であると考えられる。今回の調査地点の南側で実施された確認調査(IV-44区)で検出された堀跡と同一の遺構であると考えられ、北へ伸びていくものと想定されたが、今回の調査範囲の北半では堀跡が検出されなかったことから、東に屈曲するか途切れる可能性が考えられる。

## 5. 富沢館跡第21次調査

調査地点は、遺跡北東部に位置し、2か所のトレンチで調査を行った。調査地点は後世の土地利用によって大きく搅拌されていたが、溝跡1条と推測される遺構が1条検出された。今回の調査範囲は、第2次、第3次調査で検出された北西—南東の溝跡の中間部に位置しており、土層の特徴と検出標高の比較から、第21次調査のSD1はプランが不明瞭ではあるものの、それら調査で確認された溝跡の延長部であると推測される。

## 6. 京ノ中遺跡第3次調査

調査地点は、遺跡の北部に位置する。発見された遺構は溝跡、ピットである。第1・2次調査で確認されている竪穴住居跡は、本調査区では確認されなかつたことから、居住域の北側は本調査区まで至っていないことが確認された。検出された溝跡や基本層中からは、古代の土師器や須恵器を中心に縄文土器や石器、中近世以降の陶磁器、瓦等が出土した。

# 報告書抄録

ふりがな	あなだひがしきまあとはか						
書名	穴田東窓跡ほか						
副書名	発掘調査報告書						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第498集						
編著者名	及川謙作 早川太陽 木村 恒 澤日雄大 斎野裕彦						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒 980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目 5-12 仙台市役所 上杉分庁舎 10 階 TEL : 022-214-8894						
発行年月日	令和4年4月11日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町 村	道路 番号				調査原因
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
要約							
穴田東窓跡 (第1次)	宮城県仙台市青葉区堤町2丁目	04101 01444	38° 17' 19"	140° 52' 01"	2021.7.8～ 2021.7.30	約 70.0 m <sup>2</sup>	記録保存調査 (共同住宅建築)
	窓跡	平安	平安	窓跡、溝跡、灰原	瓦、須恵器		
窓跡 2基と付随する形で溝跡と灰原が検出された。各遺構および基本層からは大量の瓦が出土した。							
富沢遺跡 (第151次)	宮城県仙台市太白区長町南3丁目	04104 01369	38° 13' 28"	140° 52' 41"	2021.8.23～ 2021.10.18	約 93.6 m <sup>2</sup>	記録保存調査 (共同住宅建築)
	水田跡、包含地	旧石器 ～近世	水田跡	土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、自然遺物			
水田跡 5面、畦畔状の段差1条と非耕作域が検出された。遺物は主に土師器が出土した。							
富沢遺跡 (第152次)	宮城県仙台市太白区鹿野3丁目	04104 01369	38° 13' 35"	140° 52' 22"	2021.12.6～ 2021.12.10	約 24.0 m <sup>2</sup>	記録保存調査 (共同住宅建築)
	水田跡、包含地	旧石器 ～近世	水田跡	土師器			
水田跡や畦畔は検出されなかった。							
富沢駅跡 (第20次)	宮城県仙台市富沢駅西土地区画整理事業地内	04104 01246	38° 12' 50"	140° 51' 48"	2020.11.30～ 2020.12.11	約 138.0 m <sup>2</sup>	記録保存調査 (共同住宅建築)
	城館跡、集落跡	繩文・ 平安～近世	溝跡	土師器			
中～近世の城館に伴うと考えられる、溝跡が検出された。							
富沢駅跡 (第21次)	宮城県仙台市太白区富沢字館	04104 01246	38° 12' 54"	140° 51' 44"	2021.1.7～ 2021.1.8	約 37.5 m <sup>2</sup>	記録保存調査 (共同住宅建築)
	城館跡、集落跡	繩文・ 平安～近世	溝跡	遺物なし			
中～近世の城館に伴うと考えられる、溝跡が検出された。							
京ノ中遺跡 (第3次)	宮城県仙台市太白区富沢字京ノ北	04104 01573	38° 12' 41"	140° 51' 19"	2021.3.4～ 2021.3.25	約 646.0 m <sup>2</sup>	記録保存調査 (共同住宅建築)
	集落跡	奈良～中世	遺跡の北辺を区画すると推測される溝跡が検出され、古代から近世にかけての遺物が出土した。				

---

仙台市文化財調査報告書第498集

## 穴田東窯跡 ほか

発掘調査報告書

2022年4月

発行 仙台市教育委員会  
仙台市青葉区上杉1丁目5-12  
仙台市役所上杉分庁舎10階  
文化財課 TEL 022(214)8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷  
仙台市宮城野区苦竹三丁目1-14  
TEL 022(231)2245㈹

---



